平生所レ好物。今日多在レ此。　平生好む所の物、今日多く此に在り。
此外更何思。市朝心已矣。　此外更に何ぞ思はん、市朝心已みぬ。

【字解】【一】履道里　洛陽の里の名。【二】岸莎　岸に生えてゐる細草。

【題義】七月一日に作つた詩で、初秋閑居の景況を敍した詩である。

【詩意】七月一日となり秋氣がこの履道里にもやつて來た。閑居して清澄の景を見、漸く高興を起すであらう。今や林間には雨が歇み池上には涼風が起り、橋や竹が鮮鮮として岸の細草が靡靡としてゐる。古色を帶びた巖石の横はる處を清く淺い水がさらさらと流れてゐる。まるで奥山のやうで中門の前とは思はれない。二人の僮兒が坐臥に侍し、一本の杖が行止に伴ひ、飢ゑては胡麻粥の香氣を聞き、渴しては雲母湯の美味を覺える。我が好む所のものが多く此處に存在するから、名利を棄てた今日に於ては、此外更に求むる所は何もない。

開レ襟

開レ襟何處好。竹下池邊地。　襟を開く何れの處か好き、竹下池邊の地。
餘熱體猶煩。早涼風有レ味。　餘熱體猶煩はしく、早涼風に味有り。
黄萎槐蘂結。紅破蓮芳墜。　黄萎みて槐蘂結び、紅破れて蓮芳墜つ。
無レ奈毎年秋。先來入二衰思一。　奈んともする無し毎年の秋、先づ來りて衰思に入る。

【字解】【一】槐蘂　槐の花。槐は初夏花を開く。其色黄白。【二】衰思　衰老せる心。

【題義】襟を開いて涼を納れる意。

【詩意】竹下池邊の好地を選び、襟を開いて涼を納れる。殘暑退かずして體猶懶けれども早涼の風が稍快く感ぜられる。黄色な槐の花は萎み紅蓮の花も破れて、何處を見ても秋の色ならぬはない。毎年秋になれば哀愁が先づ我が衰老せる心に食ひ入るのを奈んともすることが出來ない。

自二賓客一遷二太子少傅分司一　賓客より太子少傅分司に遷る

頭上漸無レ髮。耳間新有レ毫。　頭上漸く髮無く、耳間新に毫有り。
形容逐レ日老。官秩隨レ年高。　形容日を逐ひて老い、官秩年に隨ひて高し。
優饒又加レ俸。閒穩仍分レ曹。　優饒又俸を加へられ、閒穩仍曹を分つ。
飲食免二藜藿一。居處非二蓬蒿一。　飲食は藜藿を免れ、居處は蓬蒿に非ず。
何言家尚貧。銀槌提二綠醪一。　何ぞ言はん家尚貧しと、銀槌綠醪を提ぐ。

勿レ謂身未レ貴。金章照二紫袍一。謂ふ勿れ身未だ貴からずと、金章紫袍を照す。
誠合レ知二止足一。豈宜二更貪饕一。誠に合に止足を知るべし、豈宜しく更に貪饕すべけんや。
默然心自問。於レ國有二何勞一。默然として心に自ら問ふ、國に於いて何の勞か有ると。

【字解】【一】分レ曹　部を分ちて事を治むること。東都に分司するをいふ。【二】藜藿　あかざと豆の葉。【三】蓬蒿　よもぎの生えた荒地。【四】銀榼　銀の杯。綠醪は綠色の酒。【五】金章　黃金の官印。紫袍は官服なり。紫の上衣。【六】止足　老子に知レ足不レ辱、知レ止不レ殆とある。【七】貪饕　貪ること。

【題義】太子賓客（官名）から太子少傅・分司東都（官名）に轉任を命ぜられた時の作で、開成元年樂天年六十五の時である。

【詩意】腦天には段段毛がなくなり耳のあたりには白毛が殖えて來て、容色は日增しに衰へるが官位は年年高くなる。今年も陞進して俸祿を加へられ、東都に分司して益ゝ閑散になり、相當な物を食つて相當な處に住み、銀の杯で綠酒を傾け、金印が紫袍を照してゐるのだから、決して貧賤だとは謂はれない。人は止まる所を知り足ることを知るのが大事だから、自分は此上富貴にならうなどとは毛頭思はず、ただ獨り心に問うてゐる。「一體お前は國家に如何なる功勞があつたのだ。格別功勞はないではないか」と。

自在

自在

杲杲冬日光。明暖眞可レ愛。杲杲たり冬日の光、明暖眞に愛す可し。
移レ榻向レ陽坐。擁レ裘仍解レ帶。榻を移し陽に向ひて坐し、裘を擁して仍帶を解く。
小奴搥二我足一。小婢搔二我背一。小奴我が足を搥し、小婢我が背を搔く。
自問我爲レ誰。胡然獨安泰。自ら問ふ我を誰とか爲す、胡ぞ然く獨り安泰なると。
安泰良有レ以。與レ君論二梗槩一。安泰良に以有り、君が與に梗槩を論ぜん。
心了事未レ了。飢寒迫二於外一。心了すれども事未だ了せざれば、飢寒外に迫る。
事了心未レ了。念慮煎二於內一。事了すれども心未だ了せざれば、念慮內に煎る。
我今實多レ幸。事與レ心和會。我今實に幸多く、事と心と和會す。
內外及二中間一。了然無二一礙一。內外より中間に及ぶまで、了然として一礙無し。
所以日陽中。向レ君言二自在一。所以に日陽の中、君に向ひて自在を言ふ。

【字解】【一】杲杲　明なる貌。【二】榻　こしかけ。【三】與レ君　君は讀者を指して言ふ。與はタメニと訓す。梗槩は大略。

【題義】身心の自由な狀を述べた詩である。

【詩意】冬の日が明るく暖かで眞に愛すべきである。因つて榻を移して日當りのよい處に陣取り、

裘を擁し帶を解いてくつろぎ、小奴をして足を打たせ、小婢をして背を搔かせ、乃ち自ら問うた。「一體俺は何物であつて、此の如き安泰を得てゐるのであらうか」と。併し考へて見れば安泰を得てゐるには大に理由があるのだ。少しく君の爲に述べて見よう。「心は能く事理を悟つて安んじてゐても事物が思ふに任せぬ時は飢寒が外から迫つて來る。事物は思ふ儘になつても心に滿足を知らなければ心中に憂が絶えない。所が我は幸にも事と心とが能く和會し、內にも外にも中間にも何の礙もなく、身心ともに自由自在である。故に此の通り日なたぼつこをしながら君の爲に自在を說いてゐるのだ。」

詠史　九年十一月作。

秦磨利刀斬李斯。　秦は利刀を磨ぎて李斯を斬り、
齊燒沸鼎烹酈其。　齊は沸鼎を燒きて酈其を烹る。
可憐黃綺入商洛。　憐む可し黃綺商洛に入り、
閒臥白雲歌紫芝。　閒に白雲に臥して紫芝を歌ふ。
彼爲葅醢机上盡。　彼は葅醢と爲りて机上に盡き、
此作鸞凰天外飛。　此は鸞凰と作りて天外に飛ぶ。

詠史　九年十一月の作。

【字解】【一】酈其　酈食其なり。漢に仕へて齊の七十餘城を說き下した。後韓信の齊を襲ふに及び、齊は食其を以て己を賣るとなし遂に之を烹殺した。【二】可憐　あつぱれ。稱讚の語。黃綺は夏黃公・綺里季・商山四皓中　人。【三】紫芝　古今樂錄に、四皓隱居、高祖聘之、四皓仰天歎而作歌、有曰、曄曄紫芝、可以療飢、唐虞往矣、吾當安歸と　ある。【四】葅醢　肉醬なり。

去者逍遙來者死。　去る者は逍遙として來る者は死す、
乃知禍福非天爲。　乃ち知る禍福は天爲に非ざるを。

【題義】太和九年十一月甘露の變について所感を述べたのである。初め文宗皇帝が宰相李訓・鄭注等と宦官を誅せんことを謀り、訓は人をして「金吾廳事の後の石榴の上に甘露が降つた」と奏せしめ、帝は宰相に命じて先づ往きて之を視しめた。訓は陽つて　眞に非ず」と言上した。帝は更に宦官仇士良をして諸〻の宦官を率ゐて往き視しめた。士良至り、兵を執る者無數なるを見、驚き走りて變を告げ、遂に一味の者を殺し、李訓も人の殺す所となり、かくて宦官を誅せんとの企ては失敗に終つた。此騷ぎを甘露の變といふ。

【詩意】秦は利劍を磨ぎて李斯を斬り、齊は沸湯の中に酈食其を烹殺した。勢利に溺るる者の最後は皆この通りである。夏黃公や綺里季は遁れ世を遁れて商山に隱れ、白雲に臥して紫芝曲を歌つた。彼は葅醢にせられて机上に盡き、此は鸞鳳となつて天外に飛翔し、一は逍遙として樂み一は身を亡ぼした。これを觀ても禍福は天爲ではない人爲であることがわかる。

因夢有悟

夢に因つて悟るあり

交友淪歿盡。悠悠勞夢思。　交友淪歿し盡き、悠悠として夢思を勞す。

平生所厚者、昨夜夢見之。
夢中幾許事。枕上無多時。
欸曲數杯酒。從容一局碁。

碁酒、皆夢中所見事。

初見韋尚書。弘景金紫何輝輝。
中遇李侍郎。建笑言甚怡怡。
終爲崔常侍。亮意色苦依依。
一夕三改變。夢心不驚疑。
此事人盡怪。此理誰得知。
我粗知此理。聞於竺乾師。
識行妄分別。智隱迷是非。
若轉識爲智。菩提其庶幾。

【字解】【一】論殁　死亡する。【二】悠悠　憂ふる貌。詩經に悠悠我思とある。【三】欸曲　うちとけて樂む。【四】金紫　金印紫綬。【五】依依　なつかしげなる貌。【六】竺乾師　竺乾公ともいふ。佛の異稱。【七】識行　識は佛語に六識・七識・八識・九識等の別あり。眼・耳・鼻・舌・身・意の六種の心識を六識といふ。行は身・口・意の三業に造作する行業をいふ。【八】轉識爲智　成唯識論卷十に、佛果の四智を明して第八識を轉じて大圓鏡智を、第七識を轉じて平等性智を、第六識を轉じて妙觀察智を、第五識を轉じて成所作智を得となし、是を佛果の四智心品と呼べり。【九】菩提　梵語。猶ほ正智・正覺といふが如し。

【題義】夢に因つて感悟する所ありしことを述べた詩である。

【詩意】友達が殆ど死亡し盡したので憂愁のあまり夢にまで見るやうになつた。昨夜も平生親しく交つた人人を夢に見た。枕上夢中、僅の時間に、俱に酒を飲んだり碁を圍んだりした。初めに見たのは韋尚書で金印紫綬がぴかぴかとしてゐた。中ごろは李侍郎に遇つた。言笑自若として生前と同じく樂んだ。終りには崔常侍を見た。彼も眷戀の情が深かつた。此の如く一夜の中に三たび變改したが、夢中の心は少しも驚き怪しまなかつた。こんな事は人の盡く怪む所であるが、我は其理を知つて少しも怪まない。我嘗て佛理を聞けるに、「識行が妄りに分別すれば智が隱れて是非に迷ふものであるが、若し識を轉じて智となせば、正智を得られるであらう」といふ。誠に其通りである。

春遊

上馬臨出門。出門復逡巡。
回頭問妻子。應怪春遊頻。
誠知春遊頻。其奈老大身。

春遊

馬に上りて門を出づるに臨み、門を出でて復逡巡す。
頭を回して妻子に問ふ、應に春遊の頻なるを怪むべしと。
誠に春遊の頻なるを知れども、老大の身を其奈せん。

朱顏去復去。白髮新更新。
請君屈十指。爲我數交親。
大限年百歲。幾人及七旬。
我今六十五。走若下阪輪。
假使得七十。祇有五度春。
逢春不遊樂。但恐是癡人。

【字解】【一】朱顏　紅顏なり。わかわかしき顏色。【二】交親　交友なり。【三】七旬　七十歲。【四】癡人　愚人。

【題義】春の行樂を述べた詩である。

【詩意】馬に乘つて出かけようとしたが、復躊躇して、妻子に問うた。「お前等も俺の出遊の屢〻なるを怪むであらう」と。出遊の屢〻なるは自分でも心得てゐるが年老いた身に取つては無理はないのだ。紅顏は遠の昔に過ぎ去つて一年增しに白毛が殖えるばかりだ。指を折つて我が友を數へて見給へ。人生は百年を限とするが、七十まで生きた者が幾人あるであらう。我も今は六十五で、歲月は阪を下る車のやうに速い。たとひ七十まで生きるとしても、あと五年ではないか。だから春に逢つたら遊樂するがよいので、若し春に逢つても遊樂せぬなら、それは愚の至りである。

題天竺南院贈閒元旻清四上人

天竺の南院に題し閒・元・旻・清四上人に贈る

雜芳閒草合。繁綠巖樹新。
山深景候晚。四月有餘春。
竹寺過微雨。石逕無纖塵。
白衣一居士。方袍四道人。
地是佛國土。人非俗交親。
城中山下別。相送亦殷勤。

【字解】【一】閒草　名もない雜草。【二】景候　景物氣候。【三】白衣一居士　樂天自ら謂ふ。居士とは佛を奉ずる俗人の稱。【四】方袍　僧衣なり。道人は僧。【五】佛國土　佛の居る所の地。寺をいふ。江淹の詩に地是佛國土とある。【六】俗交親　俗友。【七】殷勤　ねんごろなること。

【題義】天竺寺（杭州に在る寺の名）の南院に題し、兼ねて閒・元・旻・清（僧の名は一字を略するを常とす）の四僧に贈つた詩である。

【詩意】名も知らぬ雜草が茂り合ひ、巖石の間に綠樹が生ひ繁り、山奧のこととて時候も景物も晚れてゐて、四月でもまだ春色が殘つてゐる、微雨が過ぎて石逕苔滑なる處、白衣の一居士たる我は

方袍の四道人と相語らふ。場所は佛寺であり、人は俗人ではない。今我は城下に君等は山下に各〻相別るるに方り、更に殷勤に相送つた。

哭師皐

南康丹旐引魂廻。
洛陽籃輿送葬來。
北邙原邊草樹畔。
月苦烟愁夜過半。
妻孥兄弟號一聲。
十二人腸一時斷。
往者何人送者誰。
樂天哭別師皐時。
平生分義向人盡。
今日哀寃唯我知。

師皐を哭す

南康の丹旐魂を引きて廻り、
洛陽の籃輿葬を送りて來る。
北邙原邊草樹の畔、
月苦かに烟愁へて夜半を過ぐ。
妻孥兄弟號ぶこと一聲、
十二人腸一時に斷ゆ。
往く者は何人ぞ送る者は誰ぞ、
樂天師皐に哭別する時。
平生の分義人に向ひて盡き、
今日の哀寃唯我知る。

【字解】【一】南康　郡名。卽ち虔州。丹旐は喪家用ふる所の銘旌。
【二】北邙原　洛陽の北に在る墓地。
【三】妻孥　妻子。

我知何益徒垂淚。
籃轝廻竿馬廻轡。
何日重聞掃市歌。
誰家收得琵琶妓。

師皐醉後、善歌掃市詞。又有小妓二工琵琶。不知今落在何處。

我知るも何の益あらん徒に涙を垂る、
籃轝は竿を廻らし馬は轡を廻らす。
何れの日か重ねて聞かん掃市の歌、
誰が家か收め得たる琵琶の妓。

蕭蕭風樹白楊影。
蒼蒼露草青蒿氣。
更就墳邊哭一聲。
與君此別終天地。

蕭蕭たる風樹白楊の影、
蒼蒼たる露草青蒿の氣。
更に墳邊に就きて哭すること一聲、
君と此に別れて天地を終ふ。

【四】籃轝　籃輿に同じ。
【五】蕭蕭　風の淋しく吹く聲。白楊は墓に植ゑる木の名。
【六】青蒿　多年生の草の名。

【題義】師皐とは楊虞卿の字である。虞卿の從妹は樂天の妻である。彼は京兆尹より虔州司戶參軍に貶せられ、開成元年虔州で歿した。此詩は其死を哭したのである。

【詩意】虔州から遺骸を持ち歸り、洛陽で送葬の式を擧げた。北邙山の草樹の邊は月苦え烟愁へ、妻子兄弟十二人皆腸を斷つ思がして、夜半に至るも尙去るに忍びなかつた。我も亦家族に伍して彼に哭別した。平生は彼に對して親交を盡したが、今日の哀寃は我獨り知るのみで、彼は何も知らない。

いくら知つても何の役にも立たず、ただ泣くばかりであつた。やがて名殘を惜んで籃輿も馬も歸ることになつた。ああ何日また彼の掃市歌を聞かれるであらう。あの琵琶の上手な小妓は誰の手に落ちたであらう。風が淋しく白楊を吹いて露深き青蒿の香が漂ふ。歸るに臨んで更に墳墓に就いて哭泣し、永久の別れを告げた。

隱几贈客

宦情本淡薄。年貌又老醜。
紫綬與金章。於予亦何有。
有時獨隱几。荅然無所偶。
臥枕一卷書。起嘗一盃酒。
書將引昏睡。酒用扶衰朽。
客到忽已酣。脫巾坐搔首。
疎頑倚老病。容恕慙交友。
忽思莊生言。亦擬鞭其後。

几に隱りて客に贈る

宦情本淡薄、年貌又老醜。
紫綬と金章と、予に於て亦何か有らん。
時有りて獨り几に隱り、荅然として偶する所無し。
臥すときは一卷の書を枕とし、起くるときは一盃の酒を嘗む。
書は將て昏睡を引き、酒は用て衰朽を扶く。
客到りて忽ち已に酣なれば、巾を脫し坐して首を搔く。
疎頑老病に倚り、容恕交友に慙づ。
忽ち莊生の言を思ひ、亦其の後れたるを鞭たんと擬す。

【字解】【一】宦情　官達を求むる心。【二】荅然　嗒然に同じ、解體の貌。莊子齊物論に南郭子綦隱几而坐、仰天而噓、嗒然似喪其耦とある。偶は耦に同じ。【三】容恕　寬容して無禮を宥すこと。【四】莊生　莊子。【五】鞭其後　莊子達生篇に、善養生者若牧羊然、視其後者而鞭之とある。既に其內を養へる者は卽ち當に其外を養ふべく、既に其外を養へる者は卽ち當に其內を養ふべきに喩ふ。

【題義】脇息によりかかつて客に贈つたといふ意。

【詩意】官達の念も薄く老いて醜くもなつた今日に於ては、金印紫綬も我に取つては、肯て貴ぶには足らない。ただ時時獨り脇息により自他を忘れて茫然としてゐて、寐る時は書卷を枕とし起きては一杯の酒を飲む。書卷は睡を催す爲で、酒は衰朽を扶ける爲である。客が來た時は已に酣醉し頭巾を脫いで頭を搔く。かかる無作法な事をするのも老病の爲であるから偏に交友の宥恕を乞ふ次第である。忽ち莊子の言を思ひ其の後れたる者を鞭つて我が生を養はうと欲してゐる。

夏日作

葛衣疎且單。紗帽輕復寬。
一衣與一帽。可以過炎天。
止於便吾體。何必被羅紈。
宿雨林笋嫩。晨露園葵鮮。

夏日の作

葛衣疎にして且單なり、紗帽輕くして復寬し。
一衣と一帽と、以て炎天を過ごす可し。
吾が體に便するに止まる、何ぞ必ずしも羅紈を被らん。
宿雨林笋嫩かに、晨露園葵鮮かなり。

烹葵炮嫩筍。可以備朝餐。葵を烹て嫩筍を炮にし、以て朝餐に備ふ可し。
止於適吾口。何必飫腥羶。吾が口に適するに止まる、何ぞ必ずしも腥羶に飫かん。
飯訖盥漱已。捫腹方果然。飯訖りて盥漱し已み、腹を捫すれば方に果然たり。
婆娑庭前步。安穩窓下眠。婆娑として庭前に步み、安穩にして窓下に眠る。
外養物不費。內歸心不煩。外養物費えず、內歸心煩はしからず。
不費用難盡。不煩神易安。費えざれば用盡き難く、煩はしからざれば神安んじ易し。
庶幾無夭閼。得以終天年。庶幾くは夭閼することなく、以て天年を終るを得ん。

【字解】【一】羅紈　薄絹。【二】宿雨　ながあめ。林筍は竹林中の筍。【三】園葵　菜園の葵。葵は野菜の名。【四】腥羶　肥肉なり。【五】果然　腹の飽く貌。【六】婆娑　影の動く貌。【七】外養　口腹の養。【八】內歸　心が內に歸る。【九】夭閼　妨礙する。

【題義】夏日閒居の情狀を述べた詩である。

【詩意】葛衣は疎單で紗帽は輕寬である。この一衣と一帽とを以て炎天を過ごすことが出來る。要は吾が身に便するに在るのだから、敢て薄絹などを用ひる必要はない。宿雨が降つて筍が嫩かに育ち、朝露を帶びて野菜が鮮かである。この野菜を烹、筍を炮にすれば、以て朝食に供するに足りる。要は吾が口に適するに在るのだから、必ずしも肥肉を要せぬのである。食後に盥漱をして、張つてゐる腹を撫で、暫く庭前を散步して窓下に安臥する。かくの如く身の養ひにも格別の費用がかからず、心が內に落著いて煩惱がない。庶幾くは自然を妨げずに天壽を全うし得るであらう。

晚涼偶詠

日下西墻西。風來北窓北。
中有逐涼人。單牀獨棲息。
飄蕭過雲雨。搖曳歸飛翼。
新葉多好陰。初筠有佳色。
幽深小池館。優穩閒官職。
不愛勿復論。愛亦不易得。

【字解】【一】單牀　ひとつの寢臺。【二】飄蕭　雨風の音。【三】搖曳　ゆらゆら搖く貌。【四】初筠　若竹。

【題義】晚涼を追ひ得て感懷を詠じた詩である。

【詩意】日は西牆の西に傾き、風は北窓の北に吹いて來る。我は其中の一つの寢臺にねころんで涼を納れてゐる。そよそよと雨風が過ぎて塘に就く飛鳥も歸つた。あたりを見れば新葉の陰が美しく、若

竹の色も鮮かである。幽深なる小池館に起臥し、閑散な職を奉じて氣樂に暮してゐるのも決して棄てたものではない。かかる生活を好まぬ人は論外であるが、好むからとて直に得られるものではない。

酬牛相公宮城早秋寓言見示。兼呈夢得 時夢得有疾。

牛相公が宮城早秋の寓言を示されしに酬い、兼ねて夢得に呈す 時に夢得疾有り。

七月中氣後。金與火交爭。
一聞白雪唱。暑退清風生。
碧樹未搖落。寒蟬始悲鳴。
夜涼枕簟滑。秋燥衣巾輕。
疏受老慵出。劉楨疾未平。
何人伴公醉。新月上宮城。

【字解】【一】牛相公　牛僧孺、字は思黯、文宗の朝再び相となる。寓言は寄託する所ある言なり。【二】中氣　二十四氣を以て十二個月に分配するに、當月の首を以て節氣となし、當月の中を以て中氣となす。立秋を七月節となし、處暑を七月中となす。【三】金　秋の氣。火は夏の氣。【四】白雪唱　善き詩。牛相公の詩をほめていふ。宋玉の文に、客有ㇾ歌二於郢中一者、其始曰二下里巴人一、國中屬而和者數千人、其爲二陽春白雪一、國中屬而和者數十人、以ㇾ是其曲彌高、其和彌寡とある。【五】疏受　漢の宣帝の時、太子少傅となる。樂天時に太子少傅たり。故に自ら疏受に比するなり。【六】劉楨　三國魏の詩人。同姓の緣を以て劉夢得を以て之に比す。

【題義】牛僧孺が「宮城早秋の寓言」と題する詩を寄せられたのに酬い、兼ねて劉禹錫（字は夢得）に呈した詩である。

【詩意】七月の中氣の後になつても金氣と火氣とが相爭ひ、まだ暑氣が退かなかつたが、一たび白雪の詩を拜誦するに及んで、忽ち暑氣が退いて清風が起つた。綠樹は未だ凋落するに至らないが寒蟬が悲しげに鳴き始め、夜は何となく枕簟が冷かで衣巾の輕きを感ずるやうになつた。我は老いて出づるに慵く、夢得は疾未だ癒えず。新月の宮城に上る時、誰が相公に伴つて明月を賞し美酒を勸めるであらう。

小臺晚坐憶夢得

小臺晚坐夢得を憶ふ

汲泉灑小臺。臺上無纖埃。
解帶面西坐。輕襟隨風開。
晚涼閒興動。憶同傾一杯。
月明候柴戸。藜杖何時來。

【字解】【一】柴戸　木の小枝を集めて作つた戸。茅屋といふが如し。【二】藜杖　あかざの杖。

【題義】夕に小臺の上に閒坐して劉禹錫（字は夢得）を憶うた詩である。

【詩意】泉を汲んで小臺に撒いたので臺上には塵一つ立たない。帶を解いて西に向つて坐すれば、襟が風に吹かれて自然にひろがる。晩涼に遇うて閒興が湧いて來て君と一緒に一杯を傾けたくなつた。折よく月も我が柴の戸を訪うた。君は何時藜の杖を曳いて、我を訪ふであらう。早く來てくれればよい。

種桃歌

食桃種其核。一年核生芽。
二年長枝葉。三年桃有花。
憶昨五六歲。灼灼盛芬華。
迨茲八九載。有減而無加。
去春已稀少。今春漸無多。
明年後年後。芳意當如何。
命酒樹下飲。停盃拾餘葩。

桃を種うる歌

桃を食ひて其核を種うれば、一年にして核芽を生ず。
二年にして枝葉を長じ、三年にして桃に花有り。
憶ふ昨五六歲、灼灼として芬華盛なり。
茲に迨びて八九載、減ずる有りて加ふる無し。
去春已に稀少、今春漸く多き無し。
明年後年の後、芳意當に如何なるべき。
酒を命じて樹下に飲み、盃を停めて餘葩を拾ふ。

因桃忽自感。悲吒成狂歌。

【字解】【一】灼灼　花の盛なる貌。詩經に灼灼其華とある。【二】迨茲　今日に及ぶ。八九載は八九年。【三】悲吒　悲み怒る。

【題義】桃花の年を經て衰ふるを見て己の老衰を悲んだ詩である。

【詩意】桃を食つて其核を蒔いて置いた所が一年たつて芽が生え、二年たつて枝葉が伸び、三年たつて花が咲いた。五六年を經た昔を追想するに灼灼として見事に花が咲いたものであつたが、八九年を經た今日に於ては、花が段段減つて來て、去年の春は已に大分少かつたが、今年の春は更に少くなつた。此調子で行つたら來年再來年はどうなるであらうか。誠に心細い次第である。因つて酒を命じて樹下に飲み、杯を停めて餘葩を拾つた。桃を悲むについて己の老衰を悲み、慨嘆のあまり此詩を作つた。

狂言示諸姪

世欺不識字。我忝攻文筆。
世欺不得官。我忝居班秩。
人老多病苦。我今幸無疾。
人老多憂累。我今婚嫁畢。

狂言して諸姪に示す

世は字を識らざるを欺く、我は忝く文筆を攻む。
世は官を得ざるを欺く、我は忝く班秩に居る。
人老ゆれば病苦多し、我今幸に疾無し。
人老ゆれば憂累多し、我今婚嫁し畢る。

心安不二移轉一。身泰無二牽率一。所以十年來。形神閒且逸。況當二垂老歲一。所レ要無二多物一。一裘煖過レ冬。一飯飽終レ日。勿レ言舍宅小。不レ過レ寢二一室一。何用二鞍馬多一。不レ能レ騎二兩匹一。如二我優幸身一。人中十有七。如二我知レ足心一。人中百無レ一。傍觀愚亦見。當レ己賢多失。不二敢論他人一。狂言示二諸姪一。

心安くして移轉せず、身泰にして牽率せらるる無し。所以に十年來た、形神閒にして且つ逸す。況んや垂老の歲に當り、要むる所多物無し。一裘煖かにして冬を過し、一飯飽きて日を終る。言ふ勿れ舍宅小なりと、一室に寢ぬるに過ぎず。何ぞ鞍馬の多きを用ひん、兩匹に騎ること能はず。我が優幸の身の如きは、人中十に七有り。我が足るを知るの心の如きは、人中百に一無し。傍觀すれば愚も亦見、己に當れば賢も多く失ふ。敢て他人に論せず、狂言して諸姪に示す。

【字解】【一】欺　侮る意。【二】班秩　官位。【三】憂累　うれへ、わづらひ。【四】閒且逸　ひまで安樂なこと。【五】兩匹　二頭の馬。【六】傍觀愚亦見　たか目八目で傍觀する時は愚者でもよくあらが見える。

【題義】狂言（此詩を作つたことをいふ）して姪たちに示したといふ意。

【詩意】世人は字を識らない者を馬鹿にするが、俺は忝くも文筆を學んでゐる。又世人は無官の人を馬鹿にするが、俺は忝くも官職を帶びてゐる。人は年老ゆれば病苦が多いものだが、俺は幸に病氣がない。又年老ゆれば累の多いものだが、俺は子女の婚嫁も終つて累はない。心が安いから彼是と氣の移ることもなく、身が泰かで此れといふ係累もない。故に十年以來身も心も閒暇無事である。まして年老いては慾念も少くなつて、一枚の裘を以て暖かに冬を越し、一飯を喫すれば一日滿腹してゐる。舍宅は小さいが寢るには一室あれば澤山だ。馬も少いが一時に二匹の馬に乘れる譯ではないから一匹あれば澤山だ。かう考へて見ると、俺ぐらゐ惠まれた男は十人の中に七人ぐらゐあるだらう。併し俺のやうに足ることを知つてゐる男は百人の中に一人もあるまい。傍觀者となれば愚者でも人のあらが見えるが、自分の事となると賢者でも案外見えないものだ。これは敢て他人には言はぬが、我が姪たるお前等にだけ聞かせるのだ。

偶以二拙詩數首一寄二呈裴少尹侍郎一。蒙以盛製四篇一。一時酬和。重投二長句一。美而謝之

偶ま拙詩數首を以て裴少尹侍郎に寄呈す。蒙らすに盛製四篇を以てして一時に酬和す。重ねて長句を投じ、美して之を謝す

投レ君之文甚荒蕪。

君に投ずるの文甚だ荒蕪、

【字解】【一】荒蕪　拙劣。

數篇價値一束芻。(三)　數篇の價値一束の芻、
報我之章何璀璨。(三)　我に報ゆるの章何ぞ璀璨たる、
(四)纍纍四貫驪龍珠。　纍纍たる四貫驪龍の珠。
毛詩三百篇後得。　毛詩三百篇の後に得たり、
文選六十卷中無。　文選六十卷の中に無し。
(五)一麋麗龜絕報賽。　一麋の麗龜報賽を絕し、
(六)五鹿連拄難支梧。　五鹿の連拄支梧し難し。
高興獨因秋日盡。　高興獨り秋日に因りて盡き、
清吟多與好風俱。　清吟多く好風と俱にす。
(七)銀鉤金錯兩殊重。　銀鉤金錯兩ながら殊に重し、
宜上屏風張座隅。　宜しく屏風に上せて座隅に張るべし。

【題義】樂天が自作の詩數首を裴少尹侍郎（少尹、侍郎は官名）に寄せた所が、裴は四首の詩を作つて之に酬いたので、樂天は更に此詩を寄せて裴の詩を稱美し且つ厚意を謝したのである。

【詩意】僕が貴下に獻じた詩は極めて拙劣で數篇の値が一束の草にも當らないほどである。然るに貴下が僕に酬いられた四首の詩は珠玉の如き立派な作で、詩經三百篇の後を繼ぎ、文選六十卷の中にもないほどの傑作である。かかる立派な詩を寄せられては殆ど返報の致しやうもなく、かくも手嚴しく挑戰せられては殆ど防ぎ止めやうも御坐らぬ。秋日に因つて高興を發し、好風と俱に清吟致して居ります。殊に其詩の書體が亦誠に見事で、屏風にでも張つて座隅に置くに宜しい。

【三】芻　草。【三】璀璨　玉の光。【四】纍纍　かさなる貌。驪龍珠は莊子に、千金之珠、必在三九重之淵、而驪龍頷下」とあり、四貫驪龍珠は四篇の詩に喩ふ。【五】一麋麗龜　麋は鹿の類、龜は背。麗はツクと訓じ、著なり。左傳宣公十二年に楚の樂伯が一本の矢で麋を射て龜に著き、之を晉の鮑癸に獻ぜし事見ゆ。裴の酬詩に喩ふ。報賽は返禮の意。【六】五鹿連拄　五鹿は衞の地名。漢書朱雲傳に五鹿の充宗易を論じ、諸儒能く之と抗する者なし。朱雲連りに之を譏刺せし事見ゆ。拄は譏刺なり。裴の酬詩に喩ふ。支梧は抵拒なり。【七】銀鉤金錯　書體の妙をいふ。

立秋夕涼風忽至。炎暑稍消。卽事詠懷。寄汴州節度使李二十尙書

立秋の夕涼風忽ち至り、炎暑稍消す。事に卽き懷を詠じて汴州節度使李二十尙書に寄す

(一)嫋嫋檐樹動。好風西南來。　嫋嫋として檐樹動き、好風西南より來る。
(二)紅鉦霏微滅。碧幌飄颻開。　紅鉦霏微として滅し、碧幌飄颻として開く。
披襟有餘涼。拂簟無纖埃。　襟を披けば餘涼あり、簟を拂へば纖埃なし。
但喜煩暑退。不惜光陰催。　但煩暑の退くを喜び、光陰の催すを惜まず。
河秋稍清淺。月午(四)方徘徊。　河秋にして稍清淺、月午にして方に徘徊。
或行或坐臥。體適心悠(五)哉。　或は行き或は坐臥すれば、體適して心悠なる哉。

(六)美人在浚都。旌旗繞樓臺。美人浚都に在り、旌旗樓臺を繞る。
雖非滄溟阻。難見如蓬萊。滄溟の阻るに非ずと雖も、蓬萊の如くなるを見難し。
蟬吟節又換。雁送書未迴。蟬吟じて節又換り、雁送れども書未だ廻らず。
君位日寵重。我年日摧頹。君が位は日に寵重、我が年は日に摧頹。
無因風月下。一舉平生杯。風月の下、一たび平生の杯を擧ぐるに因なし。

英華作二一與共持レ杯。

【字解】【一】嫋嫋　風動く貌。【二】紅釭　紅燈。霏微は暈る貌。【三】碧幌　綠の幃幔。飄颻は風に飄る貌。【四】午　午後、夜半をいふ。【五】悠哉　閑暇の貌。【六】美人　賢人君子をいふ。李二十尙書を指す。浚都は汴州。【七】滄溟　大海。【八】蓬萊　東海中に在る仙山。其宮闕は皆黃金白銀を以て成る。【九】雁　書信をいふ。

【題義】立秋の夕に涼風忽ち吹き至り炎暑が稍衰へたので、感懷を賦して汴州（河南開封府）節度使李二十尙書（李紳をいふ。開成の初め、河南尹、宣武節度使に任ぜられた）に寄せた詩である。

【詩意】そよそよと檐端の樹を動かして涼しい風が西南から吹いて來る。紅燈影暗く碧幔輕く開く處襟を披いて涼を納れ簟の塵を拂つて坐すれば、暑熱の退いたのが何よりも嬉しく歲月の移るのも敢て惜まない。銀河は秋に入りて稍清淺になり、月は眞夜中になつて中天に徘徊してゐる。或は庭中を步し或は室內に坐臥すれば身も心も伸伸として快い。君は節度使となつて汴州に居り、旌旗が樓臺を繞つてゐるであらうが、大海の隔てがあるわけではないが、幾山川を隔てて居るので蓬萊宮にも比すべき君の樓臺を望み見ることも出來ない。今や蟬が鳴いて氣節も換り、書信を送つてもまだ返事も來ない。君は益〻榮進し我は益〻老衰し、君と僕とは益〻相隔たるばかりで、この佳風月の下に俱に杯を擧げて平生の歡を盡すことの出來ないのが遺憾である。

開成二年夏聞新蟬贈夢得　十年來。常與夢得索居。同在洛下。每聞蟬多有寄答。今喜以此篇唱之。

開成二年夏、新蟬を聞きて夢得に贈る　十年このかた常に夢得と索居す。同じく洛下に在り、蟬を聞く毎に多く寄答あり。今喜んで此篇を以て之を唱ふ。

(一)十載與君別。常感新蟬鳴。十載君と別れ、常に新蟬の鳴くを感ず。
今年共君聽。同在洛陽城。今年君と共に聽き、同じく洛陽城に在り。
噪處知林靜。聞時覺景淸。噪がしき處林の靜なるを知り、聞く時景の淸きを覺ゆ。
涼風忽(二)嫋嫋。秋思先秋生。涼風忽ち嫋嫋、秋思秋に先だちて生ず。
殘槿花邊立。老槐陰下行。殘槿花邊に立ち、老槐陰下を行く。
雖無(三)索居恨。還動(四)長年情。索居の恨なしと雖も、還長年の情を動かす。
且喜未聾耳。年年聞此聲。且喜ぶ未だ耳を聾せず、年年此聲を聞くを。

【字解】【一】十載　十年。【二】嫋嫋　風の動く貌。【三】索居　離居なり。【四】長年　老年なり。杜甫の玉華宮と題する詩に誰是長年者とある。

【題義】開成二年の夏に新蟬の聲を聞いて夢得（劉禹錫の字）に贈つた詩である。

【詩意】十年の間別れてゐたので、常に新蟬の聲を聞いては君を思うたが、今年は同じく洛陽に於て君と共に新蟬の聲を聽くのは實に悅ばしい。噪がしい聲を聞くについても林の靜にして景の淸きを覺える。まして風さへ涼しくてまだ秋ならぬに秋の思がする。槿の花の咲き殘れる邊に立ち槐の木陰を行けば、離居の恨こそなけれ、何となく衰老の情を感ずる。併しまだ耳も達者で年年蟬の聲が聞けるのが嬉しい。

題牛相公歸仁里宅新成小灘

牛相公の歸仁里の宅に新に成せる小灘に題す

平生見流水。見此轉留連。
況此朱門內。君家新引泉。
伊流決一帶。洛石砌千拳。
與君三伏月。滿耳作潺湲。

平生流水を見れば、此を見て轉た留連す。
況んや此朱門の內、君が家新に泉を引くをや。
伊流一帶を決し、洛石千拳を砌す。
君が與に三伏の月、耳に滿ちて潺湲を作す。

深處碧磷磷。淺處淸濺濺。
碕岸東鳴咽。沙汀散淪漣。
翻浪雪不盡。澄波空共鮮。
兩崖灩澦口。一泊瀟湘天。
曾作天南客。漂流六七年。
何山不倚杖。何水不停船。
巴峽聲心裏。松江色眼前。
今朝小灘上。能不思悠然。

深處は碧磷磷、淺處は淸濺濺。
碕岸鳴咽を束ね、沙汀淪漣を散ず。
翻浪雪盡きず、澄波空共に鮮かなり。
兩崖灩澦の口、一泊瀟湘の天。
曾て天南の客と作り、漂流すること六七年。
何の山か杖に倚らざらん、何の水か船を停めざらん。
巴峽心裏に聲あり、松江眼前に色あり。
今朝小灘の上、能く思悠然たらざらんや。

【字解】【一】朱門　朱塗の門。牛相公の宅をいふ。【二】伊流　伊水の流。【三】洛石　洛水の石。千拳は千個の拳石、砌は敷くこと。【四】三伏　夏至の後の第三の庚の日を初伏といひ、第四の庚の日を中伏といひ、立秋後の第一の庚の日を末伏といふ。【五】潺湲　流水の聲。【六】磷磷　石の色。【七】濺濺　水の流るる貌。【八】碕岸　曲岸。鳴咽は水の咽ぶこと。【九】淪漣　さざなみ、【一〇】灩澦　四川省奉節縣の西南瞿唐峽の口。【一一】一泊　湖澤を泊といふ。瀟湘は二水の名、北流して洞庭湖に入る。【一二】天南　江南なり。【一三】巴峽　湖北省巴東縣の西二十里に在る。【一四】松江　太湖の支流、今の吳淞江なり。【一五】思悠然　昔を思ふ貌。

【題義】牛相公（牛僧孺）の歸仁里（洛陽の里の名）の宅に新に作りし小灘（水淺く石多く流の急な

處）に題した詩である。

【詩意】平生流水を見るのが好きで、見るたびに數日間留連するのを常とした。況んや相公の宅に新に流を引いて作つた小灘を見ては、誠に喜びに堪へない。一筋の伊水の流を通じ千個の洛石を敷きつめてあつて、三伏の暑中にも潺湲たる音を立て、深い處は石の色が磷磷として美しく、淺い處は水が清くて濺濺と流れ、曲岸は流を束ねて水が咽び、沙汀は漣を散じ、翻浪は雪の如くに湧き立ち、澄波は空と共に鮮であつて、兩岸は灩澦口の如く、一帶の流は瀟湘のやうである。予は曾て江南に謫せられ六七年間諸處に漂流したから、杖に倚つて多くの山を賞し、船を停めて流を弄したので、今でも巴峽の江聲が心裏に殘り、松江の色が眼前にちらついてゐるが、今朝この小灘の上に立ち、悠然として追懐の情を深うした。

春日閒居三首

陶云愛吾廬。吾亦愛吾屋。
屋中有琴書。聊以慰幽獨。
是時三月半。花落庭蕪綠。
舍上晨鳩鳴。窗間春睡足。

春日閒居　三首

陶は云く吾が廬を愛すと、吾も亦吾が屋を愛す。
屋中に琴書あり、聊か以て幽獨を慰す。
是時三月半、花落ちて庭蕪綠なり。
舍上晨鳩鳴き、窗間春睡足る。

睡足起閒坐。景晏方櫛沐。
今日非十齋。庖童饋魚肉。
飢來恣餐歠。冷熱隨所欲。
飽竟快搔爬。筋骸無檢束。
豈徒暢肢體。兼欲遺耳目。
便可傲松喬。何假杯中淥。

【字解】【一】庭蕪　庭の草。【二】景晏　日の高く昇ること。【三】十齋　毎月一日、八日、十四日、十五日、十八日、二十三日、二十四日、二十八日、二十九日、三十日には肉を食はず、之を十齋といふ。【四】餐歠　飲食なり。【五】松喬　古の仙人、赤松子及び王子喬。

【題義】春日閒居の情景を敍した詩である。

【詩意】陶淵明は吾が廬を愛すと云つたが、吾も亦吾が家を愛する。家の中には琴と書とあつて孤獨の我を慰むるに足る。今や三月の半で花は落ちたが庭の草は綠色濃く、屋根の上では朝鳩が鳴き、室の中では、うとうとと春睡を貪り、睡足り日高く昇つてから起きて髮を濯つて之を梳る。今日は齋日でないので、庖童が魚肉を進めたので、冷い物でも熱い物でも好むが儘に貪つて飲食し、飽けば快く頭を搔き、身には少しの束縛もなく、手足ものびのびとして耳目をも遺れんとするばかりである。

だから酒の力を借るまでもなく、仙人赤松子や王子喬にも傲ることが出來る。

〔二〕

廣池春水平。羣魚恣游泳。
新林綠陰成。衆鳥欣相鳴。
時我亦瀟灑。適無累與病。
魚鳥人則殊。同歸於遂性。
緬思山梁雉。時哉感孔聖。
聖人不得所。慨然歎時命。
我今對鱗羽。取樂成謠詠。
得所仍得時。吾生一何幸。

【字解】【一】瀟灑　さつぱりとしてゐること。【二】山梁雉　山梁は山道に架けた橋。論語鄉黨篇に、色斯舉矣、翔而後集、曰山梁雌雉、時哉時哉とある。【三】孔聖　聖人孔子。【四】鱗羽　魚鳥。

【詩意】廣い池に春水が滿ちて魚が自由に游いで居り、新綠の林が陰を成して鳥が欣んで鳴いてゐる。時に我も亦瀟灑、適〻累と病となし。魚鳥と人と則ち殊なれども、同じく性を遂ぐるに歸す。緬に思ふ山梁の雉、時なる哉孔聖を感ぜしむ。聖人も所を得ざれば、慨然として時命を歎ず。我今鱗羽に對し、樂を取りて謠詠を成す。所を得て仍時を得たり、吾が生一に何ぞ幸なる。

時に我も亦煩累も病症もなく、身心俱に爽である。魚鳥と人とは類を異にしてはゐるが、その性を遂ぐるに至つては同じである。昔山梁の雉の時を得たる、遂に孔子をして感嘆せしめた。聖人でも所を得なければ時命を慨嘆せざるを得ないのである。然るに我は今魚鳥に對し、樂んで之を詠歌してゐる。これぞ誠に所を得且つ時を得たもので、實に幸福の至りである。

〔三〕

勞者不覺歌。歌其勞苦事。
逸者不覺歌。歌其逸樂意。
問我逸如何。閒居多興味。
問我樂如何。閒官少憂累。
又問俸厚薄。百千隨月至。
又問年幾何。七十行欠二。
所得皆過望。省躬良可媿。
馬閒無羈絆。鶴老有祿位。

〔三〕

勞する者は歌ふを覺えず、其勞苦の事を歌ふ。
逸する者は歌ふを覺えず、其逸樂の意を歌ふ。
我に問ふ逸すること如何と、閒居興味多し。
我に問ふ樂むこと如何と、閒官憂累少し。
又問ふ俸の厚薄、百千月に隨つて至る。
又問ふ年幾何、七十行二を欠く。
得る所皆望に過ぎ、躬を省るに良に媿づべし。
馬閒にして羈絆なく、鶴老いて祿位あり。

設自爲化工。(四)優饒只如是。　設ひ自ら化工となすも、優饒只是の如し。
安得不歌詠。默默受天賜。　安んぞ歌詠せず、默默として天の賜を受くるを得ん。

【字解】【一】閒官　閑散な官職。【二】行　行年。年輩なり。杜甫の詩に甚愧丈人行とある。【三】鶴老有祿位　左傳に衞懿公好鶴、鶴有乘軒者、注に軒は大夫の車とある。【四】化工　天工を謂ふ。賈誼の賦に、且夫天地爲爐兮、造化爲工とある。【五】優饒　富貴安泰なり。

【詩意】苦勞する者は覺えず其苦勞を詠歌し、安逸する者は覺えず其安逸を詠歌するものである。我が安逸は如何にといふに閒居して興味多く、樂は如何にといふに、閑職にゐて何の憂累もなく、俸祿はといへば毎月幾百千を賜はり、年齡はといへばまだ六十八であつて、すべて己の望以上のものを得てゐる。これ躬ら省みて大に愧づる所である。謂はば羈を脱した馬の如く、祿位を得た鶴の如くである。たとひ皆天工に由るとはいへ、實に富貴安泰を得てゐること是の如くである。これを詠歌せずに默然として天の賜を受けてゐられようぞ、ゐられはせぬ。

小閣閒坐

閣前竹蕭蕭。(一)閣下水潺潺。(二)　小閣閒坐
拂簟卷簾坐。清風生其間。　閣前竹蕭蕭、閣下水潺潺。
簟を拂ひ簾を卷いて坐すれば、清風其間に生ず。

靜聞新蟬鳴。遠見飛鳥還。　靜に新蟬の鳴くを聞き、遠く飛鳥の還るを見る。
但有巾挂壁。而無客叩關。　但巾の壁に挂るあり、而して客の關を叩くなし。
二疏返故里。(三)四老歸舊山。(四)　二疏故里に返り、四老舊山に歸る。
吾亦適所願。求閑而得閑。　吾も亦願ふ所に適ひ、閑を求めて閑を得たり。

【字解】【一】蕭蕭　風の音。【二】潺潺　流水の音。【三】二疏　疏廣は漢の宣帝の時太傅となり、兄の子受は同時に少傅となる。職に在ること五年、俱に病を謝して免じ歸る。【四】四老　商山の四皓、秦の亂を避けて隱る。

【題義】小閣に閑坐する情趣を述べた詩である。

【詩意】閣前の竹は風に吹かれて蕭蕭と鳴り、閣下の流水は潺潺たる音を立ててゐる。簟の塵を拂ひ簾を卷きて淸風の中に坐し、靜に新蟬の聲を聞き、遠く飛鳥の還るを見る。壁には我頭巾が挂つてゐるのみで、客の來りて門を叩く者もない。二疏の故鄕に歸り四皓の商山に歸つたと同じく、吾も我が願に適うて閑を求めて閑を得た。

遊平泉宴浥澗宿香山石樓贈座客

平泉に遊び浥澗に宴し香山の石樓に宿し座客に贈る

逸少集蘭亭。(一)季倫宴金谷。(二)　逸少は蘭亭に集まり、季倫は金谷に宴す。

金谷太繁華。蘭亭缺絲竹。
何如今日會。浥澗平泉曲。
杯酒與管絃。貧中隨分足。
紫鮮林筍嫩。紅潤園桃熟。
采摘助盤筵。芳滋盈口腹。
閒吟暮雲碧。醉藉春草綠。
舞妙豔流風。歌清叩寒玉。
古詩惜晝短。勸我令秉燭。
是夜勿言歸。相携石樓宿。

【字解】【一】逸少　晉の王羲之の字。羲之は永和九年春會稽山陰の蘭亭に、名士四十餘人を會し、禊事を修し、蘭亭記を作る。【二】季倫　晉の石崇の字。金谷に別墅を置き豪奢を極む。金谷は、河南省洛陽縣の西に在り。【三】缺絲竹　蘭亭記に、雖レ無二絲竹管絃之盛一、一觴一詠、亦足二以暢一敘幽情一とある。【四】惜晝短　古詩十九首に晝短苦二夜長一、何不二秉レ燭遊一、爲レ樂當レ及レ時、何能待二來茲一とある。

【題義】平泉（河南省洛陽縣の南に在り。唐の李德裕の別墅あり。德裕に平泉山居草木記あり）に遊び浥澗に宴し香山寺の石樓（香山寺は洛陽縣龍門山の東に在り。樂天に修香山寺記あり）に宿し、座客に贈つた詩である。

【詩意】昔王逸少は蘭亭に集會を催し、石季倫は金谷園に宴を張つたが、金谷の宴は徒に豪奢を極め、蘭亭の會には管絃の樂はなかつた。されば吾が今日の宴の杯酒と管絃と皆具はり、たとひ貧なりと雖も分に應じて足れるに比すべくもない。特に紫色をして嫩かに育つた筍があり、紅色に潤ひを帶びた桃も熟してゐて、之を採りて肴に供するに足るので、芳香滋味が口腹を盈たした。因つて閒吟して夕に至り春草を藉いて醉臥し、舞の手振が豔にして風の渡るが如く、歌の聲の清らかなことは寒玉を叩くが如くである。昔の詩にも晝の短きを惜んで燭を秉つて夜まで遊べと敎へてある。だから歸らうなどといふ者は一人もなく、相携へて香山寺の石樓に宿した。

池上幽境

裊裊過水橋。微微入林路。
幽境深誰知。老身閒獨步。
行行何所愛。遇物自成趣。
平滑青盤石。低密綠陰樹。
石上一素琴。樹下雙草屨。

裊裊として水橋を過ぎ、微微として林路に入る。
幽境深うして誰か知らん、老身閒にして獨步す。
行き行きて何の愛する所ぞ、物に遇うて自ら趣を成す。
平滑なり青盤石、低密なり綠陰の樹。
石上に一素琴あり、樹下に雙草屨あり。

此是榮先生。坐禪三樂處。

【字解】【一】裊裊　しなやかなる貌。【二】微微　かすかに。【三】素琴　しらきの琴。【四】草屨　草履。【五】榮先生　列子天瑞篇に、孔子遊二泰山一、見二榮啓期鼓レ琴而歌一、問曰、先生何樂也、曰天生二萬物一、人爲レ貴、吾得レ爲レ人、一樂也、男女之別、男尊女卑、吾得レ爲レ男、二樂也。人生有レ不レ見二日月一、不レ免二襁褓一者上、吾行年九十矣、三樂也とある。樂天自ら榮啓期に比して言ふ。

【題義】池邊の幽境を詠じた詩である。

【詩意】水橋を過ぎ林路に入れば一幽境あり、世人之を知る者なし。吾獨り閒歩す。行きて何の見る所ぞ、遇ふ所の物皆趣致あり。青盤石の平滑なる、綠陰樹の低密なるあり、石上に一張の素琴あり、樹下に一雙の草屨あり、これ榮先生の坐禪して三樂する處なり。

夏日閒放

時暑不レ出レ門。亦無二賓客至一。
靜室深下レ簾。小庭新掃レ地。
褰レ裳復岸幘。閒傲得二自恣一。
朝景枕簟清。乘レ涼一覺レ睡。
午餐何所レ有。魚肉一兩味。

夏日の閒放

時暑くして門を出でず、亦賓客の至るなし。
靜室深く簾を下し、小庭新に地を掃ふ。
裳を褰げて復岸幘し、閒傲して自ら恣にするを得たり。
朝景枕簟清く、涼に乘じて一たび睡を覺す。
午餐何の有る所ぞ、魚肉一兩味。

夏服亦無多。蕉紗三五事。
資レ身既給足。長物徒煩費。
若比二簞瓢人一。吾今太富貴。

【字解】【一】岸幘　幘は額上を覆ふもの。岸は免なり、額を露して取りつくろはぬさま。【二】蕉紗　蕉布及び紗。三五事は三五種といふが如し。【三】長物　餘計な物。【四】簞瓢人　論語雍也篇に、子曰、賢哉回也、一簞食一瓢飲、在二陋巷一、人不レ堪二其憂一、回也不レ改二其樂一、賢哉回也とある。

【題義】夏日閑に任せて懶放なる狀を述べた詩である。

【詩意】暑いので外出もせず、亦來り訪ふ客もないから、靜な室に深く簾を垂れ、小庭を掃除して之に對し、裳を褰げ冠物をぬいで、誰に氣兼ねもなく歩きなどして日を送つてゐる。先づ朝は涼しいうちに目を覺まして起き、午餐には一二品の魚や肉を食ひ、著物は蕉布や紗など三四種で事足りる。衣食すでに足ればその餘の物は金錢を徒費するのみで、敢て具ふる必要はない。若し彼の顏回などに比べると、吾が生活は甚だ富貴である。

夏服亦多きなし、蕉紗三五事。
身に資する既に給足す、長物徒らに煩費す。
若し簞瓢の人に比せば、吾今太だ富貴なり。

和思黯居守獨飲偶醉見示六韻。時夢得和篇
先成。頗爲二麗絶一。因添二兩韻。繼而美之

思黯居守が獨飲偶醉、六韻を示されしに和す。時に夢得の和篇先づ成り、頗る麗絶となす。因つて兩韻を添へ、繼ぎて之を美す

宮漏滴漸闌。城烏啼復歇。
此時若不醉。爭奈千門月。
主人中夜起。妓燭前羅列。
歌袂默收聲。舞鬟低赴節。
絃吟玉柱品。酒透金杯熱。
朱顏忽已酡。清奏猶未闋。
妍詞黯先唱。逸韻劉繼發。
鏗然雙雅音。金石相磨戛。

宮漏滴ること漸く闌なり、城烏啼いて復歇む。
此時若し醉はずんば、千門の月を爭奈せん。
主人中夜に起くれば、妓燭前に羅列す。
歌袂默して聲を收め、舞鬟低れて節に赴く。
絃吟じて玉柱品あり、酒透りて金杯熱し。
朱顏忽ち已に酡たり、清奏猶未だ闋らず。
妍詞黯先づ唱へ、逸韻劉繼ぎて發す。
鏗然たる雙雅音、金石相磨戛す。

【字解】【一】宮漏　宮中の水時計。【二】千門　宮中の多くの門。【三】主人　牛僧孺を指して言ふ。【四】赴ル節　緩急の調子にあはせる。【五】玉柱　琴柱。【六】朱顏　赤き顏。酡は醉ひて赤くなること。【七】逸韻　すぐれてよき詩。【八】鏗然　金石の聲。

【題義】東都留守（官名）牛僧孺（字は思黯）が獨飲偶醉して六韻（十二句）の詩を示されたのに和したのである。時に劉禹錫（字は夢得）の和詩が先づ成り、その詩が極めて麗絶であつたので、更に兩韻（四句）を添へて之を稱美した。

【詩意】夕に啼いた烏の聲も歇み、洛陽の宮中も夜が段段更けて來た。此時若し醉はなければ千門萬戸を隈なく照す明月に負くといはねばならない。因つて主人が夜中に起き月を賞し酒を酌まんとした所が、妓と燭とが前にならび、敢て高聲に歌はず、緩急に應じて舞うた。絃聲は玉柱と共に變り、酒は金杯に透つて熱く、主人は忽ち醉うたが奏樂はまだ闋らない。時に主人が先づ妍しき詩を作り、劉夢得が之に和したが、二つながら金石の相擊つが如き美しき韻を發する麗詩である。

和夢得洛中早春見贈七韻

夢得が洛中早春、七韻を贈られしに和す

衆皆賞春色。君獨憐春意。
春意竟如何。老夫知此味。
燭餘減夜漏。衾暖添朝睡。
恬和臺上風。虛潤池邊地。
開遲花養豔。語嬾鶯含思。
似訝隔年齋。如勸迎春醉。

衆皆春色を賞す、君獨り春意を憐む。
春意竟に如何、老夫此味を知れり。
燭餘つて夜漏を減じ、衾暖にして朝睡を添ふ。
恬和なり臺上の風、虛潤なり池邊の地。
開くこと遲くして花豔を養ひ、語ること嬾くして鶯思を含む。
年を隔つる齋を訝るに似、春を迎ふる醉を勸むるが如し。

何日同宴遊。心期二月二。　何れの日か同じく宴遊せん、心に期す二月二。

此日出齋。故云。

【字解】【一】夜漏　漏は水時計。夜の時間。【二】齋　魚肉を食はず精進すること。

【題義】劉禹錫（字は夢得）が洛陽の早春と題する七韻十四句の詩を贈つたのに和した詩である。

【詩意】人は皆春景色を賞するが、君は獨り春の情味を愛する。春の情味とは何かといふに我こそ能く其味を知つてゐる。燭を挑げ坐して夜を更かし、暖かな衾の中に寢て覺えず朝寢をし、臺上風穏かに池邊の地が潤ひ、花は豔を養つて未だ開かず、鶯は思を含んで未だ啼かず。これぞ春の情趣である。君は吾が年を越してもまだ精進してゐることを訝り、春を迎へて醉ふことを勸めるものの如くであるが、その中俱に宴遊したいものだ。二月二日はどうかと獨り心に期してゐる。

【餘論】唐宋詩醇に開遲花養レ豔、語嫩鶯含レ思の十字、刻畫工絶、春意を寫し虚を變じて實となす、尤も奇なりと評してある。

櫻桃花下有レ感而作

開成三年春季。美二周賓客南池一者。

櫻桃花下感ありて作る　開成三年の春季、周賓客の南池を美する者なり。

(一)藹藹美周宅。櫻繁春日斜。　藹藹として美なる周宅、櫻繁りて春日斜なり。

一爲洛(二)下客。十見池上花。　一たび洛下の客となりてより、十たび池上の花を見る。

爛熳豈無レ意。爲レ君占二年華一。　爛熳として豈意なからんや、君が爲に年華を占む。

風光饒二此樹一。歌舞勝二諸家一。　風光此樹に饒に、歌舞諸家に勝る。

失盡白頭伴。長成紅粉娃。　失盡す白頭の伴、長成す紅粉の娃。

停レ杯兩相顧。堪レ喜亦堪レ嗟。　杯を停めて兩ながら相顧み、喜ぶに堪へ亦嗟くに堪へたり。

自頭伴。紅粉娃。皆有レ所レ屬。

【字解】【一】藹藹　草木の繁茂せる貌。【二】洛下　洛陽。

【題義】櫻桃の花の下で感ずる所あつて作つた詩である。

【詩意】藹藹と草木が茂つて周賓客の宅は誠に美しい。殊に櫻桃の花が咲き揃つた處を春日の照すさまは亦一入である。僕は一たび洛陽に移り住んでから既に十回この花を賞した。いつ見ても爛熳として君（周賓客を指す）が爲に豔華を呈して君を欣ばすものの如く、此樹が最も春色を誇り、君が家の歌舞も亦諸家に勝つてゐる。白髮の仲間は年年去り盡し、小妓は年年長成する。因つて相俱に杯を停めて一には長生を喜び一には衰老を悲んだ。

洗竹

布裘寒擁頸。氈履溫承足。
獨立氷池前。久看洗霜竹。
先除老且病。次去纖而曲。
剪棄猶可憐。琅玕十餘束。
青青復簹簹。頗異凡草木。
依然若有情。迴頭語僮僕。
小者截魚竿。大者編茅屋。
勿作篲與箕。而令糞土辱。

【字解】【一】氈履　毛氈で作つたくつ。【二】可憐　愛すべしの意。【三】琅玕　石にして玉に似たるもの。竹を玉に比していふ。【四】簹簹　竹の長く鋭き貌。詩經に「簹簹竹竿、以釣于淇」とある。【五】依然　慕はしげなる貌。【六】篲　箒なり。箕は塵とり。

【題義】竹をすかし密生せるものを疎にしたことを詠じた詩である。

【詩意】寒いので布裘を頸に卷きつけ溫な毛氈で作つた履をはき、氷のはりつめた池の前に立つて久しく霜を凌いで立つ竹を眺め、その立ち込んでゐるのを斬つてすかした。先づ年老いて病める竹を除き、次には細くて曲つてゐるのを棄てた。棄てては見たものの猶愛すべく、玉にも比すべき竹の數が十餘束に上つた。いづれも青青と長く鋭くて、平凡な草木とは趣を異にしてゐる。竹の方でも情ある様子で、慕はしさうな様子である。因つて余は顧みて僮僕に命じた。「小なる竹は截つて釣竿にせよ。大なる竹は屋根を葺くに用ひよ。箒や塵取となして糞土の辱めを受けしめぬやうにせよ」と。

新沐浴

形適外無羨。心恬內無憂。
夜來新沐浴。肌髮舒且柔。
寬裁夾烏帽。厚絮長白裘。
裘溫裹我足。帽暖覆我頭。
先進酒一杯。次擧粥一甌。
半酣半飽時。四體春悠悠。
是月歲陰暮。慘冽天地愁。
白日冷無光。黃河凍不流。

新に沐浴す

形適して外羨なく、心恬くして內憂なし。
夜來新に沐浴し、肌髮舒びて且柔なり。
寬裁夾烏帽、厚絮長白裘。
裘溫にして我が足を裹み、帽暖にして我が頭を覆ふ。
先づ酒一杯を進め、次に粥一甌を擧ぐ。
半酣半飽の時、四體春悠悠たり。
是月歲陰暮れ、慘冽にして天地愁ふ。
白日冷にして光なく、黃河凍りて流れず。

何處征戍行。何人羈旅遊。　何れの處にか征戍し行かん、何人か羈旅し遊ばん。
窮途絶糧客。寒獄無燈囚。　窮途糧を絶つ客、寒獄燈なき囚。
勞生彼何苦。遂性我何優。　生を勞して彼何ぞ苦しむ、性を遂げて我何ぞ優なる。
撫心但自媿。孰知其所由。　心を撫して但自ら媿づ、孰か其の由る所を知らん。

【字解】【一】寬裁　ゆるく仕立てた。夾烏帽は袷の帽子。隱者のかぶる帽。【二】厚絮　綿を厚く入れた。【三】一甌　ひとかめ。【四】半酣　半醉。【五】悠悠　のびのびとしてゐる貌。

【題義】新に沐浴した時の感懷を述べた詩である。

【詩意】體にも何の故障もなく、心も恬くて憂がない。夕方新に沐浴したので肌も髮ものびのびとして柔になつた。そこでゆるく仕立ててある頭巾をかぶり、綿を厚く入れた白裘を著た。裘は長くて足まで裏み、頭巾は暖に頭を覆つてゐる。先づ一杯の酒を飲み次に一甌の粥を啜つた。その半醉半飽の時は吾が身が春のやうに伸伸とした。今月は歳の暮で天地も愁を帶び日も冷に曇り、河も凍つて流れない。こんな時節にも征戍してゐる兵士もあるであらうし、旅に出てゐる人もあらう。また窮途に飢ゑてゐる者もあるであらうし、獄中燈もない處に呻吟してゐる者もあらう。彼等は何故にかくは生を勞するのであらう。又我は何故にかく幸福に性を遂げ得るのであらう。その所由は考へてもわからず、ただ胸を撫でて自ら媿ぢた。

三年除夜

�皙皙燎火光。氤氤臘酒香。
嗤嗤童穉戲。迢迢歲夜長。
堂上書帳前。長幼合成行。
以我年最長。次第來稱觴。
七十期漸近。萬緣心已忘。
不唯少歡樂。兼亦無悲傷。
素屏應居士。青衣侍孟光。
夫妻老相對。各坐一繩床。

顧虎頭畫維摩居士圖。白衣素屏也。

【字解】【一】皙皙　明なる貌。【二】氤氤　氣のあがる貌。臘酒は歳晩の酒。【三】嗤嗤　笑ふ貌。【四】迢迢　永き貌。歳夜は除夜。【五】素屏　白い屏風。居士は佛に事ふる人。樂天自ら謂ふ。【六】青衣　婢をいふ。孟光は後漢の賢婦。梁鴻の妻。樂天の妻に比していふ。【七】繩床　繩をはりたる腰掛。

【題義】開成三年の大晦日の晩の事を敍した詩である。

【詩意】燎火があかあかと輝き臘酒の香がむらむらと立ちのぼる。小供等は嬉嬉として笑ひさざめき

年越の永き夜を戯れて送る。やがて堂上の書帳の前に長幼殘らず行列を成し、自分が最年長者なので順順に我が前に來て觴を獻じた。自分はもう七十に近くなつて世事は總べて忘れ去り、歡樂もないかはりに悲傷もない。白い屏風（晉の顧愷之は虎頭將軍になつたので世に顧虎頭といふ。畫に巧であつた。その畫いた維摩居士の畫像は白衣を著て素屏の前に坐してゐる）は居士にふさはしく、青衣の婢は我が妻に侍してゐる。我等夫妻は老いて相對し、各一の繩床の上に坐してゐる。

自題小園

自ら小園に題す

不レ鬬門館華。不レ鬬林園大。
門館の華なるを鬬はず、林園の大なるを鬬はず。
但鬬レ爲主人。一坐十餘載。
但主人となるを鬬ひ、一たび坐してより十餘載。
廻看甲乙第。列在都城内。
廻つて甲乙の第を看るに、列して都城の内に在り。
素垣夾朱門。藹藹遙相對。
素垣朱門を夾み、藹藹として遙に相對す。
主人安在哉。富貴去不レ廻。
主人安くに在りや、富貴は去つて廻らず。
池乃爲魚鑿。林乃爲禽栽。
池は乃ち魚の爲に鑿ち、林は乃ち禽の爲に栽う。
何如小園主。拄レ杖閒卽來。
何ぞ如かん小園の主、杖に拄へられて閒に卽ち來る。
親賓有レ時會。琴酒連レ夜開。
親賓時ありて會し、琴酒夜を連ねて開く。

以此聊自足。不レ羨大池臺。
此を以て聊か自ら足れりとし、大池臺を羨まず。

【字解】【一】十餘載　十餘年。【二】甲乙第　大宅。甲乙次第あり。故に云ふ。【三】素垣　白色の垣。朱門は朱塗の門。【四】藹藹　微闇の貌。

【題義】己の小園に題した詩である。

【詩意】敢て門館の華美なることや林園の廣大なことを爭はず、ただ其主人となることを求め、此に居を卜してから既に十餘年になる。洛陽の都を廻看すれば大邸宅があちこちに散在し、白色の垣が朱塗の門を夾み遙に相對してゐる。その大邸宅の主人は今どうしたかと問へば、富貴一たび去つて復返らず、池は魚の爲に鑿たれ林は鳥の爲に栽ゑられたやうな結果になり、主人は既に沒落してしまつてゐる。それから見れば、たとひ小園にもせよ、自分が其主人となり、閒に乘じて來り遊び、親賓を會して琴酒の樂を盡す方が遙に勝つてゐる。故に予は此小園を以て自ら足れりとなし、敢て大池臺などを羨まないのだ。

病中晏坐

病中晏坐

有レ酒病不レ飲。有レ詩慵不レ吟。
酒あれども病んで飲まず、詩あれども慵くして吟せず。
頭眩罷レ垂レ釣。手痺休レ援レ琴。
頭眩して釣を垂るるを罷め、手痺れて琴を援くを休む。

竟日悄無事。所居閒且深。
外安支離體。中養希夷心。
窗戸納秋景。竹木澄夕陰。
宴坐小池畔。清風時動襟。

【字解】【一】竟日　終日。【二】支離體　支離は殘缺なり。やみほうけた身體。【三】希夷心　無爲にして平和な心。老子に視之不見名曰希、聽之不聞名曰夷とある。【四】宴坐　安坐なり。

【題義】晏は晩なり。病中夕に坐し、その情景を述べた詩である。

【詩意】酒はあつても病氣にさはるので飲まず、詩はあつても何となく大儀で吟じもせず、頭が重いので釣をも罷め、手が痺れるので琴を彈くこともせずに、終日悄然として閑居し、病みほうけた身を安んじ、無爲の心を養つてゐる。窓を開いて秋景を眺めると竹木が夕陰の間にすがすがしく立つてゐる。因つて池の畔に安坐すれば清風がそよそよと吹いて吾が襟を撫でる。

戒藥

藥を戒む

促促急景中。蠢蠢微塵裏。
促促たる急景の中、蠢蠢たる微塵の裏。
生涯有分限。愛戀無終已。
生涯分限あり、愛戀終り已むなし。
早夭羨中年。中年羨暮齒。
早夭は中年を羨み、中年は暮齒を羨む。
暮齒又貪生。服食求不死。
暮齒又生を貪り、服食して不死を求む。
朝呑太陽精。夕吸秋石髓。
朝に太陽の精を呑み、夕に秋石の髓を吸ひ、
徼福反成災。藥誤者多矣。
福を徼めて反つて災を成し、藥誤る者多し。
以之資嗜慾。又望延甲子。
之を以て嗜慾に資し、又甲子を延べんことを望む。
天人陰隲間。亦恐無此理。
天人陰隲の間、亦恐らくは此理なからん。
域中有眞道。所說不如此。
域中に眞道あり、所說此の如くならず。
後身始身存。吾聞諸老氏。
身を後にして始めて身存すと、吾諸を老氏に聞けり。

【字解】【一】促促　急速なる貌。急景は光陰の速なるをいふ。【二】蠢蠢　うごめく貌。微塵は人の命をいふ。【三】暮齒　老年。【四】太陽精　仙藥の名。【五】秋石髓　仙藥の名。【六】甲子　年歲。【七】陰隲　隲は定なり。天が冥冥の中に在り、默して其民を安定すること。書經洪範に惟天陰隲、下民相協厥居とある。【八】域中　宇宙の間。【九】後身始身存　老子に聖人後其身而身先、外其身而身存とある。

【題義】不老不死を求めて仙藥を服し誤つて死する者を戒めた詩である。

【詩意】光陰は急速で人命は微薄である。人の命には限があるのに、生を戀ふる慾念は已むことがな

い。されば若死にする者は中年の人を羨み、中年の人は老年の人を羨み、老年の人は又生を貪つて仙藥を服して不死を求め、身の幸福を求めんとし藥が誤つて反つて災を招く例が世間に多くある。長生をして嗜慾を貪らうとしても、そんな道理は天地の間にはない。ただ宇宙の間に行はる眞道に於てはそんなことは言はない。老子は我が身を棄ててこそ始めて我が身が存するのだと謂つてゐる。

贈夢得

前日君家飲。昨日王家宴。
今日過我廬。三日三會面。
當歌聊自放。對酒交相勸。
爲我盡一杯。與君發三願。
一願世清平。二願身强健。
三願臨老期。數與君相見。

夢得に贈る

前日は君が家に飲み、昨日は王家に宴し、
今日は我が廬に過り、三日三たび面を會す。
歌に當つて聊か自ら放にし、酒に對して交〻相勸む。
我が爲に一杯を盡せ、君が與に三願を發せん。
一願は世の清平、二願は身の强健。
三願は老期に臨み、數〻君と相見る。

【字解】【一】王家　王氏の家。【二】清平　泰平。

【題義】劉禹錫（字は夢得）に贈つた詩である。

【詩意】一昨日は君の家で酒を飲み、昨日は王氏の家で宴し、今日は我が家に來訪せられ、三日の中に三度君に面會した。遠慮もなく醉歌して互に酒を勸める。どうぞ我が爲にもう一杯飲み給へ。予は君の爲に三願を立てるであらう。一願は世の泰平なこと、二願は身の强健なこと、三願は身の老ゆるまで數〻君と相見ることである。

逸老

白日下駸駸。青天高浩浩。
人生在其中。適時卽爲好。
勞我以少壯。息我以衰老。
順之多吉壽。違之或凶夭。
我初五十八。息老雖非早。
一閑十三年。所得亦不少。
況加祿仕後。衣食常溫飽。
又從風疾來。女嫁男婚了。

逸老

白日は下りて駸駸たり、青天は高くして浩浩たり。
人生れて其中に在り、時に適すれば卽ち好しとなす。
我を勞するに少壯を以てし、我を息するに衰老を以てす。
之に順へば多くは吉壽、之に違へば或は凶夭。
我初め五十八、息老早きに非ずと雖も、
一閑十三年、得る所亦少からず。
況んや祿仕を加へて後、衣食常に溫飽。
又風疾より來、女は嫁し男は婚し了り、

【逸老】莊子云。勞我以生。逸我以老。息我以死也。

白日は下りて駸駸たり、青天は高くして浩浩たり。人生れて其中に在り、時に適すれば卽ち好しとなす。我を勞するに少壯を以てし、我を息するに衰老を以てす。之に順へば多くは吉壽、之に違へば或は凶夭。

莊子に云く、我を勞するに生を以てし、我を逸するに老を以てし、我を息するに死を以てすと。

胷中一無事。浩氣凝襟抱。
飄若雲信風。樂於魚在藻。
桑榆坐已暮。鐘漏行將曉。
皤然七十翁。亦足稱壽考。
筋骸本非實。一束芭蕉草。
眷屬偶相依。一夕棲鳥。
去何有顧戀。住亦無憂惱。
生死尚復然。其餘安足道。
是故臨老心。冥然合玄造。

【字解】【一】駸駸　速なる貌。【二】浩浩　廣大なる貌。【三】風疾　中風。【四】浩氣　浩然の氣。襟抱は心。【五】桑榆　夕暮。【六】鐘漏　漏は水時計。時なり。【七】皤然　白髮の貌。【八】壽考　長命。【九】玄造　天運なり。

【題義】莊子の大宗師篇に「大塊我を載するに形を以てし、我を勞するに生を以てし、我を逸するに老を以てし、我を息するに死を以てす。故に吾が生を善くする者は乃ち吾が死を善くする所以なり」とある旨意を述べた詩である。

【詩意】日は駸駸として過ぎ去り、天は浩浩として廣い。人は生れて其中に在り、天命時運に順應するのが好いのである。天は少壯を以て我を苦勞せしめ、衰老を以て我を休息せしめるのである。天命に順へば吉にして壽を得、之に違へば凶にして若死する。我は五十八で息老した。早く無いやうではあるが、爾來十三年を經て今日に至り、得る所が決して少くなかつた。況んや仕官してより以來常に衣食に不自由なく、中風に罹つて後は（開成四年十一月、六十八歳の時風痺の疾を得、諸妓女を放つた。）子女の婚嫁も畢つて、心に懸る憂もなく、風のまにまに飛ぶ雲の如く藻中に樂む魚の如くである。夕を送り朝を迎へて既に七十の老翁となつたからには、先づ長命と謂つて宜しい。人の身は實あるものではなく、譬へば一束の芭蕉のやうなものだ。一家眷屬相依るも亦一夜の塒を同じうせる鳥と同じである。さう悟つて見れば去るも顧戀する所はなく、住まるも憂惱する所はない。生死すら運命に任せてゐるのだから、其他の事は勿論である。故に吾が衰老の心は天運と冥合して何等の疑惑を抱かない。

遇物感興因示子弟

聖擇狂夫言。俗信老人語。
我有老狂詞。聽之吾語汝。
吾觀器用中。劍銳鋒多傷。

物に遇ひ興を感じ因つて子弟に示す

聖も狂夫の言を擇び、俗も老人の語を信ず。
我に老狂詞あり、之を聽け吾汝に語らん。
吾器用の中を觀るに、劍鋭ければ鋒多く傷つく。

吾觀形骸內。骨勁齒先亡。
寄言處世者。不可苦剛強。
龜性愚且善。鳩心鈍無惡。
人賤拾支牀。鶻欺擒煖脚。
寄言立身者。不得全柔弱。
彼固罹禍難。此未免憂患。
于何保終吉。強弱剛柔間。
上遵周孔訓。旁鑒老莊言。
不唯鞭其後。亦要軛其先。

吾形骸の内を觀るに、骨勁ければ齒先づ亡ぶ。
言を世に處する者に寄す、苦だ剛強なるべからず。
龜は性愚なるも且善なり、鳩は心鈍なるも惡なし。
人賤み拾ひて牀を支へ、鶻欺き擒へて脚を煖む。
言を身を立つる者に寄す、全く柔弱なるを得ざれ。
彼固より禍難に罹り、此未だ憂患を免れず。
何に于てか吉を保ち終へん、強弱剛柔の間なり。
上は周孔の訓に遵ひ、旁ら老莊の言に鑒み、
「とを要す。
唯其後れたるを鞭つのみならず、亦其先なるを軛せんこ」

【字解】【一】狂夫言　史記淮陰侯傳に廣武君の曰く、狂夫之言、「聖人擇焉とある。【三】器用　器物。【三】支牀　臥榻の臺にある。史記龜策傳に、南方老人用龜支牀足云云とある。【四】彼　其だ剛強なる者。【五】此　全く柔弱なる者。【六】周孔　周公、孔子。【七】鞭其後　莊子達生篇に、善養生者若牧羊然。視其後者而鞭之とある。短處を補ふこと。【八】軛其先　長處を抑へる。

【題義】事に遇ひて感ずる所あり、因つて賦して子弟に示した詩である。

【詩意】聖人も狂夫の言を擇び俗人も老人の言を信ずるといふ。我今老狂言を語る程に汝等は能く聽くがよい。彼の器物を觀るに鋭きものは其鋒損傷し易く、吾吾の形體を觀るに齒骨の如き堅い物は先づ挫ける。されば世に處する者に忠告するが、極端に剛強であつてはいけない。彼の龜は性は愚であるが善良であり、鳩は心は鈍いが惡心がない。だから龜は人に拾はれて寢臺の足などにされ、鳩は鶻につかまつて脚を煖める料に供せられる。されば身を立つる者に忠告するが、全然柔弱であつてもいけない。剛強な者は固より禍に遇ふが、柔弱な者も憂患を免れない。然らば如何にせば吉祥を全うするかといふに強剛柔弱の中間が宜しい。且上は周公・孔子の訓に遵ひ、傍ら老子・莊子の言を參考し、ただ其短處を補ふのみならず、その長處を抑へるやうにするがよい。

首夏南池獨酌

春盡雜英歇。夏初芳草深。
薰風自南至。吹我池上林。
綠蘋散還合。赬鯉跳復沈。
新葉有佳色。殘鶯猶好音。
依然謝家物。池酌對風琴。
慙無康樂作。秉筆思沈吟。

首夏南池に獨酌す

春盡きて雜英歇き、夏初芳草深し。
薰風南より至り、我が池上の林を吹く。
綠蘋散じて還合ひ、赬鯉跳りて復沈む。
新葉佳色あり、殘鶯猶好音。
依然たる謝家の物、池に酌んで風琴に對す。
康樂の作なきを慙ぢ、筆を秉りて思沈吟す。

境勝才思劣。詩成不稱心。

境勝りて才思劣り、詩成れども心に稱はず。

【字解】【一】雜英　樣樣の花。【二】綠蘋　綠色のうきぐさ。【三】赬鯉　赤い鯉。【四】依然　さも似たり。謝家は南北朝宋の謝靈運をいふ。靈運永嘉太守となり山水に遨遊し輒ち旬日歸らず、後臨川内史となる、遊放永嘉に異らず。【五】風琴　簷前の鈴なり。【六】康樂　謝靈運をいふ。康樂侯に封ぜられしを以てなり。靈運は山水遊賞の詩に巧なり。【七】沈吟　思案する。

【題義】夏の初に南池の邊で獨酌したことを詠じた詩である。

【詩意】春盡きて花もなくなり、今や夏の初で芳草が茂つてゐる。薰風が南から來て池邊の林を吹いてゐる。池には綠の蘋が散じたり集まつたりし、緋鯉が浮んだり沈んだりしてゐる。樹樹の葉は青青として殘鶯の聲も美しい。恰も謝靈運の遊賞したやうな景色を賞しながら、風琴に對して池邊に獨酌し、靈運のやうな立派な詩の出來ないのを慙ぢ、筆を持つて思案に耽つたが、あまり景色がよすぎるので詩思が壓倒せられ、どうやら詩は出來ても自分ながら氣に入らない。

官俸初罷。親故見憂。以詩諭之

官俸初めて罷められ、親故憂へらる。詩を以て之を諭す

七年爲少傅。品高俸不薄。七年少傅となり、品高くして俸薄からず。
乘軒已多慙。況是一病鶴。軒に乘りて已に多く慙づ、況んや是れ一病鶴をや。
又及懸車歲。筋力轉衰弱。又懸車の歲に及び、筋力轉た衰弱す。
豈以貧是憂。尚爲名所縛。豈貧を是れ憂へ、尚名の縛する所となるを以ひんや。
今春始病免。纓組初擺落。今春初めて病んで免ぜられ、纓組初めて擺落す。
蜩甲有何知。雲心無所著。蜩甲何の知ることあらん、雲心著く所なし。
困中殘舊穀。可備歲飢惡。困中の殘舊穀、歲の飢惡に備ふべし。
園中多新蔬。未至食藜藿。園中新蔬多く、未だ藜藿を食ふに至らず。
不求安師卜。不問陳生藥。安師の卜を求めず、陳生の藥を問はず。
但對丘中琴。時開池上酌。但丘中の琴に對し、時に池上の酌を開く。
信風舟不繫。掉尾魚方樂。風に信せて舟繫がず、尾を掉かして魚方に樂む。
親友不我知。而憂我寂寞。親友我を知らず、而して我の寂寞を憂ふ。

安與陳。皆洛下藝術精者。

【字解】【一】少傅　官名。開成元年樂天年六十五の時、太子少傅に任ぜられた。【二】品高　位の高いこと。【三】乘軒　軒は大夫の車。左傳に衞懿公好鶴、鶴有乘軒者とある。【四】懸車歲　官を辭して隱退する年。禮記に大夫七十而致事とある。【五】纓組　冠の紐や印綬。官職に喩ふ。【六】蜩甲　蟬のぬけがら。【七】雲心　雲の如き心。【八】困中　倉の中。【九】藜藿　あかざ、豆の葉。

【題義】此詩は會昌二年、樂天年七十一の時の作で、官職を辭して退き俸祿も戴かれなくなつたので、親友などが樂天の爲に憂ふる者があつた。因つて此詩を作つて諭したのである。

【詩意】既に七年間太子少傅の官に居り位も高く俸祿も厚かつた。一病鶴にも譬ふべき身を以て軒車に乘るのが慚かしく感ぜられた。況んや七十になり致仕すべき年齡に達し體力も衰へたのであるから、己の貧を憂へていつまでも名利に束縛せられてゐるべきではない。そこで今年の春始めて病を以て官を免ぜられたが、身は蟬の拔殼の如く心は雲の如く無慾であるから少しも心を牽かれることはない。官を罷めても倉には舊穀の殘があつて饑饉に備ふるに足り、園には野菜があつて藜や豆の葉などを食ふほどに窮してはゐない。又安師の卜を求めるほどに心の迷もなく、陳生の藥を服するほどの病氣もない。ただ琴を彈いたり酒を飲んだりして、繫がざる舟の如く水中の魚の如く自由に樂んでゐる。然るに親友は我が眞情を解せず、煩悶でもしてゐはせぬかと心配してくれる者もあるが、それは無用の心配と申すものだ。

閒居偶吟。招鄭庶子皇甫郎中

閒居偶吟、鄭庶子・皇甫郎中を招く

自哂此迂叟。少迂老更迂。　自ら哂ふ此迂叟、少くして迂に老いて更に迂なるを。

家計不一問。園林聊自娛。　家計一も問はず、園林聊か自ら娛む。

竹間琴一張。池上酒一壺。　竹間琴一張、池上酒一壺。

更無俗物到。但與秋光俱。　更に俗物の到るなく、但秋光と俱にす。

古石蒼錯落。新泉碧縈紆。　古石蒼錯落、新泉碧縈紆。

焉用車馬客。卽此是吾徒。　焉んぞ車馬の客を用ひん、卽ち此れ是れ吾が徒。

猶有所思人。各在城一隅。　猶思ふ所の人あり、各城の一隅に在り。

杳然愛不見。搔首方踟躕。　杳然として愛すれども見えず、首を搔いて方に踟躕す。

玄晏風韻遠。子眞雲貌孤。　玄晏は風韻遠く、子眞は雲貌孤なり。

誠知厭朝市。何必憶江湖。　誠に知る朝市を厭ふ、何ぞ必ずしも江湖を憶はん。

能來小澗上。一聽潺湲無。　能く小澗の上に來り、一たび潺湲を聽かんや無や。

【字解】【一】迂叟　樂天自ら謂ふ。【二】錯落　入り亂れること。【三】縈紆　めぐる。【四】杳然　遙なる貌。愛不見は詩經邶風靜女篇に靜女其姝、俟我於城隅、愛而不見、搔首踟躕とある。【五】玄晏　晉の皇甫謐自ら玄晏先生と號す。ここは皇甫郎中に比す。【六】子眞　漢の鄭子眞、名は樸、道を修め默を守る。谷口に家す。世に谷口子眞と號す。ここは鄭庶子に比したのである。【七】潺湲　流水の聲。

【題義】閒居の狀を敍し、鄭庶子（庶子は官名）と皇甫郎中（郎中は官名、皇甫湜である）とを招いた詩

である。

【詩意】吾は少い時から今日まで迂濶者で通して來たことを自ら哂はざるを得ない。家計のことには少しも頓著せず、ただ園林の娛にばかり耽つてゐる。竹林の中に琴を彈じたり池の邊で酒を飲んだりして樂み、俗物の來り問ふなく、ただ秋光と相伴つてゐる。池には古い石が青黑い色をしてごろごろして居り、泉は碧色をなして環流してゐる。車馬の客などはなくもがなで、ただ石や泉を友としてゐる。併しそれでも思ひ慕ふ所の人がないわけには行かぬ。吾が思ふ人は各〻洛陽城の一隅に居り、遠く離れてゐて見えないので首を搔いて徘徊顧望してゐる。皇甫郎中は風趣が高遠で、鄭庶子は俗氣を離れてゐる。けれども朝市を厭うた者は必ずしも江湖を憶ふものとも限らないから、我が小澗に來て水の流でも聽いて樂んではどうだ。

亭西牆下伊渠水中置石。激流潺湲成韻。頗有幽趣。以詩記之

亭西の牆下の伊渠水中に石を置きしに、流に激し潺湲として韻を成し、頗る幽趣あり。詩を以て之を記す

(一)嵌巉嵩石峭。皎潔(二)伊流清。　嵌巉として嵩石峭ち、皎潔にして伊流清し。

立爲(三)遠峰勢。激作(四)寒玉聲。　立つて遠峰の勢を爲し、激して寒玉の聲を作す。

夾(五)岸羅(六)密樹。面(七)灘開(八)小亭。　岸を夾んで密樹を羅ね、灘に面して小亭を開く。

忽疑嚴子瀨。流入洛陽城。　忽ち疑ふ嚴子瀨、流れて洛陽城に入るかと。

是時羣動息。風靜微月明。　是時羣動息み、風靜にして微月明かなり。

高枕夜悄悄。滿耳秋泠泠。　枕を高うして夜悄悄たり、耳に滿ちて秋泠泠たり。

終日臨大道。何人知此情。　終日大道に臨む、何人か此情を知らん。

此情苟自愜。亦不要人聽。　此情苟くも自ら愜ふ、亦人の聽くを要せず。

【字解】【一】嵌巉　山のけはしき貌。嵩石は嵩山の石。【二】伊流　伊水の流。【三】嚴子瀨　浙江省桐廬縣の南に在る。嚴子陵(後漢の嚴光)の居た處である。【四】羣動　すべての物音。【五】悄悄　靜かな貌。【六】泠泠　音聲の洋溢すること。陸機の賦に音泠泠而盈耳とある。

【題義】亭西の牆下の伊水を引いた渠の中に石を置いた所が、其石が流に激して潺湲と快き聲を發するので、大に幽趣を添へた。因つて此詩を作つて其事を記したといふのである。

【詩意】嵩山から持つて來た石が聳え立つて遠峰の姿をなし、伊水の流が清らかで寒玉の聲を立てゝゐる。因つて兩岸に樹を植ゑ列べ、流に面して小亭を構へた。嚴子瀨が洛陽に流れて來たかと疑はるゝばかりである。一切の物音が鎭まり風もなく微月の高く升つた時、枕を高うし臥して聽けば、泠泠

として耳に快い。大道の側に在つて、こんな風情があらうとは誰も知る者はあるまいが、我獨り此風情を賞翫し得れば、敢て人の聽くことは求めない。

閒題家池寄王屋張道士

有石白磷磷。有水清潺潺。
石あり白くして磷磷たり、水あり清くして潺潺たり。
有叟頭似雪。婆娑乎其間。
叟あり頭雪に似たり、其間に婆娑す。
進不趨要路。退不入深山。
進んで要路に趨らず、退いて深山に入らず。
深山太濩落。要路多險艱。
深山は太だ濩落、要路は險艱多し。
不如家池上。樂逸無憂患。
如かず家池の上、樂逸して憂患なきに。
有食適吾口。有酒酡吾顏。
食あり吾が口に適ひ、酒あり吾が顏を酡くす。
恍惚遊醉鄉。希夷造玄關。
恍惚として醉鄉に遊び、希夷として玄關に造る。
五千言下悟。十二年來閑。
五千言下に悟り、十二年來閑なり。
富者我不顧。貴者我不攀。
富は我顧みず、貴は我攀ぢず。
唯有天壇子。時來一往還。
唯天壇子のみあり、時に來りて一たび往還す。

閒に家池に題し王屋の張道士に寄す

【字解】【一】王屋　山の名。山西省陽城縣の西南に在り、南河南省濟源縣に跨る、一名天壇山。【二】磷磷　玉石の色澤。【三】潺潺　流水の聲。【四】婆娑　徘徊する貌。【五】濩落　廓落なり。空闊なり。【六】希夷　老子に視レ之不レ見、名曰レ夷、聽レ之不レ聞、名曰レ希とあり。よく道を體して暗默を守ること。玄關は玄道の門。【七】五千言　老子道德經。【八】天壇子　張道士をいふ。

【題義】閒に自家の池に題し、王屋山中の張道士（道士は道敎を修むる士。張は其姓）に寄せた詩である。

【詩意】吾が家の池には白石が磷磷と輝き清水が潺潺と流れてゐる。白髮の老翁たる我は常に其間に徘徊してゐる。我は進んで權要の地位にも登らず、退いて山中に隱遁もしない。山中はあまりに寂寞であり、權要の地位は危險が多いからである。ただ吾が家の池邊は樂んで且何等の憂患もなく、食は我が口に適ひ酒は我が顏を赤くするに足りる。因つて恍惚として酣醉し陶然として道を樂み、老子を讀んで言下に眞意を悟り、十二年來ここに閑生涯を送つてゐる。富貴は吾が願でないから富貴の人の來り訪ふ者なく、ただ天壇山中の張道士が時時來訪するのみである。

李・盧二中丞各創山居。俱誇勝絕。然去城稍遠。來往頗勞。敝居新泉。實在宇下。偶題十五韻。聊戲二君

李・盧二中丞各、山居を創め、俱に勝絕を誇る。然れども城を去ること稍遠

格詩　閒題家池寄王屋張道士　李盧二中丞各創山居俱誇勝絕偶題十五韻聊戲二君

く來往頗る勞す。敝居の新泉は實に宇下に在り。偶〻十五韻を題し聊か二君に戲る

龍門蒼石壁。李所レ有也。
浥澗碧潭水。盧所レ有也。
各在二一山隅一。迢迢幾十里。
清鏡碧屏風。惜哉信爲レ美。
愛而不レ得レ見。亦與レ無相似。
聞君每來去。矻矻事二行李一。
脂レ轄復裹レ糧。心力頗勞止。
未レ如吾舍下。石與レ泉甚邇。
鑿鑿復濺濺。晝夜流不レ已。
洛石千萬拳。襯波鋪二錦綺一。
海珉一兩片。激瀨含二宮徵一。
綠宜二春濯一足。淨可二朝漱一齒。

龍門の蒼石壁、
浥澗の碧潭水。
各〻一山の隅に在り、迢迢幾十里。
清鏡碧屏風、惜いかな信に美たり。
愛すれども見るを得ず、亦無きと相似たり。
聞く君毎に來去し、矻矻として行李を事とし、
轄に脂さし復糧を裹み、心力頗る勞止すと。
未だ如かず吾が舍下、石と泉と甚だ邇く。
鑿鑿復濺濺、晝夜流れて已まざるに。
洛石千萬拳、襯波錦綺を鋪く。
海珉一兩片、激瀨宮徵を含む。
綠は春足を濯ふに宜しく、淨は朝齒を漱ぐべし。

繞レ砌紫鱗游。拂レ簾白鳥起。
何言履道叟。便是滄浪子。
君若趁二歸程一。請君先到レ此。
願以二潺湲一聲。洗二君塵土耳一。

願はくは潺湲の聲を以て、君が塵土の耳を洗はん。

【字解】【一】龍門　洛陽の南に在る山の名。【二】浥澗　前に見ゆ。【三】迢迢　遙なる貌。【四】矻矻　勞する貌。行李は荷物。【五】脂レ轄　車にあぶらをつけて、よくまはるやうにすること。【六】勞止　止は助辭。勞する意。【七】鑿鑿　鮮明の貌。詩經に白石鑿鑿とある。濺濺は泉のそそぐ貌。【八】洛石　洛水の石。千萬拳は千萬個なり。中庸に山一拳石之多とある。【九】襯波　寄の波。【一〇】海珉　海邊に生ずる美石。【一一】宮徵　宮も徵も音調の名。【一二】履道　洛陽の里の名。樂天の家の在る處。【一三】滄浪　川の名。孟子に有二孺子一歌曰、滄浪之水清兮、可三以濯二我纓一、滄浪之水濁兮、可三以濯二我足一とある。【一四】潺湲　水の流るる聲。

【題義】李・盧二中丞（御史中丞）が各〻山莊を營み其景勝を誇つてゐるが、惜しいかな遠く都を離れてゐるので來往に不便である。所が吾が家の新泉はすぐ軒の下に在るので極めて遊賞の便が多い。因つて十五韻三十句の詩を題して李・盧二君に戲れたといふのである。

【詩意】李中丞や盧中丞の山莊は皆山の一隅に在つて遠く都を離れてゐるので、碧潭は鏡の如く石壁は屏風の如く、誠に美しくはあるが容易に往いて見ることが出來ないから、有つても無いと同樣である。聞けば君等が都に來るときは旅の荷物を携へ、車に脂をさしたり辨當の用意をしたりして心力を

勞するさうだ。それとはちがつて、吾が家の泉石はすぐ軒の下に在つて、石は鑿鑿と輝き泉は濺濺と注ぎ、晝夜流れて已まず。千萬個の拳石に錦のやうな漣が寄せ、海珉に激する瀨の音が宮徵の調を奏してゐる。綠の流は春足を濯ふに宜しく、淨きことは朝口を漱ぐに宜しく、魚は砌を繞つて遊び、白鳥は簾を掠めて飛び起ちなどしてゐる。さればこに此に樂む我は履道の老翁と言はんよりは、寧ろ滄浪の孺子といふべきである。君等が若し山莊へ歸る時には先づ吾が家に立寄るがよい。そして潺潺たる泉聲を以て君等の汙れた耳を洗つてやりたいものだ。

北窗竹石

一片瑟瑟石。數竿青青竹。
向我如有情。依然看不足。
況臨北窗下。復近西塘曲。
筠風散餘清。苔雨含微綠。
有妻亦衰老。無子方煢獨。
莫掩夜窗扉。共渠相伴宿。

北窗の竹石

一片瑟瑟たる石、數竿青青たる竹。
我に向つて情あるが如し、依然として看れども足らず。
況んや北窗の下に臨み、復西塘の曲に近きをや。
筠風餘清を散じ、苔雨微綠を含む。
妻あれども亦衰老し、子なくして方に煢獨なり。
夜窗の扉を掩ふ莫れ、渠と共に相伴つて宿せん。

【字解】【一】瑟瑟　珍寶の名。【二】依然　懸戀の貌。【三】筠風　竹風。【四】煢獨　孤獨。

【題義】北窗の下に在る竹と石とを詠じた詩である。

【詩意】玉の如き一片の石と數本の青い竹とが有情物のやうに我に向つてゐる。我も亦懸戀の情を起し、いくら看ても看飽きない。北窗の下に西塘の邊に在つて、風は竹を吹いて餘清を散じ、苔は雨を經て微綠を含んでゐるのが特の外よろしい。我は妻はあれども既に老衰し、子はなくて孤獨である。だから夜も窗の扉を閉ぢずに、かの竹と石とを伴つて眠るのである。

飲後戲示弟子

吾爲爾先生。爾爲吾弟子。
孔門有遺訓。復坐吾告爾。
先生饌酒食。弟子服勞止。
孝敬不在他。在茲而已矣。
欲我少憂愁。欲我多歡喜。
無如醞好酒。酒須多且旨。
旨卽賓可留。多卽罍不恥。

飲後戲れに弟子に示す

吾は爾の先生たり、爾は吾の弟子たり。
孔門に遺訓あり、復坐せよ吾爾に告げん。
先生には酒食を饌せしめ、弟子は勞止に服すと。
孝敬は他に在らず、茲に在るのみ。
我の憂愁少からんことを欲し、我の歡喜多からんことを欲せば、
好酒を醞すに如くは無し、酒は須らく多く且旨かるべし。
旨ければ卽ち賓留むべく、多ければ卽ち罍恥ぢず。

吾更有一言。爾宜聽入耳。
人老多憂貧。人病多憂死。
我今雖老病。所憂不在此。
憂在半酣時。尊空座客起。

【字解】【一】先生　父兄をいふ。【二】孔門　孔子の門。論語に子夏問孝、子曰、色難、有事弟子服其勞、有酒食先生饌、曾是以爲孝乎とある。【三】饌　飲食する。【四】勞止　止は助辭。勞役なり。【五】罍　酒樽。【六】半酣　半醉なり。

【題義】醉後に戯れに子弟に示した詩である。

【詩意】吾は汝等の父兄で汝等は吾の子弟である。孔子の遺訓を汝等に教へるから、まあ坐るがよい。酒食があれば先づ父兄に薦め、勞役は子弟が之に服するといふのが孔子の訓である。だから我の憂愁少く歡喜多きを欲するならば、旨い酒を多く釀すがよい。酒が旨ければ客を留めて俱に飲むことが出來、酒が多くあれば樽が恥をかくことはない。人は老いては貧を憂へ病んでは死を憂ふるが、我は老い且病むと雖も、貧や死は敢て憂へない。まだ半醉なのに樽が空になり客が去るのが吾が憂である。

閒坐看書貽諸少年

雨砌長寒蕪。風庭落秋果。
閒坐看書貽諸少年

【一】雨砌　雨に潤へる庭。寒蕪は荒涼たる雜草。【二】閒叟　閒居する翁。樂天自ら謂ふ。【三】盡日　終日。【四】窗間　窗間に閒叟あり、盡日書を看て坐す。
書中往事。歷歷知福禍。
多取終厚亡。疾驅必先墮。
勸君少干名。名爲錮身鑠。
勸君少求利。利是焚身火。
我心知已久。吾道無不可。
所以雀羅門。不能寂寞我。

【字解】【一】雨砌　雨に潤へる庭。寒蕪は荒涼たる雜草。【二】閒叟　閒居する翁。樂天自ら謂ふ。【三】盡日　終日。【四】多取云云　老子に甚愛必大費、多藏必厚亡とある。【五】雀羅門　訪ふ人もなき淋しき門。漢書に下邽翟公爲廷尉、賓客塡門、及廢、門外可設雀羅とある。

【題義】閒坐して書を讀み少年諸子に貽つたといふ詩である。

【詩意】庭が雨に潤ほつて雜草が伸び、風に吹かれて秋果が落ちる。そこに一人の老翁が閒居し、終日書を讀んで暮し、書中に記述せられてある往事を見て一一その禍福を知つてゐる。多く取れば終には必ず多く亡ひ、走ること速なれば必ず先づ衰へるものである。因つて少年諸子に勸めるが、あまり名利を求めぬがよい。名は身を錮する鎖で、利は身を焚く火であるから。吾は心に之を知ること久しき

故、吾が行ふ所は一として不可なるものはない。だから誰訪ふ人もなく門庭蕭條としてゐるが、我が心をして寂寞たらしめることは出來ない。

夢上山　時足疾未平。

夜夢上嵩山。獨携藜杖出。
千巖與萬壑。遊覽皆周畢。
夢中足不病。健似少年日。
既悟神返初。依然舊形質。
始知形神内。形病神無疾。
形神兩是幻。夢悟俱非實。
晝行雖蹇澁。夜步頗安逸。
晝夜既平分。其間何得失。

【題義】 夢に嵩山に上つた詩で、その時足疾がまだ平癒しなかつたといふ。

【詩意】 夜夢に嵩山に上らうとして藜の杖を携へて獨りで出掛けた。それから千巖、萬壑隈なく遊覽し盡したが、足が少しも障なく少年の時のやうに丈夫であつた。併し夢が覺めて精神が元に返つて見ると形體はやはりもとの儘であつた。そこで形體は病んでも精神は病まず。形體も精神も俱に幻影に過ぎず、夢も覺も俱に實にあらず、晝歩けば不自由を感ずるが夜歩けば何の障もない。晝と夜と既に平分であるから、何の得失もないことがわかつた。

夢に山に上る　時に足疾未だ平えず。

夜夢に嵩山に上り、獨り藜杖を携へて出づ。
千巖と萬壑と、遊覽皆周く畢へたり。
夢中足病まず、健なること少年の日に似たり。
既に悟めて神初めに返れば、依然たる舊形質。
始めて知る形神の内、形病むも神疾なきを。
形神兩ながら是れ幻、夢悟俱に實に非ず。
晝行けば蹇澁なりと雖も、夜步すれば頗る安逸なり。
晝夜既に平分なり、其間何ぞ得失あらん。

對酒閑吟贈同老者

人生七十稀。我年幸過之。
遠行將盡路。春夢欲覺時。
家事口不問。世名心不思。
老既不足歎。病亦不能治。
扶持仰婢僕。將養信妻兒。
飢飽進退食。寒暄加減衣。
聲妓放鄭衞。裘馬脫輕肥。
百事盡除去。尚餘酒與詩。

酒に對して閑吟し同じく老ゆる者に贈る

人生七十稀なり、我が年幸に之を過ぐ。
遠行將に盡きんとする路、春夢覺めんと欲する時。
家事は口に問はず、世名は心に思はず。
老は既に歎ずるに足らず、病も亦治する能はず。
扶持婢僕に仰ぎ、將養妻兒に信す。
飢飽食を進退し、寒暄衣を加減す。
聲妓鄭衞を放ち、裘馬輕肥を脫す。
百事盡く除き去り、尚酒と詩とを餘す。

興來吟一篇。吟罷酒一巵。
不獨適情性。兼用扶衰羸。
雲液灑六腑。陽和生四肢。
於中我自樂。此外吾不知。
寄問同老者。舍此將安歸。
莫學蓬心叟。胸中殘是非。

興來れば一篇を吟じ、吟じ罷めて酒一巵。
獨り情性に適するのみならず、兼ねて用つて衰羸を扶く。
雲液六腑に灑ぎ、陽和四肢に生ず。
中に於て我自ら樂む、此外吾知らず。
同じく老ゆる者に寄せ問ふ、此を舍てて將に安にか歸せんとする。
學ぶ莫れ蓬心の叟、胸中是非を殘すに。

【字解】【一】將養　將も亦養なり、說苑に聖王之於二百姓一也、將レ之養レ之、育レ之長レ之とある。【三】寒暄　寒暖なり。【三】鄭衞　淫靡な音樂。【四】一巵　一壺。【五】雲液　酒をいふ。【六】蓬心叟　けちな料簡を持つ老人。莊子齊物論に、夫子猶有二蓬之心一也夫とある。

【題義】酒に對して閑吟し、同じく老境に在る者に贈つた詩である。

【詩意】古來七十まで生きる者は稀だといふが我は既に七十を過ぎて、遠行の路の將に盡きんとするが如く、春の夜の夢の將に覺めんとするが如き境遇に居り、家の事などは全く口に出さず名利の事は念頭に置かず、老も嘆ずるに足らず、病も治する能はず、婢僕や妻兒の扶養に任せ、飢飽によつて食物を增減し、寒暖によつて著物を調節し、鄭衞の聲妓を解放し、輕裘肥馬を用ひず、萬事を一掃し去つて唯酒と詩とを餘すのみで、興が湧けば詩を吟じ、吟じ罷めては酒を飲み、獨り心を樂ましむるのみならず同時に衰羸の身を扶養する。酒が六腑にしみ渡れば、陽和の氣が四體に生ずる。我は樂みを其間に求め、其外の事には全く頓著しない。因つて同じく老いたる者に此詩を寄せて尋ねる。此を捨てて何を求めんと欲するか。胸中に是非の差別を固執し、固陋の心を抱く老叟を學ばぬがよい」と。

晩起閑行

皤然一老子。擁裘仍隱几。
坐穩夜忘眠。臥安朝不起。
起來無可作。閉目時叩齒。
靜對銅爐香。暖漱銀缾水。
午齋何儉潔。餅與蔬而已。
西寺講楞伽。閑行一隨喜。

晩起閑行

皤然たる一老子、裘を擁して仍几に隱る。
坐すること穩にして夜眠を忘れ、臥すこと安くして朝に起きず。
起き來れども作すべきなく、目を閉ぢて時に齒を叩く。
靜に銅爐の香に對し、暖に銀缾の水に漱ぐ。
午齋何ぞ儉潔なる、餅と蔬とのみ。
西寺に楞伽を講ず、閑行して一たび隨喜す。

【字解】【一】皤然　白髮の貌。一老子は樂天自ら謂ふ。【二】叩レ齒　顏氏家訓に、吾嘗患二齒搖動欲レ落、飲食熱冷皆苦二疼痛一、見二抱朴子叩レ齒之法一、早朝叩レ齒三百下爲レ良とある。【三】楞伽　佛經の名。【七】隨喜　寺院に遊謁するをいふ。【題義】朝おそく起きて閑步したことを敍した詩である。

【詩意】白髮の老翁たる我は裘を擁して脇息に凭りかかり、穩に坐して夜は寢るのを忘れ、安らかに寢て朝は仲仲起きない。起きても何もする事がないので目を閉ぢて齒を叩き、靜に香爐に對し、銀瓶の水で漱ぎなどする。晝食は至つて儉潔で唯餅と野菜とだけである。やがて西方の寺で楞伽經の講義が始まるので、閒に行つては聽聞する。

香山居士寫眞詩　幷序

香山居士寫眞の詩　幷に序

元和五年。予爲左拾遺翰林學士。奉詔寫眞於集賢殿御書院。時年三十七。會昌二年。罷太子少傅。爲白衣居士。又寫眞於香山寺藏經堂。時年七十一。前後相望殆將三紀。觀今照昔。慨然自歎者久之。形容非一。世事幾變。因題六十字。以寫所懷。

【訓讀】元和五年、予左拾遺・翰林學士となり、詔を奉じて眞を集賢殿の御書院に寫す。時に年三十七。會昌二年、太子少傅を罷め、白衣居士となり、又眞を香山寺の藏經堂に寫す。時に年七十一。前後相望むに殆ど將に三紀ならんとす。今を觀昔を照し、慨然として自ら歎ずること之を久しうす。形容一にあらず、世事幾たびか變ず。因つて六十字を題し以て所懷を寫す。

【字解】【一】元和五年　汪立名曰く、公生二於壬子一。三十七歲爲二元和三年丁亥一、若五年庚寅、則年三十九矣。此五年當レ誤。況序中云、前後相望、殆將二三紀一、時年七十一。爲二會昌二年壬戌一、自二丁亥一至二壬戌一、計三十五年。與レ將二三紀一之語一正合。三五字形易レ訛。其爲二傳寫之誤一無レ疑也と。【二】白衣居士　無官の人。【三】三紀　十二年を一紀といふ。【四】形容　容貌。

昔作二少學士一。圖レ形入二集賢一。
今爲二老居士一。寫レ貌寄二香山一。
鶴毳變二玄髮一。雞膚換二朱顏一。
前形與二後貌一。相去三十年。
勿レ歎韶華子。俄成二皤叟仙一。
請看東海水。亦變作二桑田一。

【字解】【一】鶴毳　鶴の柔かな毛。白髮になつたこと。玄髮は黑髮。【二】雞膚　老人の皮膚。朱顏はわかわかしき顏。【三】韶華子　青年をいふ。皤叟仙は白髮の老仙。【四】桑田　洪の神仙傳に、麻姑謂二王方平一曰、自二接待一以來、見二東海三變爲二桑田一云云とある。

【題義】官を罷めて香山居士と稱した頃の畫像についての詩である。

【詩意】昔は年少き學士となり、肖像を畫いて集賢殿に納めたが、今は老居士となり、復肖像を畫いて香山寺に託した。黑髮は變じて白髮となり、朱顏は變じて雞腐となり、相去ること三十年の間に容姿が全く一變した。併し青年が老仙になつたのを歎ずるには及ばない。かの東海の水を看られよ、亦一變して今は桑畠になつてゐるではないか。

二年三月五日齋畢開素。當食偶吟。贈妻弘農郡君

二年三月五日齋畢り素を開く。食に當りて偶吟し、妻弘農郡君に贈る

睡足肢體暢。晨起開中堂。
初旭泛簾幕。微風拂衣裳。
二婢扶盥櫛。雙童舁簟牀。
庭東有茂樹。其下多陰涼。
前月事齋戒。昨日散道場。
以我久蔬素。加籩仍異糧。
魴鱗白如雪。蒸炙加桂薑。
稻飯紅似花。調沃新酪漿。
佐以脯醢味。間之椒薤芳。
老憐口尚美。病喜鼻聞香。
嬌騃三四孫。索哺繞我傍。
山妻未舉案。饞叟已先嘗。
憶同牢巹初。家貧共糟糠。
今食且如此。何必烹豬羊。
況觀姻族間。夫妻半存亡。
偕老不易得。白頭何足傷。
食罷酒一杯。醉飽吟又狂。
緬想梁高士。樂道喜文章。
徒誇五噫作。不解贈孟光。

睡足り肢體暢び、晨に起きて中堂を開く。
初旭簾幕に泛び、微風衣裳を拂ふ。
二婢盥櫛を扶け、雙童簟牀を舁く。
庭東に茂樹あり、其下に陰涼多し。
前月齋戒を事とし、昨日道場を散ず。
我が久しく蔬素なるを以て、籩を加へて仍糧を異にす。
魴鱗白くして雪の如く、蒸炙桂薑を加ふ。
稻飯紅にして花の似く、調沃す新酪漿。
佐くるに脯醢の味を以てし、之に間へて椒薤芳し。
老いて口の美を尚ぶを憐み、病んで鼻の香を聞くを喜ぶ。
嬌騃三四孫、哺を索めて我が傍を繞る。
山妻未だ案を舉げず、饞叟已に先づ嘗む。
憶ふ牢巹を同じうせし初、家貧にして糟糠を共にせしを。
今食ふこと且此の如し、何ぞ必ずしも豬羊を烹ん。
況んや姻族の間を觀るに、夫妻半存亡す。
偕老は得易からず、白頭何ぞ傷むに足らん。
食罷みて酒一杯、醉飽して吟又狂す。
緬に想ふ梁高士、道を樂んで文章を喜む。
徒に五噫の作を誇り、解せず孟光に贈るを。

【字解】【一】開素　開菜とも開葷ともいふ。精進が終つて始めて酒殺を飲食すること。【二】齋戒　精進なり。【三】道場　寺院。精進する處。【四】蔬素　菜食。【五】籩　肉を盛る竹器。【六】蒸炙　むし肉や燒肉。桂薑は肉桂及び生姜。藥味なり。【七】嬌騃　あどけなきこと。【八】舉案　食膳を擧げて眉に齊うすること。後漢の梁鴻字は伯鸞、家貧にして節を尚ぶ。同縣の孟光を娶る。裝飾甚だ盛なり。七日にして鴻答へず。妻乃ち椎髻布衣、操作して前む。鴻喜んで曰く、此れ眞に梁鴻の妻なりと。後吳に往き皐伯通に依りて廡下に居り、人の爲に賃舂す。孟光食を具へ案を擧げて眉に齊うす。伯通之を異とす。【九】饞叟　貪食する翁、樂天自ら謂ふ。【一〇】牢巹　牢は廩食。巹は婚禮に用ふる酒器。【一一】梁高士　梁鴻をいふ。【一二】五噫作　五噫歌なり。後漢書に梁鴻東出關過京師、作五噫之歌、曰、陟彼北芒兮噫、顧甄帝京兮噫、宮室崔嵬兮噫、人之劬勞兮噫、遼遼未央兮噫、肅宗聞而非之、求鴻不得とある。

【題義】會昌二年三月五日定期の精進が畢り、久し振りで精進落しの酒殺を取るに當り、此詩を作

つて妻に贈つたのである。樂天の妻は夫の功に依つて弘農郡君に封せられた。

【詩意】十分に睡り手足の伸伸とした所で朝早く起き中堂を開けば、旭の光が簾幕のあたりに漂ひ、微風が衣裳を吹いて氣持がよい。二人の婢に扶けられて手水を使ひ髪を梳り、二人の僮に命じ簟牀を舁かしめて屋外に出でて、庭の東の綠陰の下で食事を取ることにした。先月から寺に籠つて精進を始め昨日で滿期になつた。久しく菜食ばかりしてゐたので特別に珍味を具へ、魴の鱗は雪の如く白く、それを蒸したり炙いたりして桂薑の藥味を加へ、稻飯は花の如く紅で其に新酪漿がかけてある。更に之に添ふるに脯醢を以てし、胡椒や薤なども間へてある。年は老いても尙美味を貪ることを憐み、病後とはいへ尙鼻のきくのを喜んだ。あどけない三四人の孫等が我を取卷いて食物をねだり、妻はまだ膳を擧げないのに我は早くも貪り食つた。憶へば昔お前と結婚した時は貧乏であつたから、共に糟糠の食によつて飢を凌いだものであつたが、今日はこんな生活が出來るのであるから、猪や羊を烹るやうな豪奢な事は敢て望まない。まして親戚の間を觀るに夫妻半は死亡して、夫婦偕に息災でゐるのは稀なのだから、白頭になつたことなどは悲むには足らない。食事が終つてから一杯の酒を飲み、醉飽して又狂吟した。想ふに後漢の梁鴻は道を樂み文章を好んだことは我と同じであるが、徒に五噫歌を作つて自ら誇るのみで、妻たる孟光に贈ることを知らなかつたことは、我に劣ると謂つてよからう。

不出門　門を出でず

彌月不出門。永日無來賓。
月に彌りて門を出でず、永日來賓なし。
食飽更拂牀。睡覺一頻伸。
食飽けば更に牀を拂ひ、睡覺めて一たび頻伸す。
輕箑白鳥羽。新簟青箭筠。
輕箑白鳥の羽、新簟青箭の筠。
方寸方丈室。空然兩無塵。
方寸方丈の室、空然として兩ながら塵なし。
披衣腰不帶。散髮頭不巾。
衣を披て腰帶せず、髮を散じて頭巾せず。
袒跣北窗下。葛天之遺民。
袒跣北窗の下、葛天の遺民なり。
一日亦自足。況得以終身。
一日すら亦自ら足る、況んや以て身を終るを得るをや。
不知天壤內。目我爲何人。
知らず天壤の內、我を目して何人となす。

【字解】【一】頻伸　眉を縮めたり、のびをしたりする。【二】方丈は一丈四方。【五】葛天　太古の天子。

【題義】門を出ないで閉居してゐる事を敍した詩である。

【詩意】一個月に彌つて全く外出せず、日の永いのに來り訪ふ客もない。食飽けば寢臺の塵を拂つて横はり、睡が覺めれば眉を縮めたり伸をしたりする。白鳥の羽の箑を持ち青竹の簟に坐し、心も室も淸らかにして塵なく、ただ著物をひつかけて帶などはしめず、髮を散らして頭巾もかぶらず、肌

ぬぎで跣足で北窗の下に逍遙してゐる我は、全く葛天氏の遺民でもあるかのやうである。こんな氣樂な生活をしてゐるのは一日ですら結構なのに、我は幸にも一生をこんな風にして送つた。世人は我を呼んで何と謂ふであらうか。

感舊　幷序

舊を感ず　幷に序

故李侍郎杓直。長慶元年春薨。元相公微之。太和六年秋薨。崔侍郎晦叔。太和七年夏薨。劉尚書夢得。會昌二年秋薨。四君子予之執友也。三十年間。凋零共盡。唯予衰病。至今獨存。因詠悲懷。題爲感舊。

【訓讀】故の李侍郎杓直は長慶元年春薨じ、元相公微之は太和六年秋薨じ、崔侍郎晦叔は太和七年夏薨じ、劉尚書夢得は會昌二年秋薨ず。四君子は予の執友なり。三十年の間に凋零して共に盡き、唯予衰病にして今に至るまで獨り存す。因つて悲懷を詠じ、題して舊を感ずと爲す。

【字解】【一】李侍郎　侍郎は官名。名は建、字は杓直。【二】元相公　元稹、字は微之。宰相に任ぜられし故相公といふ。【三】崔侍郎　崔玄亮、字は晦叔。【四】劉尚書　尚書は官名。名は禹錫、字は夢得。【五】執友　同志の友。【六】凋零　死亡なり。

晦叔墳荒草已陳。晦叔は墳荒れて草已に陳り、夢得墓溼土猶新。夢得は墓溼ひて土猶新なり。微之捐館將一紀。微之は館を捐てて將に一紀ならんとし、杓直歸丘二十春。杓直は丘に歸りて二十春。城中雖有故第宅。城中に故第宅ありと雖も、庭蕪園廢生荆榛。庭蕪れ園廢して荆榛を生ず。篋中亦有舊書札。篋中亦舊書札あり、紙穿字蠹成灰塵。紙穿ち字蠹して灰塵と成る。平生定交取人窄。平生交を定め人を取ること窄く、屈指相知唯五人。指を屈するに相知唯五人のみ。四人先去我在後。四人先づ去りて我後に在り、一枝蒲柳衰殘身。一枝の蒲柳衰殘の身。豈無晚歲新相識。豈晚歲の新相識なからんや、相識面親心不親。相識は面親しくして心親まず。人生莫羨苦長命。人生羨む莫れ苦だ長命なるを、

【字解】【一】捐館　死すること。一紀は十二年をいふ。【二】歸丘　死ぬこと。【三】篋中　本箱の中。書札は手紙。【四】蒲柳　かはやなぎ。病弱の身に喩ふ。【五】新相識　新しいしりあひ。

命長感舊多悲辛。命長ければ舊を感じて悲辛多し。

【題義】舊を感じ友の死を悲んだ詩である。

【詩意】晦叔の墳は荒れて草が茫茫と生え、夢得の墓は新しくてまだ土が乾かず、微之は死後將に十二年に達せんとし、朽直は死後二十年になる。で、長安には今以て其邸宅があるが庭園も荒廢して荆が生えて居り、我が篋中には彼等の手紙があるが紙は破れ字は蟲が食つて灰塵となつてゐる。予は平生交際が狹くて相知と謂つては唯五人のみだ。其中で四人は既に死んで自分一人あとに殘り、譬へば衰殘の一枝の蒲柳のやうなものだ。晩年に得た識合の人が無いわけでもないが、相識の人は顏を見識つてゐるだけで心の親みはない。して見れば長命といふものはあまり結構なものではない。徒に昔を想うて悲を增すばかりだから。

送毛仙翁　江州司馬時作。

仙翁已得道。混迹尋巖泉。
肌膚氷雪瑩。衣服雲霞鮮。
紺髮絲竝緻。齠容花共妍。
方瞳點玄漆。高步凌非煙。

毛仙翁を送る　江州司馬の時の作。

仙翁已に道を得、迹を混じて巖泉を尋ぬ。
肌膚氷雪のごとく瑩き、衣服雲霞のごとく鮮なり。
紺髮絲と竝び緻に、齠容花と共に妍なり。
方瞳玄漆を點じ、高步非煙を凌ぐ。

幾見桑變海。莫知龜鶴年。
所憩九清外。所遊五岳巔。
軒昊舊爲侶。松喬難比肩。
每嗟人世人。役役如狂顚。
孰能脫羈鞅。盡遭名利牽。
貌隨歲律換。神逐光陰遷。
惟余負憂譴。顦顇溢江壖。
衰鬢忽霜白。愁腸如火煎。
羈旅坐多感。徘徊私自憐。
晴眺五老峰。玉洞多神仙。
何當憫湮厄。授道安虛孱。
我師惠然來。論道窮重玄。
浩蕩八溟闊。志泰心超然。
形骸既無束。得喪亦都捐。

幾たびか桑の海に變ずるを見、龜鶴の年を知る莫し。
憩ふ所は九清の外、遊ぶ所は五岳の巔。
軒昊舊侶たり、松喬も肩を比し難し。
每に嗟く人世の人、役役として狂顚の如くなるを。
孰か能く羈鞅を脫せん、盡く名利に牽かる。
貌は歲律に隨つて換り、神は光陰を逐うて遷る。
惟余憂譴を負ひ、溢江の壖に顦顇す。
衰鬢忽ち霜白、愁腸火の煎るが如し。
羈旅して坐に多感、徘徊して私に自ら憐む。
晴れて眺む五老峰、玉洞神仙多し。
何か當に湮厄を憫み、道を授けて虛孱を安んずべき。
我が師惠然として來り、道を論じて重玄を窮む。
浩蕩八溟闊く、志泰にして心超然たり。
形骸既に束ねらるるなく、得喪亦都て捐つ。

豈識椿菌異。那知鵬鷃懸。
丹華既相付。促景定當延。
玄功曷可報。感極惟勤拳。
霓旌不肯駐。又歸武夷川。
語罷倏然別。孤鶴升遙天。
賦詩敘明德。永續步虛篇。

豈椿菌の異なるを識らんや、那ぞ鵬鷃の懸するを知らん。
丹華既に相付し、促景定めて當に延くべし。
玄功曷ぞ報ゆべけん、感極まりて惟勤拳す。
霓旌肯て駐めず、又武夷の川に歸る。
語罷めて倏然として別れ、孤鶴遙天に升る。
詩を賦して明德を敘し、永く步虛の篇に續ぐ。

【字解】【一】混レ迹　身を隱す。【二】紺髮　釋迦の髮。【三】齠容　七八歳の幼兒の齒のぬけかはること。幼兒の如き容貌。【四】方瞳　目に異相あり、長命の徵あるをいふ。玄漆は黑きうるし。【五】非煙　雲なり。史記に、若レ煙非レ煙、若レ雲非レ雲、郁郁紛紛、蕭索綸囷、是謂二卿雲一とある。【六】桑變レ海　唐の劉廷芝の代悲二白頭一翁一の詩に已見松柏摧爲レ薪　更聞桑田變成レ海とある。【七】龜鶴年　長壽なるをいふ。郭璞の詩に借問蜉蝣輩、寧知龜鶴年とある。【八】九清　崔融の賀二明堂成一表に、霑二九清之下列一、接二五尙之隆班一とある。【九】五岳　嵩山、泰山、華山、衡山、恆山をいふ。【一〇】軒昊　上古の天子。黃帝軒轅氏と太昊伏羲氏。【一一】松喬　仙人赤松子及び王子喬。【一二】役役　名利に汲汲たること。【一三】歲律　歲月の移ること。【一四】顦顇　瘦せ衰へる。溢江は江州に在る川の名。【一五】五老峰　廬山の峰の名。【一六】虛孱　病弱の身。【一七】我師　毛仙翁をいふ。惠然は詩經の終風篇に、惠然肯來とある。【一八】浩蕩　廣大なる貌。【一九】得喪　得失なり。【二〇】椿菌　莊子逍遙游篇に、朝菌不レ知二晦朔一、また上古有二大椿者一、以二八千歲一爲レ春、八千歲爲レ秋とある。【二一】鵬鷃　鵬は大鳥の名。斥鷃は小鳥の名。莊子逍遙游篇に、有レ鳥焉、其名爲レ鵬。摶二扶搖一而上者九萬里、且レ適二南冥一也、斥鷃笑レ之曰、彼且二奚適一也云云とある。【二二】丹華　梁の昭明太子の啓に、挾二八威之策一則神物莫レ干、服二九丹之華一則仙徒可レ役とある。【二三】促景　短き生命。【二四】勤拳　服事すること。【二五】霓旌　霓を畫いた仙人の旗。【二六】武夷　山の名。福建省崇安縣の南三十里に在り、昔神人武夷君ここに居る。【二七】倏然　たちまち。【二八】步虛篇　樂府に步虛詞あり、衆仙縹緲輕擧の美を言ふ。

【題義】毛仙翁を送つた送別の詩である。仙翁、名は于姬。人の爵祿の厚薄、壽命の長短を豫言して的中したので當時の名賢の尊信を得た。

【詩意】仙翁は已に道術を悟り得て山林に隱遁し、肌膚は氷雪の如く瑩き（莊子逍遙游篇に藐姑射ノ山ニ神人アリテ居ル、肌膚氷雪ノ如ク、淖約トシテ處子ノ如シとある）衣服は雲霞の如く鮮で、髮は絲のやうに密生し、童顏は花の如く美しく、瞳は漆を點じたやうに黑く、步むことは雲よりも輕い。餘程の年數を經て居るであらうが誰も其齡を知る者はなく、常に天上や五岳の巔に遊息して黃帝や伏羲を侶とし、王子喬や赤松子などは肩を竝べることも出來ない。毎に世人の名利の爲に狂奔し、貌はそれが爲に老い精神はそれが爲に衰へるのを嗟いてゐる。余は天子樣の御譴を蒙り江州司馬に貶せられ、衰鬢は霜のやうに白く、愁心は火に燒かれるやうで、獨り自ら身の不遇を憐み、遙に廬山の五老峰を眺めては其玉洞の中に居る神仙の我が災厄を憫み、道術を授けて病弱の身を安んじてくれることを窃に祈つてゐたが、圖らずも我が師仙翁が降臨せられて、深遠なる道理を說いてくれたので、心が始めて廣廣として、身は束縛から解放せられ、心は利害得失を忘れ、大小壽夭の差別を超越することが出來た。かくの如く既に丹華を授けてくれたのであるから、短き命をも延べることが出來るであらう。未だ仙翁の功に報ゆる術を知らず、ただ感嘆して尊奉するのみである。所が仙翁は永く俗界に

駐まらず、又武夷の川に歸ることになり、別れの挨拶の畢るや否や、仙翁の乘つた鶴は遙に天外に飛翔し去つた。因つて仙翁の明德を敍して永く步虛詞の後を續ぐ次第である。

達哉樂天行

達哉樂天行

(一)達哉達哉白樂天。
分司東都十三年。
(二)七旬纔滿冠已挂。
(三)半祿未及車先懸。
或伴遊客春行樂。
或隨山僧夜坐禪。
二年忘却問家事。
門庭多草厨少煙。
庖童朝告鹽米盡。
侍婢暮訴衣裳穿。

達哉樂天行

達なる哉達なる哉白樂天、
東都に分司たること十三年。
七旬纔に滿ちて冠已に挂け、
半祿未だ及ばずして車先づ懸く。
或は遊客に伴ひて春行樂し、
或は山僧に隨つて夜坐禪す。
二年忘却す家事を問ふを、
門庭草多く厨に煙少し。
庖童朝に鹽米の盡きたるを告げ、
侍婢暮に衣裳の穿てるを訴ふ。

【字解】【一】達哉　事理に通達して名利に役せられないこと。
【二】七旬　七十歳。冠已挂は官を辭して退くこと。
【三】半祿　唐書陸亘傳に、溫州瀕レ海經二賊亂一奪二官吏半祿一代二民租一云云とある。車先懸は先づ職を辭すること。

(四)妻孥不レ悅甥姪悶。
而我醉臥方陶然。
起來與レ爾畫二生計一。
薄產處置有二後先一。
先賣二南坊十畝園一。
次賣二東郭五頃田一。
然後兼賣二所レ居宅一。
(七)髣髴獲レ緡二三千一。
半與レ爾充二衣食費一。
半與レ吾供二酒肉錢一。
吾今已年七十一。
眼昏鬢白頭風眩。
但恐此錢用不レ盡。
卽先二朝露一歸二夜泉一。

妻孥は悅ばず甥姪は悶ふ、
而るに我醉臥して方に陶然たり。
起き來りて爾と生計を畫す、
薄產處置後先あり。
先づ南坊十畝の園を賣り、
次に東郭五頃の田を賣り、
然る後兼ねて居る所の宅を賣らば、
緡を獲ること二三千に髣髴たらん。
半は爾に與へて衣食の費に充て、
半は吾に與へて酒肉の錢に供せん。
吾今已に年七十一、
眼昏く鬢白く頭風眩す。
但恐る此錢用ひ盡さざるに、
卽ち朝露に先だちて夜泉に歸らんことを。

【四】妻孥　妻子。
【五】南坊　南方の町。
【六】五頃　田百畝を一頃となす。
【七】髣髴　相似ること。緡は錢を貫く索、さし。ここは錢の意に用ふ。
【八】風眩　目のまはること。
【九】歸二夜泉一　死ぬこと。

未レ歸且住亦不レ惡。　未だ歸らずして且く住するも亦惡からず、
飢餐樂飲安穩眠。　飢ゑて餐ひ樂んで飲み安穩に眠る。
死生無レ可無二不可一。　死生は可もなく不可もなし、
達哉達哉白樂天。　達なる哉達なる哉白樂天。

【題義】樂天が己を第三者と見做して其高踏的性情を述べた詩である。

【詩意】樂天は實に放達の士である。東都分司の職に在ること十三年であつたが、七十になるや否や未だ善政を爲すに及ばずして辭職し、或は遊人に伴つて行樂し、或は山僧に伍して坐禪し、二年が間家事を抛擲して顧みなかつたので、門庭は荒れ庖厨は不足がちで、朝には庖童が米や鹽の盡きたことを告げ、暮には侍婢が衣裳の破れたことを訴へ、妻子眷屬も不平だらだらであつたが、我は陶然として醉臥してゐた。やがて起きあがつて汝と貧乏世帶の繰廻しを計畫した。先づ南坊の十畝の園を賣り、次に東郭の五頃の田を賣り、然る後住宅を賣れば大略二三千の金が懷にはひる豫定である。その半額を汝に與へて衣食の費となし、あとの半額を吾に與へて酒肉の料としよう。吾も今は年七十一で眼も昏く鬚も白く頭腦も狂つてゐるから、或は此錢を使ひ盡さぬ中に死ぬかも知れないが、死なずに暫く生きてゐるのも惡くはない。飢ゑては食ひ樂しく飲み安らかに眠り、生きるのもよく死ぬのも惡くない。實に樂天は放達の士ぢや。

能無レ媿

十兩新綿褐。　能く媿づる無からんや
披行暖似レ春。　十兩新綿の褐、
一團香絮枕。　披行暖にして春に似たり。
倚坐穩二於人一。　一團香絮の枕、
婢僕遣他嘗二藥酒一。　倚坐人よりも穩なり。
兒孫與レ我拂二衣巾一。　媿僕は他をして藥酒を嘗めしめ、
廻二看左右一能無レ媿。　兒孫は我が與に衣巾を拂ふ。
養活枯殘廢退身。　左右を廻看して能く媿づる無からんや、
養活す枯殘廢退の身。

【字解】【一】十兩　目方の名。
【二】披行　著て行。
【三】香絮　香を焚きこめた綿。
【四】他　彼れ樂天を指していふ。
【五】枯殘　殘は損傷なり。ひからびてゐること。廢退は官を退くこと。

【題義】老衰した無用の身を大事にして養つてゐるのは、自ら省みて罰が當りはせぬかと思はれ、恐縮に堪へないといふ意を述べた詩である。

【詩意】新綿をぷくぷくと入れた褐衣を著てあるくと春のやうに暖く、香を焚きこめた綿で作つた括枕に倚つて坐つてゐると、人枕をしてゐるよりも一層安穩である。婢僕は世話を燒いて藥や酒を飲ませたり、兒孫は衣巾の塵を拂つたりする。かかる無用の廢殘者をよつてたかつて世話してゐる左

右の人を見廻して、獨り自ら恐縮する。

白樂天詩後集　巻五

律詩　凡八十四首。

小歳日對酒唫錢湖州所寄詩

小歳の日酒に對し錢湖州が寄せし所の詩を唫ず

獨酌無多興。閒吟有所思。　獨り酌みて多興無し、閒吟して所思有り。
一杯新歳酒。兩句故人詩。　一杯新歳の酒、兩句故人の詩。
楊柳初黄日。髭鬚半白時。　楊柳初めて黄なる日、髭鬚半ば白き時。
蹉跎春氣味。彼此老心知。　蹉跎たり春の氣味、彼此老心知る。

【字解】【一】故人　舊友。錢湖州を指す。【二】蹉跎　蹉く貌。【三】彼此　君と僕と。

【題義】小歳（臘の明日をいふ）の日に酒に對して湖州刺史錢氏から寄せられた詩を吟じて此詩を作つたのである。

【詩意】一杯新歳の酒も獨りで飲んでは一向興が湧かないが、ただ君の兩句の詩を閑吟すれば無量の感慨が起る。柳が黄色の新芽を生ずる此好氣節に、お互は半白の胡麻鹽鬚を垂れて、尾羽打枯らして

ゐる氣持は、ただ君と僕と相知るのみである。

錢塘湖春行

孤山寺北賈亭西。　孤山寺の北賈亭の西、
水面初平雲脚低。　水面初めて平かにして雲脚低る。
幾處早鶯爭暖樹。　幾處の早鶯か暖樹を爭ひ、
誰家新燕啄春泥。　誰が家の新燕か春泥を啄む。
亂花漸欲迷人眼。　亂花漸く人眼を迷はさんと欲し、
淺草纔能沒馬蹄。　淺草纔に能く馬蹄を沒す。
最愛湖東行不足。　最も湖東を愛し行けども足らず、
綠楊陰裡白沙堤。　綠楊陰裡白沙堤。

【題義】錢塘湖（杭州に在る湖の名。西湖ともいふ）の邊を春行遊したことを敍した詩である。

【詩意】湖山寺の北、賈亭の西のあたりは、水平かに雲垂れ、早鶯があちこちに樹を爭つて啼き、新燕が泥を啄んでゐる。花は漸く咲き亂れて人の眼を迷はし、道端の草も馬の蹄を沒するほどになつた。

【字解】【一】孤山寺　錢塘湖の岸に在る寺の名。賈亭は亭の名。

吾は錢塘湖東の景色が好きで、綠楊の蔭、白沙の堤はいくら行遊しても飽きない。

題靈隱寺紅辛夷花。戲酬光上人

紫粉筆含尖火焰。　紫粉筆は尖き火焰を含み、
紅臙脂染小蓮花。　紅臙脂は小蓮花を染む。
芳情香思知多少。　芳情香思知んぬ多少ぞ、
惱得山僧悔出家。　山僧を惱まし得て出家を悔いしむ。

【題義】靈隱寺（杭州に在る寺の名）の紅の辛夷の花に題し、戲に光上人（僧の名）に酬いた詩である。

【詩意】紫粉筆は其尖端に火の如き紅を含み、小蓮花の如き辛夷の花を描き成した。この艷なる花には無限の芳情香思があつて山僧を惱殺し、出家したことを悔いしめるであらう。

【字解】【一】紫粉筆　兎毛を以て製ぜし筆。その鋒尖利にして小楷を書するに宜し。【二】紅臙脂　紅色の繪の具。【三】知多少　定めて多いであらうといふ意。【四】山僧　光上人を指す。

重向火

重ねて火に向ふ

火銷灰復死。疎棄已經旬。　火銷えて灰復死す、疎棄せられて已に旬を經たり。

豈是人情薄。其如天氣春。
風寒忽再起。手冷重相親。
却就紅爐坐。心如逢故人。

豈是れ人情の薄きならんや、天氣の春なるを其如せん。
風寒忽ち再び起り、手冷にして重ねて相親む。
却りて紅爐に就きて坐すれば、心は故人に逢ふが如し。

【字解】【一】故人　舊友。

【題義】一旦棄てた爐を更に圍んで暖を取つたことを述べた詩である。

【詩意】火も消え灰も冷えて既に十日ばかり爐が棄てられてゐる。人情が薄いわけではないが、春になつて暖氣が增した爲である。所が寒氣が逆轉したので、又爐に親しんで手をかざした。その氣持は舊友にでも逢つたやうである。

候仙亭同諸客醉作

候仙亭にて諸客と同じく醉うて作る

謝安山下空携妓。
柳惲洲邊只賦詩。
爭及湖亭今日會。
嘲花詠水贈蛾眉。

謝安は山下に空しく妓を携へ、
柳惲は洲邊に只詩を賦す。
爭でか湖亭今日の會に及かん、
花を嘲り水を詠じて蛾眉に贈る。

【字解】【一】謝安　晉の陽夏の人、少うして重名あり。徵辟せらるれども皆就かず。東山に隱居し妓を以て相從ふ。年四十餘にして始めて出でて桓溫の司馬となる。【二】柳惲　梁の人、字は文暢、詩に巧なり。【三】湖亭　候仙亭をいふ。錢塘湖邊に在る故なり。【四】蛾眉　美妓をいふ。

【題義】候仙亭で諸客と酣醉して作つた詩である。

【詩意】謝安は東山の下にただ妓を携へて遊んだのみで、柳惲は湖洲の邊にただ詩を賦して樂んだのみである。されば今日の湖亭の會の、花を嘲り水を詠じ美妓に贈りなどする樂には、到底比ぶべくもなかつたのである。

城上

城上鼕鼕鼓。朝衙復晚衙。
爲君慵不出。落盡遶城花。

城上鼕鼕たる鼓、朝衙復晚衙。
君の慵くして出でざるが爲に、落盡す城を遶る花。

【字解】【一】鼕鼕　太鼓の音。【二】朝衙　朝の官署の禮式。早衙ともいふ。晚衙は夕の禮式。【三】君　樂天自ら謂ふ。

【題義】職務に鞅掌して空しく春を過したことを惜んだ詩である。

【詩意】城上にドンドンと太鼓の音がする。あの音を合圖に朝晚役所に勢揃して、出遊する暇もなく暮してゐる中に、憎やあの音が城中の花を落し盡してしまつた。

早行林下

早に林下を行く

披衣未冠櫛。晨起入前林。
宿露殘花氣。朝光新葉陰。
傍松人迹少。隔竹鳥聲深。
閒倚小橋立。傾頭時一唫。

衣を披て未だ冠櫛せず、晨に起きて前林に入る。
宿露殘花の氣あり、朝光新葉の陰あり。
松に傍うて人迹少に、竹を隔てて鳥聲深し。
閒に小橋に倚りて立ち、頭を傾けて時に一たび唫ず。

【字解】【一】宿露　夜露。

【題義】朝早く林下を逍遙した時の詩である。

【詩意】まだ髮も櫛らず冠も被らずに著物を引つかけ、朝早く起きて林の中に遊んだ。夜露の置いた花の香が尙殘り、旭を受けた新葉の陰が美しい。松の小路には人の足迹もなく、竹藪の奥から鳥の聲が泄れる。ふと小橋の上に立つて小頸を傾けて微吟した。

送李校書趁寒食歸義興山居

李校書が寒食を趁うて義興の山居に歸るを送る

大見騰騰詩酒客。
不憂生計似君稀。
到舍將何作寒食。

大に騰騰たる詩酒の客を見るに、
生計を憂へざること君に似たるは稀なり。
舍に到りて何を將て寒食を作さん、

【字解】【一】騰騰　遊惰に耽る意。
【三】生計　活計なり。

滿船唯載樹陰歸。

滿船唯樹陰を載せて歸る。

【題義】李校書（校書は官名）が寒食（冬至を去る百五日目をいふ）にさしかかつて義興（今の江蘇省宜興縣）の山居に歸るのを送る詩である。

【詩意】騰騰として遊惰に耽る詩酒の客も隨分多く見たが、君のやうに生計に頓著しない者は稀である。今や山居に歸つて何を以て寒食を祝ふ積りであらうか、船中には無一物で、唯美しい樹陰がさしてゐるばかりである。

題孤山寺山石榴花示諸僧衆

孤山寺の山石榴花に題し諸僧衆に示す

山榴花似結紅巾。
容艷新妍占斷春。
色相故開行道地。
香塵擬觸坐禪人。
瞿曇弟子君知否。
恐是天魔女化身。

山榴の花は紅巾を結ぶに似たり、
容艷新妍春を占斷す。
色相は故らに行道の地に開き、
香塵は坐禪の人に觸れんと擬す。
瞿曇の弟子君知るや否や、
恐らくは是れ天魔女の化身ならん。

【字解】【一】占斷　占領する。斷は助辭。【二】色相　佛語。一切の外物凡そ形式あるもの皆之を色相といふ。ここは山石榴花をいふ。行道は佛道を修行すること。【三】香塵　花の香。【四】瞿曇弟子　佛弟子。君は僧を指していふ。【五】化身　幻身なり。

【題義】孤山寺（杭州の錢塘湖上に在る寺の名）の山石榴の花に題して寺僧共に示した詩である。

【詩意】山石榴の花が紅の巾を結んだやうに、美しく春を我が物顔に占領してゐる。それが故らに佛道修行の地に咲き亂れ、花氣が坐禪する人を襲はんとする位である。佛弟子たる君等は知るや知らずや、此花こそは天魔女の化身ではあるまいか。

獨行

闇誦黃庭經[一]在口。　闇に黃庭經を誦して口に在り、
閒攜青竹杖隨身。　閒に青竹杖を攜へて身に隨ふ。
晚花新筍堪爲伴。　晚花新筍伴と爲すに堪へたり、
獨入林行不要人。　獨り林に入り行きて人を要せず。

【題義】獨り閑歩する樂を述べた詩である。

【詩意】黃庭經を暗誦しながら青竹杖をついて閑歩すれば、遲咲の花や新しい筍などの道連となすに足るものがあるから、人と連れ立つて歩く必要は少しもない。

【字解】【一】黃庭經　道家の書名。

二月五日花下作

二月五日花如雪。　二月五日花雪の如く、
五十二人頭似霜。　五十二の人頭霜に似たり。
聞有酒時須笑樂。　酒有るを聞く時須らく笑樂すべし、
不關身事莫思量[一]。　身に關せざる事は思量すること莫れ。
羲和趂日沈西海。　羲和日を趂うて西海に沈み、
鬼伯驅人葬北邙[四]。　鬼伯人を驅りて北邙に葬る。
只有且來花下醉。　只且らく來りて花下に醉ふ有り、
從人笑道老顚狂。　人の笑うて老いて顚狂すと道ふに從かす。

【題義】長慶三年二月五日杭州刺史たりし時、花の下で作つた詩である。

【詩意】今日しも二月五日となり花は亂れ咲いて雪の如く、吾は既に五十二歲の老翁となり、頭髮が霜の如くである。吾は世事を拋擲し去り、唯酒があると聞けば樂んで笑ひ、身に關はらぬ事は一切心に留めない。古來歲月は過ぎ易く人命は果敢ないものであるから、只暫しの暇を偸んで花下に醉ふのであつて、人が老いぼれて氣がふれたと評するであらうが、何とでも勝手に評するがよい。

【字解】【一】五十二　樂天時に年五十二。
【二】思量　考慮する。
【三】羲和　日輪の御者。
【四】鬼伯　鬼のかしら。北邙は洛陽の北に在る墓地。

戲題木蘭花

戲れに木蘭の花に題す

紫房日照臙脂拆。　紫房日照らして臙脂拆き、
素艶風吹膩粉開。　素艶風吹いて膩粉開く。
怪得獨饒脂粉態。　怪み得たり獨り脂粉の態饒きを、
木蘭曾作女郎來。　木蘭曾て女郎と作り來れり。

【題義】戲れに木蘭の花に題した詩である。

【詩意】紫の花房を日が照らすと拆いて臙脂をつけた美人のやうになり、白く艶艶した花を風がなぶつてゐる所は膩粉をつけた美人のやうである。なぜかう脂粉の態が多いのかと怪んだが、それもその筈であつた、木蘭はもと女郎であつたのだもの。

【字解】【一】木蘭　木の名。木蓮ともいふ。【二】紫房　紫色の花房　臙脂は顔料。べに。【三】膩粉　おしろい。【四】脂粉　臙脂及び膩粉。【五】女郎　女子にして男子の才ある者。木蘭辭に不レ知木蘭是女郎とある。木蘭辭は無名氏の作で、木蘭といふ女子が父に代つて邊を戍ること十二年、誰も其の女子たることを知らなかつたといふことを敍した長詩である。

清明日觀妓舞聽客詩

清明の日妓の舞を觀、客の詩を聽く

看レ舞顏如レ玉。聽詩韻似レ金。　舞を看れば顏玉の如く、詩を聽けば韻金に似たり。
綺羅從許笑。絃管不レ妨レ吟。　綺羅は許笑するに從かせ、絃管は吟を妨げず。
可レ惜春風老。無レ嫌酒盞深。　春風の老ゆるを惜む可し、酒盞の深きを嫌ふ無かれ。

辭レ花送寒食。併在此時心。　花を辭して寒食を送る、併せて此時の心に在り。

【字解】【一】清明　三月の氣節の名。寒食の後に當る。【二】綺羅　うすぎぬの著物。【三】酒盞　さかづき。

【題義】清明の日に妓の舞を視、客の詩を聽いて作つた詩である。

【詩意】舞妓の顏は玉の如く美しく、客の詩は金の如き響がある。舞衣は人の嘆賞するに任せ、管絃は詩を吟ずるを妨げず。吟ずるやら舞ふやら負けず劣らずにやつてゐる。春は過ぎ易いのであるからいくらでも飲むがよい。花を送り寒食を送つた遣瀨なき心を霽らす爲に。

西湖晚歸回望孤山寺贈諸客

西湖より晚に歸り孤山寺を回望して諸客に贈る

柳湖松島蓮花寺。　柳湖松島の蓮花寺、
晚動歸橈出道場。　晚に歸橈を動かして道場を出づ。
盧橘子低山雨重。　盧橘子低れて山雨重く、
棕櫚葉戰水風涼。　棕櫚葉戰ぎて水風涼し。
煙波澹蕩搖空碧。　煙波澹蕩空碧を搖かし、
樓殿參差倚夕陽。　樓殿參差夕陽に倚る。

【字解】【一】歸橈　かへりの舟のかぢ。道場は寺。上句の蓮花寺を指す。【二】盧橘　枇杷なり。【三】澹蕩　あはき貌。【四】參差　高低一ならざる貌。

到岸請君回首望。岸に到りて請ふ君首を回らして望め、
蓬萊宮在海中央。蓬萊宮は海の中央に在り。

【題義】西湖（杭州に在り。錢塘湖ともいふ）から夕方歸つて孤山寺（西湖の邊に在る寺）を顧望し諸客に贈つた詩である。

【詩意】柳湖松島の蓮花寺から夕方舟に乘つて歸らうとすれば、枇杷の枝もたわわになつてゐる所に山雨が降りそそぎ、棕櫚の葉がさらさらと搖いて川風が涼しい。遙に湖上を眺めると煙波が遠く連つて、樓閣が或は高く或は低く夕陽の間に聳えてゐる。岸に著いたら首を回らして觀られよ。恰も蓬萊宮の東海の中に聳えるやうに、孤山寺が屹然と湖中に聳えてゐるであらう。

【五】蓬萊宮　東海中に在る蓬萊山の仙宮。

湖中自照　湖中自ら照す

重重照影看容鬢。重重たる照影に容鬢を看れば、
不見朱顏見白絲。朱顏を見ずして白絲を見る。
失却少年無覓處。少年を失却して覓むる處無し、
泥他湖水欲何爲。湖水に泥他して何をか爲さんと欲する。

【題義】西湖の水に己の影を寫し水鏡を見て作つた詩である。

【字解】【一】照影　みづかがみ。容鬢は容貌なり。【二】朱顏　紅顏なり。若若しき顏色。白絲は白髮。【三】失却　失ふこと。【四】泥他　他は助辭。泥は柔言索レ物曰レ泥とあつて、物やはらかにねだること。

贈蘇鍊師　蘇鍊師に贈る

兩鬢蒼然心浩然。兩鬢蒼然として心浩然、
松窓深處藥爐前。松窓深き處藥爐の前。
攜將道士通宵語。道士を攜へ將ちて通宵語り、
忘却花時盡日眠。花時を忘却して盡日眠る。
明鏡懶開長在匣。明鏡開くに懶くして長く匣に在り、
素琴欲弄半無絃。素琴弄せんと欲して半は絃無し。
猶嫌莊子多詞句。猶嫌ふ莊子の詞句多きを、
只讀逍遙六七篇。只讀む逍遙六七篇。

【題義】蘇鍊師（蘇は姓。鍊師とは道士の德高く思精なる者の稱）に贈つた詩である。

【詩意】ちらちらと寫る水鏡によつて吾が容貌を見るに、若若しさは見えなくて、ただ白髮のみが目に立つて見える。少年の俤は全く失はれて何處にも見出されず、湖水にねだつて若若しさを要求しても今更如何ともすることは出來ない。

【字解】【一】蒼然　髮斑白の貌。浩然は廣大の貌。

【二】盡日　終日。

【三】素琴　しらきの琴。

【四】逍遙　莊子の逍遙游篇。

【詩意】僕も兩鬢は白くなつたが心は浩然として物に屈託せず、松窓の奥深い處の藥爐の前に閑坐して、道士（蘇鍊師を指す）を相手に夜もすがら語り合ひ、花の時節をも忘れて終日眠つてゐる。鏡は開くのが厄介なので常に匣の中に棄て置き、素琴を彈ぜんとすれば絃は半切れてゐる。猶且つ莊子の文句の多いのを嫌ひ、只逍遙游以下の六七篇を讀むのみである。

杭州春望

杭州の春望

望海樓明照曙霞。

城東樓名望海樓。

望海樓明かにして曙霞照し、

護江隄白踢晴沙。

護江隄白くして晴沙を踢む。

濤聲夜入伍員廟。

濤聲は夜伍員の廟に入り、

柳色春藏蘇小家。

柳色は春蘇小が家を藏す。

紅袖織綾誇柿蔕。

杭州出柿蔕花者元住也。

紅袖は綾を織りて柿蔕を誇り、

青旗沽酒趁梨花。

青旗酒を沽りて梨花を趁ふ。

【字解】【一】曙霞　あさやけ。

【二】伍員　字は子胥。讒に由りて吳王夫差に誅せられ、屍を江中に投ぜらる。

【三】蘇小　錢塘の名娼蘇小小。南齊の時の人だらうと謂はれてゐる。

其俗釀レ酒、趁二梨花時一熟。號爲二梨花春一。

誰開湖寺西南路。

誰か湖寺西南の路を開く、

草綠裙腰一道斜。

草綠にして裙腰一道斜なり。

孤山寺在二湖洲中一。草綠時望如二裙腰一。

【題義】杭州の春の眺を詠じた詩である。

【詩意】望海樓の附近に朝燒雲の照り輝く時、護江隄の白沙の上を散歩すれば、伍員の廟の方はまだほの暗くて濤聲が高く、蘇小小の舊宅の前には柳が青青と茂つてゐる。あちこちに綾錦を織る紅袖の少女も見え、梨の花の咲く時節をめがけて賣出す酒屋の青旗も見える。誰が孤山寺に行く西南の道を開いたのであるか、裙腰のやうに見える綠草の間に一條の道が斜に通じてゐる。

【四】裙腰　裳なり。一説に一筋。

飲散夜歸贈諸客

飲散じ夜歸り諸客に贈る

鞍馬夜紛紛。香街起二暗塵一。

鞍馬夜紛紛、香街暗塵を起す。

回レ鞭招二飲妓一。分レ火送二歸人一。

鞭を回らして飲妓を招き、火を分ちて歸人を送る。

風月應レ堪レ惜。杯觴莫レ厭頻。

風月應に惜むに堪へたるべし、杯觴頻なるを厭ふ莫れ。

明朝三月盡。忍レ不レ送二殘春一。

明朝三月盡きん、殘春を送らざるに忍びんや。

【字解】【一】紛紛　多き貌。【二】香街　にぎやかな市街。

【題義】宴會が散じて夜歸る時諸客に贈つた詩である。

【詩意】宴が散じてから、鞍馬に跨り暗塵を飛ばして東西に歸る。鞭を回らして妓を招く者もあれば、火を分ちて歸人を送る者もある。風月は惜むべきであるから宴會の度重なるをも厭ふべきではない。明朝は三月の晦日であるから、また春を送る宴會を開かねばなるまい。

湖亭晚歸

盡日湖亭臥。心閒事亦稀。
起因殘醉醒。坐待晚涼歸。
松雨飄藤帽。江風透葛衣。
柳堤行不厭。沙軟絮霏霏。

【字解】【一】盡日　終日。【二】藤帽　藤で作つた帽子。【三】絮　柳絮。柳の花。霏霏は飛散する貌。

【題義】湖亭から夕方自邸に歸る時の詩である。

【詩意】終日湖亭に臥してゐると心も靜で是れといふ仕事もない。醉が醒めれば起き晚涼を待つて歸る。松林に降りそそぐ雨が帽を飄し、湖上を吹く風が涼しく葛衣に透る。沙が軟で柳絮の雪の如く飛

ぶ堤上を行くのは實に心地よき限で飽く所を知らない。

東樓南望八韻

不厭東南望。江樓對海門。
風濤生有信。天水合無痕。
鷁帶雲帆動。鷗和雪浪翻。
魚鹽聚爲市。煙火起成村。
日脚金波碎。峯頭鈿點繁。
送秋千里鴈。報暝一聲猿。
已豁煩襟悶。仍開病眼昏。
郡中登眺處。無勝此東軒。

【字解】【一】江樓　卽ち東樓なり。海門は錢塘江の兩岸に龕頡二山あり、南北對峙すること門の如し、故にいふ。【二】風濤　浙江、卽ち杭州は古來潮汐を以て名高し。潮汐が龕頡二山の東ゐる所となり勢極めて湍悍、其の來ること萬馬の崩騰するが如し。毎日正しく時刻を誤らずして起る故に有信といふ。【三】鷁　鳥の名。船頭に鷁首をつけてある船。【四】日脚　日あしのさすこと。【五】鈿點　靑貝の點點。【六】報暝　日暮を告げる。【七】郡中　杭州。【八】東軒　東樓。

【題義】東樓の上から南方を望んだ景勝を敍した十六句の詩である。

【詩意】この東樓から東南の海門を望見すれば極めて好い景色である。風濤は時刻を違へずに起り、天と水とが相合して一となり、鷁首の舟は雲帆を揚げて動き、鷗は雪浪と相和して翻り、魚や鹽が聚まつて市をなし、煙火が起る處に村がある。日脚の射す處は金波が碎け、峯の巔は青貝のやうにきらきらする。天上には秋雁の飛ぶのを見、山下には暮猿の啼くのを聞き、既に心の煩悶を一洗するを得、又病眼を快くすることが出來た。杭州では此東樓が第一等の眺めである。

醉中酬殷協律

醉中殷協律に酬ゆ

泗水城邊一分散。
浙江樓上重遊陪。
揮鞭二十年前別。
命駕三千里外來。
醉袖放狂相向舞。
愁眉和笑一時開。

泗水城邊、一たび分散し、
浙江樓上に重ねて遊陪ず。
鞭を揮ひて二十年前に別れ、
駕を命じて三千里外に來る。
醉袖狂を放にして相向ひて舞ひ、
愁眉笑に和して一時に開く。

【字解】【一】泗水　川の名。分散は手を分ちて別れそ。【二】浙江　杭州。遊陪は相伴つて遊ぶ。

留君夜住非無分。
且盡青娥紅燭臺。

君を留めて夜住せしむるは分無きに非ず、
且盡さん青娥の紅燭臺。

【題義】醉つて殷協律（協律は官名）に酬いた詩である。

【詩意】今より二十年前泗水の邊で互に鞭を揮つて別れたが、今復三千里外の浙江の樓上で相伴つて遊ぶことになつた。因つて狂態の限を盡して醉舞し、愁眉を開いて大笑した。君を引留めて夜まで置くのは決して理由のないことではない。美妓を相手に紅燭の下で十分に醉を盡さうではないか。

【三】無分　いはれなきこと。【四】青娥　少女をいふ。

孤山寺遇雨

孤山寺にて雨に遇ふ

拂波雲色重。洒葉雨聲繁。
水鷺雙飛起。風荷一向翻。
空濛連北岸。蕭颯入東軒。
或擬湖中宿。留船在寺門。

波を拂ひて雲色重く、葉に洒ぎて雨聲繁し。
水鷺雙び飛んで起り、風荷一に向ひて翻る。
空濛として北岸に連り、蕭颯として東軒に入る。
或は湖中に宿せんと擬し、船を留めて寺門に在り。

【字解】【一】風荷　風に吹かれる蓮の葉。【二】空濛　濛濛として小暗き貌。【三】蕭颯　風の音。

【題義】孤山寺（西湖の邊に在る寺の名）に遊んで雨に遇うたことを述べた詩である。

【詩意】荒波の上には雲が重げに罩め、木の葉には雨の脚が繁くそそぎ、鷺が水上に相雙んで飛び、蓮の葉が一樣に風に靡いて飄り、濛濛として北岸まで小暗く、風が蕭颯として東の軒端まで吹き込む。今夜は湖上の寺に一宿しようかと思つて寺の門前に船を留めて置いた。

樟亭雙櫻樹

樟亭の雙櫻樹

南館西軒兩樹櫻。　南館西軒兩樹の櫻、
(一)春條長足夏陰成。　春條長じ足りて夏陰成る。
(二)素華朱實今雖盡。　素華朱實今盡きたりと雖も、
碧葉風來別有情。　碧葉風來りて別に情有り。

【題義】樟亭驛（杭州の驛の名。後の醉送李協律赴湖南辟命因寄沈八中丞參照）の二本の櫻桃樹についての詩である。

【詩意】南館西軒の前の二本の櫻桃樹は枝が長く伸びて陰を成してゐる。今は花も實も盡きて無くなつてしまつたけれども、綠の葉の風にそよぐ樣も亦棄て難い風情がある。

【字解】【一】春條　春の枝。【二】素華　白い花。朱實は赤い實。

湖上夜飲

湖上夜飲

郭外迎人月。湖邊醒酒風。　郭外人を迎ふる月、湖邊酒を醒す風。
誰留使君飲。紅燭在舟中。　誰か使君を留めて飲ましむる、紅燭舟中に在り。

【字解】【一】使君　刺史の稱。ここは杭州刺史白樂天自ら謂ふ。

【題義】湖上で夜酒を飲んだことを賦した詩である。

【詩意】郭外には人を迎へ顏に月が輝き、湖邊には酒を醒す風が涼しく吹いてゐる。定めて美妓が刺史殿を引留めて飲ませてゐるのであらう、舟の中には紅燭があかあかとついてゐる。

贈沙鷗

沙鷗に贈る

老逼教垂白。官科遣著緋。　老は逼りて白を垂れしめ、官は科ありて緋を著せしむ。
形骸雖有累。方寸却無機。　形骸は累有りと雖も、方寸は却りて機無し。
遇酒多先醉。逢山愛晚歸。　酒に遇ひて多く先づ醉ひ、山に逢ひて愛して晩に歸る。
沙鷗不知我。猶避隼旟飛。　沙鷗は我を知らず、猶隼旟を避けて飛ぶ。

【字解】【一】白　白髮。【二】科　階級。位階。緋は紅色。刺史は緋衣を著る。【三】方寸　心をいふ。機は機心。巧詐の心。莊子天地篇に、有機事者必有機心とある。列子黃帝篇に、海上之人有好鷗鳥者、每旦之海上從鷗鳥游、鷗鳥之至者、百數

而不レ止。其父曰、吾聞鷗鳥皆從レ汝游。汝取來、吾玩之、明日之二海上一、鷗鳥舞而不レ下也とある。機心なければ鷗鳥狎れ、機心あれば去つて來らず。【四】隼旟　隼は鷹の類の鳥。隼を畫きし旗。

【題義】沙上の鷗に贈つたといふ詩である。

【詩意】身は老境に入つて白髮を垂れ、官階は刺史となつて緋衣を著ることが出來るやうになつた。體には累があるけれども心には何等の巧がない。ただ酒に遇へば先づ自ら飲み、山に逢へば之を愛して晩く歸るのみである。湖上の沙鷗は我の此の如きを知らず、我が建つる隼旟を避けて逃げるのは何事であるか。

餘杭形勝　餘杭の形勝

餘杭形勝四方無。
州傍二青山一縣枕レ湖。
遶レ郭荷花三十里。
拂レ城松樹一千株。
夢兒亭古傳名レ謝。
敎妓樓新道姓レ蘇。

餘杭の形勝四方に無し、
州は青山に傍ひて縣は湖に枕む。
郭を遶る荷花三十里、
城を拂ふ松樹一千株。
夢兒亭古りて傳へて謝と名け、
敎妓樓新にして道ひて蘇を姓とす。

【字解】【一】餘杭　杭州をいふ。
【二】荷花　蓮花。
【三】夢兒亭　亭の名。宋の謝靈運、小名は客兒。

州西靈隱山上、有二夢謝亭一。卽是杜明浦夢二謝靈運一之所。因名二客兒一也。蘇小小、本錢塘妓也。

獨有二使君年太老一。
風光不レ稱白髭鬚。

獨り使君の年太だ老いたる有り、
風光稱はず白髭鬚。

【題義】杭州の形勝を詠じた詩である。

【詩意】杭州のやうな景勝の地は恐らく何處にもあるまい。州は青山に傍ひ縣は西湖に枕み、郭を繞つて蓮花が三十里に亙り、城中には松樹が千本もある。歷史的に見れば謝靈運を夢みたといふ夢兒亭や蘇小小の敎妓樓も今尙存してゐる。ただ刺史殿が老年で、風光が其白髭につりあはないのが玉に疵である。

【四】使君　刺史の稱。ここは杭州刺史たる白樂天自ら謂ふ。

江樓夕望招客　江樓夕望客を招く

海天東望夕茫茫。
山勢川形濶復長。
燈火萬家城四畔。
星河一道水中央。

海天東に望めば夕茫茫たり、
山勢川形濶くして復長し。
燈火萬家城の四畔、
星河一道水中央。

【字解】【一】茫茫　廣廣としてゐる貌。
【二】星河　あまのがは。一道は一筋。

風吹古木晴天雨。風は古木を吹く晴天の雨、
月照平沙夏夜霜。月は平沙を照す夏夜の霜。
能就江樓銷暑否。能く江樓に就きて暑を銷せんや否や、
比君茅舍校清涼。君が茅舍に比すれば校清涼。

【題義】江樓の上から四方を眺望し、客を招いて共に一宵の歡を盡さうとした詩である。

【詩意】夕に東方海上の天を望めば山河の形勢が茫茫として空濶である。城市は四方の端まで燈火を以て滿たされ、一筋の天河が西湖の中央を横ぎり、風は古木を吹いて晴天に何の雨ぞと怪まれ、月は平沙を照して夏の夜の霜かと疑はれる。君も此樓に來て共に暑を銷してはどうか。君の茅屋よりは餘程清涼であらうから。

新秋病起

一葉落梧桐。年光半又空。
秋多上階日。涼足入懷風。
病瘦形如鶴。愁焦鬢似蓬。

新秋病起

一葉梧桐落ち、年光半又空し。
秋は多し階に上る日、涼は足る懷に入る風。
病み瘦せて形鶴の如く、愁へ焦れて鬢蓬に似たり。

損心詩思裏。伐性酒狂中。心を損ず詩思の裏、性を伐る酒狂の中。
華蓋何曾惜。金丹不致功。華蓋何ぞ曾て惜まん、金丹功を致さず。
猶須自慙愧。得作白頭翁。猶須らく自ら慙愧すべし、白頭の翁と作るを得たるを。

【字解】【一】伐性　枚乘の文に皓齒蛾眉、伐性之斧とある。【二】華蓋　美しき車のほろ。高位高官に喩ふ。【三】金丹　道士の服用する長生藥。

【題義】病癒えて新秋に遇うたことを述べた詩である。

【詩意】もう梧桐の葉が落ちるやうになり、今年も空しく半を過ぎた。階段を照す日にも秋の色があり、懷に入る風も何となく涼しい。吾は病後で鶴のやうに瘦せ、鬢は蓬のやうに亂れ、常に詩の爲に心を勞し、酒狂の中に性を傷つてゐる。官位などは敢て惜むに足らないが、金丹も壽命を延ぶる能はざるは遺憾である。併し幸に死を免れて白頭翁となることを得たのは、自ら省みてありがたいと思ふべきである。

木芙蓉花下招客飲

晚涼思飲兩三盃。晚涼飲まんことを思ふ兩三杯、
召得江頭酒客來。召き得て江頭酒客來る。

木芙蓉の花下客を招いて飲む

莫怕秋無伴醉物。　怕るる莫れ秋醉に伴ふ物無きを、
水蓮花盡木蓮開。　水蓮花盡きて木蓮開く。

【題義】木蓮の花の下で客を招いて酒を飲んだことを述べた詩である。

【詩意】晩涼に乘じ一醉しようと思つて客を招いた所が、幸に酒客が江頭に集まつて來た。秋醉眼を慰める物のないのを患ふるには及ばない。水蓮の花は盡きても木蓮の花が開いてゐるから。

悲歌

白頭新洗鏡新磨。　白頭新に洗ひて鏡新に磨く、
老逼身來不奈何。　老は身に逼り來りて奈何ともせず。
耳裏頻聞故人死。　耳裏頻に故人の死を聞き、
眼前唯覺少年多。　眼前唯少年の多きを覺ゆ。
塞鴻遇暖猶回翅。　塞鴻暖に遇へば猶翅を回し、
江水因潮亦反波。　江水潮に因りて亦波を反す。
獨有衰顏留不得。　獨り衰顏の留め得ざる有り、

【字解】【一】故人　舊友。
【二】塞鴻　北邊に歸る雁。

醉來無計但悲歌。　醉ひ來りて計無く但悲歌す。

【題義】身の衰老を嘆じた詩である。

【詩意】白毛頭を洗ひ新に磨いた鏡に照して見れば、日に日に老が增して來て如何ともし難い。耳には頻に舊友の死を聞き、眼前には唯若い人ばかり目につく。雁は暖氣に遇うて又北に歸り、江水は潮に因つて亦海に反るが、吾が衰顏ばかりは留めん術もなく、醉ひ來つて但悲歌するのみである。

江樓晚眺景物鮮奇吟翫成篇。寄水部張籍員外

江樓にて晚に景物の鮮奇なるを眺め、吟翫して篇を成し、水部張籍員外に寄す

澹煙疎雨間斜陽。　澹煙疎雨斜陽に間り、
江色鮮明海氣涼。　江色鮮明にして海氣涼し。
蜃散雲收破樓閣。　蜃散じ雲收りて樓閣を破り、
虹殘水照斷橋梁。　虹殘り水照して橋梁を斷つ。
風翻白浪花千片。　風は白浪を翻して花千片、
鴈點青天字一行。　鴈は青天に點じて字一行。

【字解】【一】海氣　海風といふが如し。
【二】蜃　蜃氣樓。
【三】橋梁　虹の形。

好著丹青圖寫取。（四）好し丹青を著して圖寫し取り、
題詩寄與水曹郎。（五）詩を題して寄せ與へん水曹郎。

【題義】夕方江樓の上から景色の鮮奇なるを眺めて此詩を作り、水部員外郎張籍に寄せたのである。

【詩意】いつしか小雨もやんで夕日が現れ、湖の色が鮮に海上から吹き來る風が涼しい。やがて雲が收まつて蜃氣樓が破れ、虹の橋が湖水を横切り、風は白浪を翻して花の飛散するが如く、雁は青天に點點として一行の字を綴つたやうである。實に一枚の彩色畫に寫し取り、詩を題して君に寄贈したいほどの好風景である。

【四】丹青　繪の具。
【五】水曹郎　水部員外郎張籍を指す。

夜招周協律兼答所贈

夜周協律を招き、兼ねて贈る所に答ふ

滿眼雖多客。開眉復向誰。眼に滿ちて客多しと雖も、眉を開きて復誰にか向はん。
少年非我伴。秋夜與君期。（一）少年は我が伴に非ず、秋夜君と期す。
落魄俱耽酒。（二）殷勤共愛詩。落魄俱に酒に耽り、殷勤に共に詩を愛す。
相憐別有意。（四）彼此老無兒。相憐むこと別に意有り、彼此老いて兒無し。

【字解】【一】期　會合の約を結ぶこと。【二】落魄　おちぶれてゐること。【三】殷勤　ねんごろに。【四】彼此　君も僕も。

【題義】夜周協律（協律は官名）を招待し、且嘗て贈られた詩に答へた詩である。

【詩意】目の前に多くの客が居るけれども、心から打解けて語らふべき人は一人もない。年の若い者は話が合はないから、君と秋の夜を一緒に送りたいものである。お互に落ちぶれて俱に酒に耽り、又共に詩を熱愛する。そればかりでなく、君も僕も老いて子のないのが、また相憐む意の深い理由であらう。

重酬周判官

重ねて周判官に酬ゆ

秋愛冷吟春愛醉。秋は冷吟を愛し春は醉を愛す、
詩家眷屬酒家仙。詩歌の眷屬酒家の仙。
若教早被浮名繫。若し早く浮名に繫がれしめば、
可得閒遊三十年。閒遊すること三十年なるを得べけんや。

【題義】重ねて周判官（判官は官名）に酬いた詩である。

【詩意】秋は詩を吟ずることを好み春は酒に醉ふことを好む。實に我は詩家の家族でもあり酒仙でもある。併し早くから名利に束縛せられる身であつたならば、三十年の久しき間閑遊を事とすることは出來なかつたであらう。

飲後夜醒

黄昏飲散歸來臥。
夜半人扶强起行。
枕上酒容和睡醒。
樓前海月伴潮生。
將歸梁燕還重宿。
欲滅窓燈却復明。
直至曉來猶妄想。
耳中如有管絃聲。

飲後夜醒む

黄昏飲散じ歸り來りて臥す、
夜半人扶けて强ひて起ち行かしむ。
枕上の酒容睡に和して醒め、
樓前の海月は潮に伴ひて生ず。
將に歸らんとする梁燕還重ねて宿し、
滅せんと欲する窓燈却つて復明かなり。
直に曉來に至りて猶妄想す、
耳中管絃の聲有るが如きを。

【詩意】夕方宴會が散じてから歸つて寢たが、夜半に人が扶け起して床に就かしめた。床に就いてからは醉も睡も醒めてしまつて、潮と俱に上つた樓前の海月を眺め、將に歸らんとする梁上の燕（燕は春來て秋歸る）が重ねて宿し、滅えかかつた窓燈が復更に明くなるのを見、夜の明けるまで耳に管絃の聲が聞えるやうに想はれた。

【字解】【一】梁燕　梁上の燕。燕は雙棲を喜ぶ。故に夫婦を稱して燕侶といふ。

代賣薪女贈諸妓

薪を賣る女に代りて諸妓に贈る

亂蓬爲鬢布爲巾。
曉蹋寒山自負薪。
一種錢塘江畔女。
著紅騎馬是何人。

亂蓬を鬢と爲し布を巾と爲す、
曉に寒山を蹋みて自ら薪を負ふ。
一種錢塘江畔の女、
紅を著け馬に騎るは是れ何人ぞ。

【題義】薪を賣る女に代つて諸妓に贈つた詩である。

【詩意】吾等は蓬の如く亂れた髮に木綿の頭巾を被り、朝早く奥山に入つて薪を採る。同じく錢塘江畔に生を享けた女でありながら、紅衣を纏ひ馬に乘るとは一體何事であらう。

【字解】【一】一種　同一の人といふ意。
【二】騎馬　堯山堂外紀に、唐時杭妓、燕會に承應すれば、皆馬に騎りて以て從ふを得たりとある。

奉和李大夫題新詩二首各六韻

李大夫が新詩二首を題せるに和し奉る各〻六韻

因嚴亭

箕潁人窮獨。蓬壺路阻難。
何如兼吏隱。復得事躋攀。

箕潁は人窮獨、蓬壺は路阻難。
何ぞ如かん吏隱を兼ね、復躋攀を事とするを得るに。

巖樹羅階下。江雲貯棟間。巖樹階下に羅り、江雲棟間に貯ふ。
似移天目石。疑入武丘山。天目の石を移すに似たり、武丘の山に入るかと疑ふ。
清景徒堪賞。皇恩肯放閒。清景徒賞するに堪へたり、皇恩肯て放閒せんや。
遙知興未足。卽被詔徵還。遙に知る興未だ足らざるに、卽ち詔して徵し還さるるを。

【字解】【一】箕潁　高士傳に、許由聞堯致天下而讓焉、乃退而遁於中嶽潁水之陽、箕山之下とある。因つて隱者の居る所を箕潁といふ。【二】蓬壺　蓬萊なり。東海中の三仙山の一。【三】吏隱　官吏と隱者。【四】天目　山の名。浙江省臨安縣の西北五十里に在り。

【題義】李大夫（諫議大夫李景檢を指すか）が新に因嚴亭と忘筌亭とに題した詩に和した六韻十二句の詩である。

【詩意】箕潁は窮獨の人の居る處で、蓬萊は路遠く險難である。されば箕潁の隱者も蓬萊の仙人も、君が吏と隱とを兼ね因嚴亭に登攀することを得るには及ばない。亭の階段の下には巖樹が羅り、棟の間には江雲が漂ひ、天目山の石を移したるが如く、武丘の山に入りしかと疑はれる。亭の清景は誠に賞するに足るが、皇恩は永く君を閒地に置くことをせず、興の未だ足らぬうちに早くも詔を蒙つて徵し還されるであらう。

忘筌亭

翠巘公門對。朱軒野逕連。翠巘は公門に對し、朱軒は野逕に連る。
只開新戶牖。不改舊風煙。只新戶牖を開き、舊風煙を改めず。
虛室閒生白。高情澹入玄。虛室は閒にして白を生じ、高情は澹くして玄に入る。
酒容同座勸。詩借屬城傳。酒は同座に勸む容し、詩は屬城に傳はるを借す。
自笑滄江畔。遙思絳帳前。自ら笑ふ滄江の畔、遙に思ふ絳帳の前。
亭臺隨處有。爭敢比忘筌。亭臺隨處に有るも、爭でか敢て忘筌に比せん。

【字解】【一】翠巘　青き峰。【二】朱軒　朱塗ののき。【三】生白　光線がさし込んで明るきこと。莊子人間世篇に虛室生白とある。【四】玄　天なり。【五】屬城　屬縣なり。【六】滄江　青青とした川。【七】絳帳　後漢書馬融傳に、馬融坐高堂、施絳紗帳、前授生徒、後列女樂とある。因つて講座を絳帳といふ。

【詩意】綠の峰は公門に對し、朱塗の軒は野徑に連り、もとの風景を損せずに新しく忘筌亭を開いた。その虛室は閑靜で明るく、高情は淡く玄天に入り、酒は一座の客に勸むべく、詩は屬縣の間に傳はるであらう。吾は今滄江の畔に貶せられて遙に絳帳の前なる君を思うてゐる。亭臺は到處にあるが忘筌亭のやうな亭は何處にもあるまい。

予以長慶二年冬十月到杭州。明年秋九月。始

與范陽盧賈汝南周元範蘭陵蕭悅清河崔求東萊劉方輿同遊恩德寺之泉洞竹石籍甚久矣及茲目擊果愜心期因自嗟云到郡周歲方來入寺半日復去俯視朱綬仰睇白雲有愧於心遂留絶句

予長慶二年冬十月を以て杭州に到り、明年秋九月、始めて范陽の盧賈・汝南の周元範・蘭陵の蕭悅・清河の崔求・東萊の劉方輿と同じく恩德寺の泉洞に遊ぶ。竹石籍甚たること久し。茲に及んで目擊し果して心期に愜ふ。因つて自ら嗟すと云ふ。郡に到りて周歲、方に來りて寺に入り、半日にして復去る。俯して朱綬を視、仰いで白雲を睇、心に愧づるあり。遂に絶句を留む

雲水埋藏恩德洞。雲水埋め藏す恩德の洞、
簪裾束縛使君身。簪裾束縛す使君の身。
暫來不宿歸州去。暫く來りて宿せず州に歸り去る、
應被山呼作俗人。應に山に呼んで俗人と作さるべし。

【字解】【一】籍甚　評判の高いこと。【二】目擊　見ること。【三】郡　杭州を指す。【四】朱綬　赤色の印綬。刺史の佩ぶる所なり。【五】簪裾　衣冠といふが如し。使君は刺史の稱。時に樂天は杭州刺史たり。【六】州・郡といふに同じ。

【題義】恩德寺に遊び感ずる所を賦した詩である。

【詩意】雲や水が深く恩德寺の洞を埋めてゐる。此に反して吾が身には、俗の俗なる衣冠が纏うてゐる。暫く此寺に遊んで一宿もせずに歸つては、此山に俗な奴だと笑はれはしまいかと恐れる。

早冬

十月江南天氣好。十月江南天氣好し、
可憐冬景似春華。憐む可し冬景春華に似たり。
霜輕未殺萋萋草。霜輕くして未だ殺らさず萋萋たる草、
日暖初乾漠漠沙。日暖にして初めて乾く漠漠たる沙。
老柘葉黃如嫩樹。老柘葉黃にして嫩樹の如く、
寒櫻枝白是狂花。寒櫻枝白し是れ狂花。
此時却羨閒人醉。此時却りて羨む閒人の醉へるを、
五馬無由入酒家。五馬酒家に入るに由無し。

【字解】【一】可憐　愛すべしの意。【二】萋萋　草の茂る貌。【三】漠漠　廣き貌。【四】老柘　柘は桑の一種。【五】狂花　くるひ咲きの花。【六】五馬　刺史の美稱。樂天時に杭州刺史たり。

【題義】初冬の光景を詠じた詩である。

【詩意】江南杭州の十月の天氣は冬とはいひながら春のやうに愛すべきものがある。霜もまだ淺くて草を枯らすには至らず、日は暖かで沙原が廣廣と乾いてゐる。桑の老樹は嫩樹のやうに黄色の葉を存し、櫻には狂咲きの花が白く咲いてゐる。自分は苟くも杭州刺史の官職を帶びてゐるので酒店に飛び込むことも出來ず、其邊に閒人どもが此景色を賞しつつ酒に醉うてゐるのを羨むのみである。

歳假內命酒贈周判官蕭協律

歳假の內酒を命じて周判官・蕭協律に贈る

共知欲老流年急。　共に知る老いんと欲して流年の急なるを、
且喜新正假日頻。　且喜ぶ新正假日の頻なるを。
鬬健此時相勸醉。　健を鬬はして此時相勸めて醉はん、
偸閒何處共尋春。　閒を偸んで何の處にか共に春を尋ねん。
脚隨周叟行猶疾。　脚は周叟に隨ひて行くこと猶疾し、
頭比蕭翁白未勻。　頭は蕭翁に比して白きこと未だ勻しからず。
歳酒先拈辭不得。　歳酒先づ拈して辭し得ず、

【字解】【一】歳假　新年の休暇。
【二】新正　新年。正月。
【三】歳酒　新年の酒。

被君推作少年人。　君に推されて少年の人と作る。

【題義】新年の休假中相俱に酒を飲み席上で周判官（前の詩に見ゆる周元範であらう）蕭協律（蕭悅であらう）に贈つた詩である。

【詩意】お互に年を取つては殊に年月の立つのが早く思はれるが、新年になつて休暇の多いのは嬉しく感ぜられる。因つて健を鬬はし暇を偸んで春を賞し酒を飲まうと相談一決して出掛けたが、吾が脚力は尙周判官よりも達者で、頭髮は蕭協律ほどに白くはない。ささるる儘に先づ杯を傾け、君等に推されて年少者にされてしまつた。（新年の祝酒は年少者から先に飲む習慣である。）

與諸客攜酒尋去年梅花有感

諸客と酒を攜へ去年の梅花を尋ねて感あり

馬上同攜今日杯。　馬上同じく攜ふ今日の杯、
湖邊共覓去春梅。　湖邊共に覓む去春の梅。
年年只是人空老。　年年只是れ人空しく老ゆ、
處處何曾花不開。　處處何ぞ曾て花開かざらん。
詩思又牽吟咏發。　詩思又吟咏を牽いて發し、

酒酣閒喚管絃來。樽前百事皆依舊。(一)點檢惟無薛秀才。

去年與薛景文同賞。今年長逝。

【題義】諸客を牽ゐ酒を携へて去年倶に賞した梅花を尋ね、感ずる所ありて作つた詩である。

【詩意】馬に乘り倶に酒を携へて湖邊に去年賞した梅を尋ねた。人は年年空しく老い朽ちて行くが、到處花は昔ながらに咲き誇つてゐる。ふと詩思が湧き起つて吟咏を發し、酒酣なるに及んで妓を喚んで管絃を奏せしめた。眼前に見る所のものはすべて去年の通りであるが、ただ薛秀才のゐないのが變つてゐる。

【字解】(一)點檢　一一しらべる。

醉送李協律赴湖南辟命。因寄沈八中丞

醉うて李協律の湖南の辟命に赴くを送り、因つて沈八中丞に寄す

(一)富陽山底樟亭畔。富陽山の底樟亭の畔、
立馬停舟飛酒盃。馬を立て舟を停めて酒盃を飛ばす。
曾共中丞情繾綣。曾て中丞と共に情繾綣たり、

【字解】(一)富陽山　杭州に在る山。樟亭は驛の名。(二)酒盃　さかづき。(三)繾綣　ねんごろなこと。(四)踟躕　徘徊なり。(五)

暫留協律語踟躕。(四)暫く協律を留めて語踟躕す。
紫微星北承恩去。紫微星北恩を承けて去り、
青草湖南稱意無。青草湖南意に稱ふや無や。
不羨君官羨君幕。君が官を羨まず君が幕を羨む、
幕中收得阮元瑜。幕中收め得たり阮元瑜。

【題義】李協律が湖南觀察府の召聘に應じて赴任するのを送り、因つて沈八中丞（湖南觀察使沈傳師であらう）に寄せた詩である。

【詩意】富陽山の麓、樟亭驛の畔で、李協律の赴任を送り、馬を立て舟を停めて別れの杯を酌みかはした。吾は曾て沈中丞とも親交があつたので、そこへ行く李協律を留めて暫く別を惜んで語り合つた。さて沈中丞は皇恩を蒙つて都を去り、今は青草湖南に觀察使となつてゐるが、果して心の滿足を得てゐるであらうか如何であらう。それは兎も角もとして僕は沈中丞の官職は敢て羨まないが、李協律といふ昔の阮瑀にも比すべき名書記官を幕中に收め得たことは健羨に堪へない。

紫微星　天帝の座なり。因つて天子の居る所をいふ。(六)青草湖　湖南省に在る湖。(七)阮元瑜　魏の阮瑀　字は元瑜。曹操に仕へて記室となり、書檄多く其手に出づ。

內道場永謹上人就郡見訪。善說維摩經。臨別請詩。因以此贈

(一)

内道場の永讃上人郡に就いて訪はる。善く維摩經を説く。別に臨んで詩を請ふ。因つて此を以て贈る

五夏登壇内殿師。　五夏登壇す内殿の師、
水爲心地玉爲儀。　水を心地と爲し玉を儀と爲す。
正傳金粟如來偈。　正に傳ふ金粟如來の偈、
何用錢塘太守詩。　何ぞ用ひん錢塘太守の詩。
苦海出來應有路。　苦海出で來る應に路有るべし、
靈山別後可無期。　靈山別れて後期無かる可けんや。
他生莫忘今朝會。　他生忘るる莫れ今朝の會、
虛白亭中法樂時。　虛白亭中法樂の時。

【字解】【一】内道場　宮中の誦經禮拜の所。【二】郡　杭州を指す。【三】五夏　李洞の題二維摩上人一詩に、諸方遊幾臘、五夏五峰銷とある、内殿は卽ち内道場。【四】心地　心なり。【五】金粟如來　佛の名。維摩詰なり。【六】錢塘太守　杭州刺史。白樂天自ら謂ふ。【七】苦海　佛語。無窮の苦境に喩ふ。【八】靈山　印度の靈鷲山をいふ。傳燈錄に釋迦在二靈山會上一、手拈二一華一示レ衆云云とある。【九】他生　來世。【一〇】虛白亭　亭の名。法樂は佛法の悅樂。

【題義】宮中の道場に奉事する永讃上人が杭州まで來訪せられた。上人は善く維摩經を講釋する。別に際して詩を請はれたので此詩を作つて贈つたといふのである。

【詩意】上人は宮中の道場に奉事するかたはら維摩詰のやうに諸方を巡錫し、水のやうに淡く執著のない心を持ち玉のやうに美しい威儀を備へてゐる。金粟如來の偈、卽ち維摩經を説く人であるから、杭州刺史などの詩を求める必要はないのであるが、請はるる儘に此詩を贈るのである。修業を積み苦海を脫して覺路を開いたが、靈山で釋迦如來に別れて後また再會の期があるであらう。願はくは來世に於ても虛白亭で俱に佛法修業の悅樂に浸つた今朝の會を忘れてくれるな。

見李蘇州示男阿武詩。自感成レ詠

李蘇州の男阿武の詩を示すを見、自ら感じて詠を成す

遙羨青雲裏。祥鸞正引雛。　遙に羨む青雲の裏、祥鸞正に雛を引くを。
自憐滄海畔。老蚌不レ生珠。　自ら憐む滄海の畔、老蚌珠を生ぜざるを。

【字解】【一】祥鸞　瑞鳥。李蘇州に喩ふ。【二】滄海　青青とした海。【三】老蚌　老いたるはまぐり。老妻に喩ふ。蚌の珠を孕むは懷姙の如し。故に之を珠胎といふ。

【題義】李蘇州（蘇州刺史李諒、字は復言）が其子阿武の作つた詩を示すのを見、感ずる所ありて作つた詩である。

【詩意】君は青雲の間に飛翔する鸞の如く、すぐれた善い子を持つてゐて實に羨ましい。僕は滄海の畔に沈淪し、然も老妻が子を生まないので悲觀してゐる。

正月十五日夜月

正月十五日の夜月

律詩　見李蘇州示男阿武詩自感成詠　正月十五日夜月

歲熟人心樂。朝遊復夜遊。
春風來海上。明月在江頭。
燈火家家市。笙歌處處樓。
無妨思帝里。不合厭杭州。

歲熟して人心樂み、朝に遊びて復夜遊ぶ。
春風海上より來り、明月江頭に在り。
燈火家家の市、笙歌處處の樓。
帝里を思ふを妨ぐる無きも、合に杭州を厭ふべからず。

【字解】【一】帝里　帝都。

【題義】杭州に在りて正月十五夜の月を觀て作つた詩である。

【詩意】豐年に遇つて人皆樂み、朝も晩も今日の佳節を祝つて遊んでゐる。折しも春風が海上から吹き來り明月が西湖の頭に上つた。杭州の町家には戸毎に燈火が輝き、あちこちの樓上から笙歌の聲が聞える。何物も我が帝都を思ふことを妨げはしないが、さりとて杭州を厭ふやうなこともない。

題州北路傍老柳樹

州北の路傍の老柳樹に題す

皮枯緣受風霜久。皮の枯れたるは風霜を受くること久しきに緣り、
條短爲經攀折頻。條の短きは攀折を經たること頻りなるが爲なり。
但見半衰當此路。但見る半衰へて此路に當るを、

不知初種是何人。知らず初めて種ゑしは是れ何人ぞ。
雪花零碎逐年減。雪花零碎年を逐ひて減じ、
煙葉稀疎隨分新。煙葉稀疎分に隨ひて新なり。
莫道老株芳意少。道ふこと莫れ老株芳意少しと、
逢春猶勝不逢春。春に逢ふは猶春に逢はざるに勝れり。

【題義】杭州の北の路傍の老柳樹に題し、暗に己の身の上を嘆じた詩である。

【詩意】皮の枯れてゐるのは久しく風霜を凌いで來たからで、枝の短いのは屢攀折せられたからである。初めは誰が植ゑたのか知らないが、今はただ半衰へて路傍に立つてゐる。年年花を著けることが少くなつたが、疎な葉が分相應に綠を呈してゐる。老株だから春意がないなどと謂ひなさるな、春に逢へば逢はぬよりまだ勝つてゐる。

【字解】【一】雪花　雪の如き柳の花。
【三】隨分　分相應に。

題清頭陀

清頭陀に題す

頭陀獨宿寺西峰。頭陀獨り宿す寺西の峰、
百尺禪菴半夜鐘。百尺の禪菴半夜の鐘。

煙月蒼蒼風瑟瑟。
更無雜樹對山松。

【題義】清頭陀（頭陀は行脚僧をいふ。清は名の上の一字を略したのである）に題した詩である。

【詩意】一個の行脚僧が寺西の峰の百尺の禪菴に獨り宿して半夜鐘をついて行ひすましてゐる。月は蒼蒼と冴え風は瑟瑟として清く、松が亭亭と高く聳えるのみで他の雜樹は少しもない。

【字解】〔一〕瑟瑟　風の音。

自歎二首

形羸自覺朝餐減。
睡少偏知夜漏長。
實事漸消虛事在。
銀魚金帶遶腰光。

【題義】身の老衰を嘆じた詩である。

【詩意】體が痩せ衰へたので朝飯の量も減つたやうに思はれ、睡れないので夜の徒に長きを覺える。實事は段段に消盡して唯虛事のみ殘り、銀魚帶が腰のまはりに空しく光を放つてゐる。

【字解】〔一〕夜漏　夜の時間。〔二〕銀魚金帶　帶についてゐる銀飾の魚。唐時五品以上の官吏の帶ぶるもの。

〔一〕
二毛曉落梳頭懶。
兩眼春昏點藥頻。
唯有閒行猶得在。
心情未到不如人。

【詩意】白毛が落ちるので朝も髪を梳るに懶く、春になつて兩眼が霞むので頻に藥を點じてゐる。たゞ昔と變らないのは散歩だけで、其樂は今でも敢て常人に劣らない。

【字解】〔一〕二毛　しらが。

〔二〕
二毛曉に落ちて頭を梳ること懶し、
兩眼春昏くして藥を點ずること頻なり。
唯閒行有りて猶在るを得たり、
心情未だ人に如かざるに到らず。

湖上醉中代諸妓寄嚴郎中

湖上醉中諸妓に代りて嚴郎中に寄す

笙歌杯酒正歡娛。
忽憶仙郎望帝都。
借問連宵直南省。
何如盡日醉西湖。
蛾眉別久心知否。

笙歌杯酒に歡娛す、
忽ち仙郎を憶ひて帝都を望む。
借問す連宵南省に直するは、
盡日西湖に醉ふに何如。
蛾眉別るる久しくして心に知るや否や、

【字解】〔一〕仙郎　嚴郎中を指していふ。〔二〕南省　老學庵筆記に、唐人以三尚書省在三大明宮之南一、故謂三之南省一とある。〔三〕盡日　終日。〔四〕蛾眉　美人。諸妓を指して言ふ。〔五〕雞舌　香の名。三省の郎官の奏事對答する時には雞舌香

雞舌含多口厭無。　雞舌含むこと多くして口厭くや無や。
還有些些惆悵事。　還些些たる惆悵の事有り、
春來山路見蘼蕪。　春來りて山路に蘼蕪を見る。

【題義】西湖の邊で酒を飲み諸妓に代つて、今長安に居る嚴郎中に寄せた詩である。堯山堂外紀に唐宋間、郡守新到、營妓皆出レ境而迎、既去猶得下以二鱗鴻一往返上とある。當時の風習を見ることが出來る。

【詩意】私共は只今笙歌杯酒の樂を盡して居りますが、ふと貴殿を憶ひ出して都の空を望みました。毎晩尚書省に宿直する今の御生活と、終日西湖の邊に醉うて暮した昔の御生活とどちらが宜しう御座いますか。お別れ申してから久しくなりましたから最早私共のことなどはお忘れであらうかと存じますが、それにつけても雞舌香も含み飽きはなさいませんか。春になつて山路に當歸（まさに歸るべしといふ意）が生えても一向貴殿のお歸りがないのを恨めしく存じてゐます。

自詠　自詠

悶發每吟詩引興。　悶發れば毎に詩を吟じて興を引き、
興來兼酌酒開顏。　興來れば兼ねて酒を酌みて顏を開く。

欲逢暇日先招客。　暇日に逢はんと欲して先づ客を招き、
正對衙時亦望山。　正に衙に對する時亦山を望む。
勾檢簿書多鹵莽。　簿書を勾檢して鹵莽多く、
隄防官吏少機關。　官吏を隄防して機關少し。
誰能頭白勞心力。　誰か能く頭白くして心力を勞せん、
人道無才也是閒。　人は道ふ無才は也是れ閒なりと。

【題義】自己の境遇を詠じた詩である。

【詩意】憂悶の起る毎に詩を吟じて興を引き、興の來るや更に酒を酌んで愁顏を慰める。暇日に逢はんとすれば先づ客を招き、正に衙參に對する時亦山を眺める。簿書を調査しても粗率が多く、官吏の邪曲を防ぐにも其機關が乏しい。何ぞ白髮の老身を以て心力を勞しようぞ、ただ不才無能だから、閑暇が多いのである。

【字解】【一】衙　衙參。朝晩羣吏の畢く大府の衙に集まり、政務を白決するを衙參といふ。
【二】勾檢　しらべて符號をつける。
【三】鹵莽は粗率なり。
【四】隄防　邪曲を防ぐこと。

【五】雞舌　雞舌香。丁香。口臭を含む習であつた。【六】蘼蕪　草の名。當歸ともいふ。孟郊の閨情と題する詩に、山上有レ山歸不レ得、湘江暮雨鷓鴣飛。蘼蕪亦是王孫草、莫下送二春香一入中容衣上とある。

晩興　晩興

草淺馬翩翩。新晴薄暮天。　草淺くして馬翩翩たり、新に晴る薄暮の天。

柳條春拂面。衫袖醉垂鞭。
立語花隄上。行吟水寺前。
等閒消一日。不覺過三年。

【字解】【一】翩翩　ひらひらする貌。【二】柳條　柳の枝。

【題義】夕方漫行した興味を述べた詩である。

【詩意】草が淺く馬の歩みも早く、日が西に傾き空が晴れてゐる。柳の枝は面を拂ひ、袖の後に鞭を垂れ、花隄の上に立話をしたり水寺の前に行吟したりするのは興が深い。こんな生活をして等閒に日を送り、遂に三年を空費してしまつた。

早興

晨光出照屋梁明。
初打開門鼓一聲。
犬上階眠知地濕。
鳥臨窓語報天晴。

早に興く

晨光出で照して屋梁明かなり、
初めて打つ開門の鼓一聲。
犬は階に上つて眠り地の濕へるを知り、
鳥は窓に臨みて語り天の晴るるを報ず。

半銷宿酒頭仍重。
新脫冬衣體乍輕。
睡覺心空思想盡。
近來鄕夢不多成。

半は宿酒を銷して頭仍重く、
新に冬衣を脫して體乍ち輕し。
睡覺め心空しくして思想盡きぬ、
近來鄕夢多く成らず。

【題義】朝早く起きた時の情景を述べた詩である。

【詩意】旭の光が明かに屋梁を照し、開門の合圖の鼓が鳴つた。犬は地の濕へるを厭うて階段の上に眠り、鳥は窓外に囀づて晴天を報じてゐる。二日醉は少し醒めたが頭がまだ重い。併し新に冬著を脫いで大に身輕になつた。目が覺めても心が空虛で何の考へもない。近來は鄕里の夢もあまり見なくなつた。

【字解】【一】宿酒　二日醉。

竹樓宿

小書樓下千竿竹。
深火爐前一盞燈。
此處與誰相伴宿。

竹樓に宿す

小書樓下千竿の竹、
深火爐前一盞の燈。
此處誰と與にか相伴ひて宿せん、

【字解】【一】一盞　燈明皿。

燒丹道士坐禪僧。燒丹の道士坐禪の僧。

【題義】夜竹樓に宿した詩である。

【詩意】書樓の下には千本の竹藪があり、埋火の爐の前には一個の燈がある。誰と共に此處に宿するかといふに、仙藥を煉る道士や坐禪する僧侶とである。

湖上招客送春汎舟　湖上に客を招き春を送り舟を汎ぶ

欲送殘春招酒伴。殘春を送らんと欲して酒伴を招く、
客中誰最有風情。客中誰か最も風情有る。
兩瓶箸下新開得。兩瓶の箸下新に開き得たり、
一曲霓裳初教成。一曲の霓裳初めて教へ成る。

時崔湖州寄新箸下酒來。樂妓按霓裳羽衣曲初畢。

排比管絃行翠袖。管絃を排比して翠袖を行らし、
指麾船舫點紅旌。船舫を指麾して紅旌を點ず。
慢牽好向湖心去。慢に牽かれて好し湖心に向ひ去れば、
恰似菱花鏡上行。恰も菱花鏡上を行くに似たり。

【題義】客を招き湖上に舟を汎べて送春の宴を張つたことを述べた詩である。

【詩意】送春の宴を張らうと思つて酒飲友達を招いた。いづれ劣らぬ風流人ばかりである。因つて此頃崔湖州（湖州刺史崔玄亮）から贈られた箸下酒二瓶を開き、妓をして霓裳羽衣一曲を舞はしむれば、更に管絃を竝べて奏し翠袖を振つて舞ふ者もある。吾は數多の船を指麾して紅の旗を振り、興に牽かれて段段湖水の眞中に向つて行けば、水上波平かにして鏡の上を行くやうである。

戲醉客　醉客に戲る

莫言魯國書生懦。魯國書生の懦きを言ふこと莫れ、
莫把杭州刺史欺。杭州刺史を把りて欺くこと莫れ。
醉客請君開眼望。醉客請ふ君眼を開いて望め、
綠楊風下有紅旗。綠楊風下紅旗有り。

【題義】醉客に戲れた詩で、前の詩と同時の作であらう。

【詩意】魯の書生を懦弱だなどと謂ふな。杭州刺史を馬鹿にしてはいけない。醉客よ、よく目を開いて見られよ。杭州刺史白樂天が綠楊風下に紅旗を振つて雄雄しくも數多の船を指麾してゐるのを見る

【字解】【一】箸下　若下に同じ。吳錄に、長興有二若溪一、南曰二上若一、北曰二下若一、村人取二下若水一釀レ酒醇美。稱二若下酒一とある。
【二】霓裳　舞曲の名。霓裳羽衣の曲。
【三】排比　ならべる。
【四】菱花鏡　鏡の名。趙飛燕外傳に婕妤上二七尺菱花鏡一奩一とある。
【三】燒丹　仙藥を煉ること。
【字解】【二】杭州刺史　樂天自ら謂ふ。欺は侮る意。

であらう。

紫陽花

招賢寺有二山花一樹一、無二人知一名。色紫氣香。芳麗可レ愛。頗類二仙物一。因以二紫陽花一名レ之。

紫陽花　招賢寺に山花一樹有り、人の名を知るものなし。色紫にして氣香ばしく、芳麗愛す可く、頗る仙物に類す。因つて紫陽花を以て之を名く。

何年植向二仙壇上一。　何の年にか植ゑて仙壇の上に向へる、
早晩移栽到二梵家一。　早晩移し栽ゑて梵家に到れる。
雖レ在二人間一人不レ識。　人間に在りと雖も人識らず、
與レ君名作二紫陽花一。　君が與に名けて紫陽花と作す。

【題義】招賢寺の名のわからぬ花を見て作つた詩である。

【詩意】此花はいつ仙壇の上に植ゑ、いつ此寺に移し植ゑたものであらうか。誠に俗氣のない高雅な花である。たとひ俗界には在つても其名を知る人もない。因つて予は紫陽花と名づけてやらう。

【字解】【一】早晩　いつ。梵家は寺。招賢寺なり。
【二】人間　俗世間。
【三】君　花を指して言ふ。

祭レ社宵興。燈前偶作

城頭傳二鼓角一。燈下整二衣冠一。
夜鏡藏レ鬚白。秋泉漱レ齒寒。

社を祭らんとして宵に興き燈前に偶作る

【題義】社は土地の神である。春の祭を春社といひ、秋のを秋社といふ。此詩は秋社の祭をする爲に夜の明けないうちに起きて用意をしたことを述べた詩である。

【詩意】城頭に夜明けを告ぐる鼓角の聲が聞える。吾は起きて燈下に衣冠を整へた。鏡を見れば夜でも白鬚がうつり、秋泉の水で口を漱げば齒にしみて寒い。自分も老境にはひつたから閑靜に暮したいと思ふが、それには病を以て官を辭する外はない。因つて年の終にでもなつたら、歸鄉の計畫を立てて見ようと思つてゐる。

【字解】【一】鼓角　角は一種の笛。【二】歸計　故鄉に歸る計畫。

欲二將レ閒送一レ老。須二著レ病辭一レ官。
更待二年終一後。支二持歸計一看。

閒を將て老を送らんと欲せば、須らく病を著して官を辭し
更に年の終るを待ちて後、歸計を支持して看ん。

閒臥

盡日前軒臥。神閒境亦空。
有二山當一レ枕上一。無二事到一心中一。
簾卷二侵一レ牀日一。屏遮二入一レ座風一。
望レ春春未レ到。應在二海門東一。

盡日前軒に臥し、神閒にして境亦空し。
山の枕上に當る有り、事の心中に到る無し。
簾は牀を侵す日を卷き、屏は座に入る風を遮る。
春を望めども春未だ到らず、應に海門の東に在るべし。

【字解】【一】盡日　終日。【二】神閑　心が靜なこと。【三】海門　錢塘江の兩岸に龕・赭の二山あり、南北對峙すること門の如し。故にいふ。

【題義】冬日閑臥の情景を敍した詩である。

【詩意】終日前軒に閑臥してゐると、心も處も閑靜である。山は丁度枕頭に當つて聳え、何一つ心に懸る事もない。簾を卷いて日の寢牀に當るやうにし、屏風を立てて風を遮つてある。早く春の來るのを待つてゐるが仲仲來ない。まだ海門の東にでも躊躇してゐるのであらう。

新春江次

新春江次

浦乾潮未應。堤濕凍初銷。
粉片妝梅朶。金絲刷柳條。
鴨頭新綠水。雁齒小紅橋。
莫怪珂聲碎。春來五馬驕。

【字解】【一】粉片　白いはなびら。【二】金絲　黃金色の絲。【三】鴨頭　水の綠なること鴨頭の色に似たるをいふ。【四】雁齒　雁行といふが如し。物の駢列する樣をいふ。【五】珂聲　珂は馬のくつわの飾の玉。【六】五馬　太守の馬。

【題義】新春の江邊の景況を述べた詩である。

【詩意】浦曲が乾いて潮は未だ上り來らず、凍が初めて釋けて堤防が濕つてゐる。梅の枝は白い花片を著け、柳の枝は金絲を綴り、水は綠色をなして鴨の頭の如く、朱塗の小橋は雁齒の如く階段をなしてゐる。春が來たので駒が勇み珂聲が特に耳立つて聞える。

春題湖上

春題湖上

湖上春來似畫圖。
亂峰圍繞水平鋪。
松排山面千重翠。
月點波心一顆珠。
碧毯線頭抽早稻。
青羅裙帶展新蒲。
未能拋得杭州去。
一半勾留是此湖。

【字解】【一】一顆　一箇。【二】碧毯　綠の毛氈。【三】青羅　青い薄絹。【四】勾留　ひきとめる。

【題義】春湖上に題した詩である。

【詩意】湖上の春色は全く一幅の畫の如く、數多の峰が四面を圍み、湖水が鏡の如く平かである。松は

山の上に排列して千重の翠を疊み、月は湖水の眞中にうつつて一箇の珠を沈め、碧毯の線の頭のやうに早稻が抽んで、綠羅の裙のやうに蒲が伸びてゐる。自分が杭州刺史を拋つて此地を去ることが出來ないのは、半は此湖上の景色が引留めてゐるからである。

失鶴

鶴を失ふ

失爲庭前雪。飛因海上風。
失ひて庭前の雪と爲り、飛びて海上の風に因る。

九霄應得侶。三夜不歸籠。
九霄應に侶を得べし、三夜籠に歸らず。

聲斷碧雲外。影沈明月中。
聲は碧雲の外に斷え、影は明月の中に沈む。

郡齋從此後。誰伴白頭翁。
郡齋此より後、誰か白頭翁に伴ふ。

【字解】【一】九霄　天上。【二】郡齋　刺史の官舍。【三】白頭翁　樂天自ら謂ふ。

【題義】鶴を失つたことを惜んだ詩である。

【詩意】吾が愛翫してゐた鶴は庭前の雪と俱に消え、海上の風に因つて飛び去つてしまつた。天上で好い仲間にでも遇つたものか最早三晩籠に歸らない。碧雲の外にも其聲を聞かず、明月の中にも其影を見ない。今日より後は誰が白頭の老刺史の相手になつて慰めてくれるであらう。誠に惜しいことをした。

自歎

自歎

宴遊寢食漸無味。
宴遊寢食漸く味無し、

杯酒管絃徒繞身。
杯酒管絃徒に身を繞る。

賓客歡娛僮僕飽。
賓客は歡娛し僮僕は飽く、

始知官職爲他人。
始めて知る官職の他人の爲にするを。

【題義】自己の老衰を嘆いた詩である。

【詩意】宴遊も寢食もすべて若い時のやうな味がなく、杯酒管絃は身のまはりに在つても一向心を惹かない。ただ賓客や僮僕の醉飽に供するのみである。自分が官職を奉じてゐるのは己の樂の爲ではなく、他人の爲であることが始めてわかつた。

同諸客攜酒早看櫻桃花

諸客と同じく酒を攜へて早に櫻桃花を看る

曉報櫻桃發。春攜酒客過。
曉に櫻桃の發くを報ず、春酒客を攜へて過る。

綠餳粘蓋杓。紅雪壓枝柯。
綠餳蓋杓に粘し、紅雪枝柯を壓す。

天色晴明少。人生事故多。
天色晴明少く、人生事故多し。

停杯替花語。不醉擬如何。　杯を停めて花に替りて語る、醉はずんば如何と擬する。

【字解】【一】酒客　酒飲仲間。【二】綠鶴　酒。盞杓は杯や柄杓。【三】天色　天氣。

【題義】諸客と俱に酒を攜へて朝早く櫻桃花を賞した詩である。

【詩意】朝、櫻桃の花が開いたと聞いたので、早速酒客を引連れて花の下で宴を催した。酒は綠色をして杯や柄杓にねばりつき、花は紅雪の如くに枝を壓して咲いてゐる。天氣の晴れることは少く、人生には故障が多いから、兎もすると可惜花を看ずに過ごしてしまふ。因つて予は花に替つて言つた。今日醉はなくてどうする積りぢや、何事を措いても醉はねばならぬと。

柳絮　柳絮

三月盡時頭白日。　三月盡くる時頭白き日、
與春老別更依依。　春と老い別れて更に依依たり。
憑鶯爲向楊花道。　鶯に憑りて爲に楊花に向ひて道ふ、
絆惹春風莫放歸。　春風を絆惹して放ち歸す莫れと。

【題義】柳花の絮の如く飛ぶ時、春の去るのを惜んだ詩である。

【詩意】三月の末になり我が頭髮も益〻白くなつた。老の身を以て春に別れるのは一層懸戀の情に堪へない。因つて鶯に賴み楊花に向つて言つた。「春風を引留めて歸り去らぬやうにしてくれ」と。

【字解】【一】依依　懸戀の貌。【二】楊花　柳の花。【三】絆惹　ひきとめる。

早飲湖州酒寄崔使君

一榼扶頭酒。泓澄瀉玉壺。　一榼頭を扶くる酒、泓澄として玉壺に瀉ぐ。
十分蘸甲酌。瀲灩滿銀盃。　十分に甲酌を蘸し、瀲灩として銀盃に滿つ。
捧出華光動。嘗看氣味殊。　捧げ出せば華光動き、嘗め看るに氣味殊なり。
手中稀琥珀。舌上冷醍醐。　手中琥珀稀に、舌上醍醐冷なり。
瓶裏有時盡。江邊無處沽。　瓶裏時ありて盡くるも、江邊沽ふ處無し。
不知崔太守。更有寄來無。　知らず崔太守、更に寄せ來る有りや無や。

【字解】【一】崔使君　使君は刺史の稱。【二】一榼　一樽といふが如し。扶頭は朝起きがけに元氣をつけること。【三】甲酌　甲で作つた柄杓。【四】瀲灩　波たつ貌。銀盃は銀杯。【五】琥珀　飴色をした鑛物の名。以て酒の色に喩ふ。李白の客中行にも、玉椀盛來琥珀光とある。【六】醍醐　最上の飲料。

【題義】湖州刺史崔玄亮から贈られた湖州の銘酒を朝飲んで此詩を作り崔玄亮に寄せたのである。

【詩意】君から貰つた一樽の眠氣覺しの酒を玉壺に瀉ぎ、十分に柄杓をさし込んで、なみなみと銀の杯に滿した。それを捧げて見ると艷艷した光が漂ひ、嘗めて見ると何ともいへぬよい味がする。見

た所は薄い琥珀色をしてゐるが、風味は醍醐のやうである。さて此酒は程なく盡きるであらうが、此邊では買ふことは出來ない。無くなつた頃には君が復贈つてくれるであらうか。

病中書事

病中事を書す

三載臥山城。閒知節物情。
鶯多過春語。蟬不待秋鳴。
氣嗽因寒發。風痰欲雨生。
病身無所用。唯解卜陰晴。

三載山城に臥し、閒に節物の情を知る。
鶯は多く春を過ぎて語り、蟬は秋を待たずして鳴く。
氣嗽は寒に因りて發し、風痰は雨ならんと欲して生ず。
病身用ふる所無きも、唯解く陰晴を卜す。

【字解】【一】三載　三年。山城は杭州を指して言ふ。【二】節物　氣節風物。【三】氣嗽　せき。しはぶき。【四】風痰　痰と共に喉から出る粘液。

【題義】病中の見聞感慨を述べた詩である。

【詩意】三年間杭州に病臥してゐて、靜に氣候風物の變を知ることが出來た。鶯は多く春を過ぎて後に啼き、蟬は秋を待たずに鳴き始める。寒い時には嗽の出方が強く、雨の降りさうな時には痰が特に出る。病める身は何の役にも立たないが、天氣の陰晴だけはよくわかる。

與微之唱和。來去常以竹筒貯詩。陳協律美而成篇。因以此答

微之と唱和するに來去常に竹筒を以て詩を貯ふ。陳協律美して篇を成す。因つて此を以て答ふ

揀得琅玕截短筒。琅玕を揀び得て短筒を截り、
緘題章句寫心胷。章句を緘題して心胷を寫す。
隨風每喜飛如鳥。風に隨ひては毎に喜ぶ飛ぶこと鳥の如きを。
渡水常憂化作龍。水を渡りては常に憂ふ化して龍と作るを。
粉節堅如太守信。粉節堅くして太守の信の如く、
霜筠冷稱大夫容。霜筠冷にして大夫の容に稱ふ。
煩君讚詠心知愧。君が讚詠を煩はして心に愧づるを知る、
魚目驪珠同一封。魚目驪珠同一に封ずるを。

【字解】【一】琅玕　石の玉に似たるもの。竹ん美していふ。【二】緘題　書いて封じる。章句は詩篇。【三】粉節　白い粉のついた節。太守は樂天自ら謂ふ。【四】霜筠　冬の竹。大夫は御史大夫。元稹時に御史大夫を兼ぬ。【五】魚目　魚の目玉。珠に似て珠にあらず。驪珠は美珠なり。莊子に千金之珠、必在二九重之淵、而驪龍頷下一とある。

【題義】元稹（字は微之。時に浙東觀察使越州刺史として杭州の鄰の越州にゐた）と唱和の詩を遣り取りするのに竹筒を用ひた。陳協律がその考案の巧なことを美めた詩を作つたので、此詩を作つて答

へたのである。

【詩意】竹を截つて短い筒となし、詩を題し筒中に封じて心中の思を傳へる。この筒が風に隨つて飛ぶこと鳥の如く速なるを喜び、又水を渡る時は化して龍となりはせまいかと恐れる。その節の堅いことは吾が信の堅きが如く、その操の高いことは微之の容貌の如くである。圖らず君（陳協律）から稱讃の詩を頂戴して、驪珠のやうな微之の詩と、魚目のやうな吾が詩とを同じに封入するのを、窃に自ら愧ぢた。

醉戲諸妓

席上爭飛使君酒。　醉うて諸妓に戲る
歌中多唱舍人詩。　席上爭ひ飛ばす使君の酒、歌中多く唱ふ舍人の詩。
不知明日休官後。　知らず明日官を休めて後、
逐我東山去是誰。　我を東山に逐ひて去るものは是れ誰ぞ。

【題義】醉うて戲に諸妓に贈つた詩である。

【詩意】お前達は酒席の上では先を爭つて俺に觴をさし、歌を歌へば多くは俺の作つた詩を歌ふが、もし明日にも俺が官を免せられたら、俺と一緒に東山に去る者が幾人あるであらう。

【字解】【一】使君　刺史の稱。樂天自らいふ。
【二】舍人　官名。中書舍人。樂天嘗て此官に任ぜらる。
【三】東山　山の名。晉の謝安、東山に隱居し妓を以て相從ふ。

北院

北院人稀到。東窗地最偏。　北院
竹煙行竈上。石壁臥房前。
性拙身多暇。心慵事少緣。
還如病居士。唯置一牀眠。

【字解】【一】房前　部屋の前。【二】一牀　一個の寢臺。

【題義】北の書院に閑居する樣を述べた詩である。

【詩意】北院は人の來ることも稀で、その東窗は最も奥まつた處に在る。茶釜の煙が竹の間に立ちのぼり、石壁が部屋の前に横はるのみで、目を碍ぐる物は何もない。性質が迂拙だから身に暇が多く、無精者だから總て俗事に關係しない。病居士でもあるかの如く寢臺に臥して惰眠を貪つてゐる。

酬周協律

五十錢塘守。應爲送老官。　周協律に酬ゆ
濫蒙辭客愛。猶作近臣看。　五十錢塘の守、應に老を送る官と爲すべし。
鑿落愁須飲。琵琶悶遣彈。　濫りに辭客の愛を蒙りて、猶近臣の看を作す。
鑿落愁へて須らく飲むべく、琵琶悶して彈せしむ。

白頭雖強醉。不似少年歡。

白頭強ひて醉ふと雖も、少年の歡に似ず。

【字解】【一】錢塘守　杭州刺史。【二】送老官　老人のひまつぶしの官職。杜甫の詩に、何時一茅屋、送老白雲邊とある。【三】醉客　文詞に長ずる人。【四】繫落　さかづき。韓愈の詩に酡顏領繫落とある。

【題義】周協律から詩を贈られたのに酬いたのである。

【詩意】以前は詞人として御寵愛を蒙り、近臣として厚遇せられたこともあつたが、五十にもなつて杭州刺史になつたのは、謂はば年寄の暇つぶしのやうなものだ。愁へては毎に杯を銜み、悶しては琵琶を彈じて自ら慰め、強ひて醉うては見るが、どうも若い時のやうに歡興が湧かない。

題石上人

石上人に題す

(一)騰騰兀兀在人間。

騰騰兀兀として人間に在り、

貴賤賢愚盡往還。

貴賤賢愚盡く往還す。

(二)羶膩筵中唯飲酒。

羶膩の筵中唯酒を飲み、

歌鐘會處獨思山。

歌鐘の會する處獨り山を思ふ。

存神不許(三)三尸住。

神を存して三尸の住するを許さず、

混俗無妨兩鬢斑。

俗に混じて兩鬢の斑なるを妨ぐる無し。

【字解】【一】騰騰　遊情に耽る貌。兀兀は動かざる貌。【二】羶膩　なまぐさき肉。【三】三尸　柳宗元の文に、道士言、人皆有三尸蟲一、處二腹中一、伺二人隱微失誤一、日庚申出譏二於帝一とある。

除却餘(四)杭白太守。

餘杭の白太守を除却して、

何人更解愛君閒。

何人か更に君が閒を愛するを解せん。

【題義】石上人といふ佛僧のことを詠じた詩である。

【詩意】上人は俗世間に優遊し、貴賤賢愚を論せず誰とでも交際し、他人の肉などを貪り食ふ中にゐて唯酒ばかり飲んで居り、歌鐘の聲を聽きつつ獨り山を思ひ、常に高潔なる精神を持して三尸蟲の腹中に住するを許さず、俗人と混じて鬢髮の白きを厭はない。併し眞に君の閒情に共鳴する者は杭州刺史白樂天を除いては外に人はあるまい。

【四】餘杭白太守　杭州刺史白樂天。

詩解

新篇日日成。不是愛聲名。

新篇日日成れども、是れ聲名を愛するならず。

舊句時時改。無妨悅性情。

舊句時時改むれども、性情を悅ばしむるに妨げ無し。

但令長守郡。不覓却歸城。

但長く郡に守たらしめば、却つて城に歸るを覓めず。

祇擬江湖上。吟哦過一生。

祇擬す江湖の上、吟哦して一生を過さんことを。

【題義】詩を好むについての辯解といふ意。

【詩意】毎日新に詩を作り時時舊作の詩句を改めるが、決して此に由つて名聲を博しようなどとは思はない。ただ吾が性情を悅ばす爲である。長く杭州刺史となつてゐることが出來れば、洛陽の都に歸らうとは思はず、江湖の間に優遊して一生を吟詠の間に送りたいと思ふ。

潮

早潮纔落晚潮來。　早潮纔に落ちて晚潮來る、
一月周流六十回。　一月周流六十回。
不獨光陰朝復暮。　獨り光陰の朝復暮なるのみならず、
杭州老去被潮催。　杭州に老い去るは潮に催さる。

【題義】潮について感想を述べた詩である。

【詩意】朝の潮がひいたと思へば忽ち又夕方の潮がさして來る。かくて一月の間に六十回滿つるのである。されば歲月に朝暮のあるのみならず、吾が杭州に老いたのは潮にも促された結果である。

聞歌妓唱嚴郎中詩因以絕句寄之　嚴前爲郡守。

歌妓の嚴郎中の詩を唱ふるを聞き、因つて絕句を以て之に寄す　嚴前に郡守と爲る。

已留舊政布中和。　已に舊政を留めて中和を布き、
又付新詞與艷歌。　又新詞と艷歌とに付す。
但是人家有遺愛。　但是れ人家に遺愛有り、
就中蘇小感恩多。　就中蘇小恩に感ずること多し。

【題義】歌妓が前の杭州刺史嚴郎中の詩を歌ふのを聞き、この詩を作つて嚴郎中に寄せたのである。

【詩意】君は今尙中和の政を留むるのみならず、更に新詞と艷歌とをも世に傳へた。君の遺愛は永く人家に存するが、中でも歌妓は特に君の恩に感ずることが深いであらう。

【字解】【一】遺愛　仁愛の後に遺留するをいふ。
【二】蘇小　蘇小小。錢塘の妓なり。

柘枝妓

平鋪一合錦筵開。　平かに鋪き一に合して錦筵開く、
連擊三聲畫鼓催。　連りに擊つこと三聲畫鼓催す。
紅蠟燭移桃葉起。　紅蠟燭移りて桃葉起り、
紫羅衫動柘枝來。　紫羅衫動きて柘枝來る。
帶垂鈿胯花腰重。　帶は鈿胯に垂れて花腰重く、

【字解】【一】桃葉　歌の名。樂府吳聲歌曲。古今樂錄に云く、晉王子敬之所レ作也、桃葉子敬妾名と。
【二】紫羅衫　紫の薄絹の上衣。
【三】鈿胯　鈿は、鈿帶とて帶に靑貝細工を施したもの。胯は股なり。
【四】陽臺　山の名。宋玉の高唐賦に

帽轉金鈴雪面廻。帽は金鈴を轉じて雪面廻る。
看卽曲終留不住。看て卽ち曲終りて留むれども住まらず、
雲飄雨送向陽臺。雲飄り雨送りて陽臺に向ふ。

【題義】柘枝は舞の名である。瑣碎錄に柘枝舞本北魏拓拔之名。易レ拓爲レ柘、易レ拔爲レ枝也。古歌舞不二相合一、自二唐人作一柘枝詞一、則舞者所レ執、與二歌者所レ措詞一稍稍相應云云とある。此れは善く柘枝を舞ふ妓についての詩である。

【詩意】一面に錦の筵を敷き詰め、鼓を三聲鳴らして合圖をすれば、燭臺を一方に片寄せて桃葉歌を歌ひ、やがて紫の薄絹を飜して柘枝の舞が始まる。鈿帶を垂れ花で飾つた腰が重げに見え、金鈴をつけた帽子と俱に雪の顏が回轉する。看てゐる中に曲が終つて、留めても聽かず、巫山の神女のやうに雲となり雨となつて陽臺に歸つてしまつた。

急樂世辭（一作二急世樂一。急樂世の辭　一に急世樂に作る。）

正抽碧線繡二紅羅一。正に碧線を抽きて紅羅に繡す、
忽聽黃鶯斂二翠蛾一。忽ち黃鶯を聽きて翠蛾を斂む。

【字解】【一】紅羅　紅の薄絹。
【二】翠蛾　美人の眉。

昔者先王嘗遊二高唐一、怠而晝寢、夢見二一婦人一、曰、妾巫山之女也、爲二高唐之客一、聞君遊二高唐一願薦二枕席一、王因幸レ之、去而辭曰、妾在二巫山之陽、高丘之阻一、旦爲二朝雲一、暮爲二行雨一、朝朝暮暮、陽臺之下とある。

秋思冬愁春悵望。秋は思ひ冬は愁へ春は悵望す、
大都不二稱レ意時多一。大都意に稱ふ時多からず。

【題義】樂府詩集に急世樂と題してある。樂曲の名である。

【詩意】一人の乙女が綠の線を以て紅の薄絹に刺繡をしてゐたが、偶〻黃鶯の聲を聽いて眉を顰めた。秋は思に沈み冬は愁へ春は悵望する。人の世は意に滿たぬ時のみ、なぜかくは多いのであらう。

天竺寺送二堅上人歸一廬山一（天竺寺にて堅上人の廬山に歸るを送る）

錫杖登二高寺一。香爐憶二舊峰一。錫杖高寺に登り、香爐舊峰を憶ふ。
偶來舟不レ繫。忽去鳥無蹤。偶〻來りて舟繫がず、忽ち去りて鳥蹤無し。
豈要レ留二離偈一。寧勞レ動二別容一。豈離偈を留むるを要せんや、寧ぞ別容を動かすを勞せんや。
與レ師俱是夢。夢裏暫相逢。師と俱に是れ夢なり、夢裏暫く相逢ふ。

【字解】【一】錫杖　佛僧の持つ杖。高寺は天竺寺を指していふ。【二】香爐　廬山の峰の名。【三】離偈　離別の詩。偈は佛家唱ふる所の詞句。

【題義】天竺寺（杭州にあり）で堅上人の廬山に歸るのを送つた詩である。

【詩意】上人は錫杖を曳いて天竺寺に登つたが、ふとまた廬山の香爐峰を憶ひ出して其處へ歸ることになつた。來るも去るも自由自在で繫がざる舟の如く鳥の蹤なきが如くである。されば別に際しても離詩を留めるでもなければ、愁容を動かすでもない。要するに人生は夢だから我も上人も皆夢で、暫く相逢うたのも亦夢である。

留題郡齋

郡齋に留め題す

吟山歌水嘲風月。　山に吟じ水に歌ひて風月に嘲る、
便是三年官滿時。　便ち是れ三年官滿つる時。
春爲醉眠多閉閣。　春は醉眠の爲に多く閣を閉ぢ、
秋因晴望暫褰帷。　秋は晴望に因りて暫く帷を褰ぐ。
更無一事移風俗。　更に一事の風俗を移す無し、
唯化州民解詠詩。　唯州民を化して詠詩を解せしむ。

【題義】杭州郡齋（刺史の官舍）を去るに臨んで後に留め題した詩である。

【詩意】杭州に來てから山水風月の間に吟誦して今日に至り、茲に三年の任期が滿ちた。春は多くは閣を閉ぢて醉眠し、秋は帷を褰げて四方を眺望して日を送り、民の風俗を一新するやうな治績は一つもなく、ただ州民を化して詩を詠ずることを覺えさせたのみである。

別州民

州民に別る

耆老遮歸路。　耆老歸路を遮り、
壺漿滿別筵。　壺漿別筵に滿つ。
甘棠無一樹。　甘棠一樹無し、
稅重多貧戶。　稅重くして貧戶多く、
農饑足旱田。　農饑ゑて旱田足る。
唯留一湖水。　唯一湖の水を留め、
與汝救凶年。　汝に與へて凶年を救はしむ。

今春增築錢塘湖隄貯水以防天旱故云。

【字解】【一】耆老　長老。【二】壺漿　壺にいれた汁。【三】甘棠　木の名。召公南國を治むる時、甘棠の下に於て訟を聽く。國人其德を慕ひて詩を作る。詩經召南に見ゆ。云く薇芾甘棠、勿レ翦勿レ伐、召伯所レ茇云云と。

【題義】杭州を去る時、州民に別れた詩である。

【詩意】我が杭州を去るに臨み、長老だちは吾が歸路を遮り盛な送別の筵を張つてくれた。吾は召公のやうに善政がないから誰も涙を流して慕ふ者はなく、稅が重かつたので貧戶が多く、旱田が多くて民が饑ゑてゐるが、ただ錢塘湖の水を後に留めて民の爲に凶荒を救ふのみである。

【餘論】錢塘湖隄についての樂天の施設は彼の錢塘湖石記に詳かである。

留題天竺靈隱兩寺

天竺・靈隱兩寺に留め題す

在郡六百日。入山十二回。
郡に在ること六百日、山に入ること十二回。

宿因月桂落。醉爲海榴開。
宿するは月桂の落つるに因り、醉ふは海榴の開くが爲なり。

天竺嘗有二月中桂子落一、靈隱多二海石榴花一也。

黃紙除書到。青宮詔命催。
黃紙除書到り、青宮詔命催す。

僧徒多悵望。賓從亦徘徊。
僧徒多く悵望し、賓從亦徘徊す。

寺闇煙埋竹。林香雨落梅。
寺闇くして煙竹を埋め、林香しくして雨梅を落す。

別橋憐白石。辭洞戀青苔。
橋に別れて白石を憐み、洞を辭して青苔を戀ふ。

石橋在二天竺一、明洞在二靈隱一。

漸出松間路。猶飛馬上杯。
漸く松間の路を出で、猶馬上の杯を飛ばす。

誰教冷泉水。送我下山來。
誰か冷泉の水をして、我を送りて山を下り來らしむる。

【字解】【一】郡　杭州をいふ。【二】黃紙　詔勅を書する紙。除書は任官の辭令書。【三】青宮　太子をいふ。【四】馬上杯　馬背の上で酒を飲むこと。【五】冷泉　亭の名。樂天に冷泉記の作あり。

【題義】杭州の天竺・靈隱の二寺に別るる時、留め題した詩である。

【詩意】吾は、杭州刺史たること六百日。（長慶二年十月杭州に至り、同四年五月杭州を去る。）其間十二回天竺山に遊んだ。月の落つるに因りて山寺に宿し、石榴の花を賞して酒に醉ふを常としたが、圖らず此度詔命が下つて太子左庶子に任ぜられることになつたので、僧徒も賓從も呆氣にとられて徘徊してゐる。時恰も五月のことで煙雨が竹林を埋め梅を落して、何處となく陰氣である。懷かしき白石の橋や青苔の洞に別を告げ、やがて松間の路を出るまで猶馬上に觴を飛ばした。冷泉の水も我を慕ふものの如く我を送つて山を下つて來た。

西湖留別

西湖留別

征途行色慘風煙。
征途の行色風煙慘たり、

祖帳離聲咽管絃。
祖帳の離聲管絃咽ぶ。

翠黛不須留五馬。
翠黛須ひず五馬を留むるを、

皇恩只許住三年。
皇恩只許す三年を住するを。

綠藤陰下鋪歌席。
綠藤陰下歌席を鋪き、

紅藕花中泊妓船。
紅藕花中妓船を泊す。

處處回頭盡堪戀。
處處頭を回らして盡く戀ふに堪へたり、

【字解】【一】征途　旅行中の道。行色は景色。【二】祖帳　送別の宴席。離聲は別れの歌。【三】翠黛　山の色。五馬は刺史の馬。【四】紅藕　紅蓮。

就中難レ別是湖邊。　就中別れ難きは是れ湖邊。

【題義】杭州の西湖に別るる時、留め題した詩である。

【詩意】今杭州を去るに臨み、途上の景色が心なしか何處となく陰慘で、宴席の別れの歌も悲しげである。皇恩は三年間杭州に住することを許したのであるから、山色が我を引留めようとしてもだめである。因つて藤の陰に歌席を設け、紅蓮の花の中に妓船を泊して名殘を惜んだ。見る處一として戀戀たらしめざるものはないが、最も別れ去るに忍びないのは湖邊の景色である。

重題別二東樓一

東樓勝事我偏知。　東樓の勝事我偏に知る、
氣象多隨二昏旦一移。　氣象多く昏旦に隨ひて移る。
湖卷二衣裳一白重疊。　湖は衣裳を卷きて白重疊、
山張二屏障一綠參差。　山は屏障を張りて綠參差。
海仙樓塔晴方出。　海仙の樓塔は晴れて方に出で、
江女笙簫夜始吹。　江女の笙簫は夜始めて吹く。

【字解】【一】勝事　勝景なり。
【二】屏障　屏風・衝立。參差は高低齊しからざる貌。
【三】海仙樓塔　蜃氣樓。

春雨星攢尋蟹火。　春雨星攢まる蟹を尋ぬる火、
秋風霞颭弄濤旗。　秋風霞颭る濤を弄する旗。

餘杭風俗、每二寒食雨後夜涼、家家持燭尋蟹、動盈二萬人一。毎歲八月迎レ濤弄レ水者、悉擧二旗幟一焉。

宴宜二雲髻新梳後一。　宴は雲髻の新に梳る後に宜しく、
曲愛二霓裳未拍時一。　曲は霓裳の未だ拍たざる時を愛す。
太守三年嘲不レ盡。　太守三年嘲りて盡さず、
郡齋空作百篇詩。　郡齋空しく作る百篇の詩。

【題義】重ねて此詩を題して東樓に別れたといふのである。

【詩意】我は盡く東樓の勝景を知つてゐる。氣象は朝晩變化し、湖は白波を立てて衣裳を卷くが如く山は綠屏を竝べ立てたやうである。晴れた日には蜃氣樓が現れ、夜は江女の笙聲が聞え、春雨の後には蟹取の燭が星の如くに點點し、秋風の吹く頃には濤を弄する旗が霞の如くに飄り、宴する時は綠の黑髮を新に梳つた妓が宜しく、曲は霓裳羽衣のまだ拍たぬ所が特に風情がある。我は杭州刺史たること三年。未だ此等の勝景を盡く賞するに至らず、ただ郡齋の中で空しく百篇の詩を作つたばかりである。

【四】雲髻　美人の髻。
【五】霓裳　舞曲の名。
【六】太守　杭州の刺史、白樂天自ら謂ふ。
【七】郡齋　刺史の官舍。

別周軍事

主人頭白官仍冷。　主人頭白くして官仍ほ冷なり、
去後憐君是底人。　去りて後憐む君是れ底人ぞ。
試謁會稽元相去。　試みに會稽の元相に謁して去らん、
不妨相見却殷勤。　妨げず相見て却つて殷勤なるを。

【題義】周軍事（周は姓）に別るる詩である。

【詩意】吾は老年になつても猶官位が卑賤であるから、吾が去つて後まで君は我を憐んでくれるであらう。君と別れ去つて會稽の元相を訪へば、元相は舊知の間柄であるから互に手を握つて平生の歡を盡すことが出來るであらう。

【字解】【一】主人　樂天自ら謂ふ。【二】會稽　越の山の名。元相は元稹なり。元稹は當時浙東觀察使を以て越州刺史を兼ぬ。嘗て宰相たりし故元相といふ。【三】殷勤　ねんごろなること。

白樂天詩後集　卷六

律詩　凡六十八首。

元微之除浙東觀察使。喜得杭越隣州。先贈長句

（按以下竝與微之和答。）

元微之浙東觀察使に除せられ、杭越の隣州を得たるを喜び、先づ長句を贈る（按するに以下竝びに微之との和答。）

稽山鏡水歡遊地。　稽山鏡水歡遊の地、
犀帶金章榮貴身。　犀帶金章榮貴の身。
官職比君雖校小。　官職君に比すれば校小なりと雖も、
封疆與我且爲隣。　封疆我と且隣爲り。
郡樓對翫千峯月。　郡樓對して翫ぶ千峯の月、
江界平分兩岸春。　江界平かに分つ兩岸の春。

【字解】【一】稽山　山の名。浙東に在り。鏡水は鏡湖。浙江省紹興縣の南に在り。【二】犀帶　官吏の用ふる帶。金章は金印。【三】封疆　國境。

杭越風光詩酒主。　杭越の風光詩酒の主、
相看更合與何人。　相看て更に何人と與にす合き。

【題義】長慶三年冬元稹（字は微之）が浙東觀察使に任せられたので、樂天は杭州に在り元稹は越州に在り、互に州を隣することになつたのを喜び、先づ此詩を元稹に贈つたのである。

【詩意】稽山や鏡湖は相俱に歡遊する地で、君も僕も犀帶金章を佩ぶる榮貴の身である。官職は僕の方が稍劣るけれども、兎も角も界を接することになつたのは嬉しい。郡樓に登つては千峯の月を對翫し、兩岸の春色を平分に賞することが出來る。かくて君と僕とは杭越二州の風光詩酒の權を司る主となり、他人をして此權に與らしめぬであらう。

答微之上船後留別

燭下樽前一分手。　燭下樽前一たび手を分ち、
舟中岸上兩廻頭。　舟中岸上兩つながら頭を廻らす。
歸來虛白堂中夢。　歸來虛白堂中の夢、
合眼先應到越州。　眼を合せば先づ應に越州に到るべし。

【題義】元稹の船に上つて杭州を去る時（元稹は同州刺史から浙東觀察使に轉任して、杭州を歷て越州に赴任したのである）留め別れた詩に答へたのである。

【詩意】燭下に別れの杯をして手を分ちしも尙眷戀の情に堪へず、君は舟中に在り、我は岸上に立つて互に頭を回らして相視た。虛白堂に歸つて寢る夜の夢に、我は先づ君の居る越州に往くであらう。

【字解】【一】虛白堂　杭州にあり。樂天の冷泉亭記に見ゆ。
【二】合レ眼　眠ること。

答微之西陵驛見寄

煙波盡處一點白。　煙波盡くる處一點白し、
應是西陵古驛臺。　應に是れ西陵古驛臺なるべし。
知在臺邊望不見。　知んぬ臺邊に在りて望めども見えず、
暮潮空送渡船廻。　暮潮空しく渡船を送りて廻るを。

【題義】元稹が西陵驛（渡の名。浙江省蕭山縣の西に在り）から寄せた詩に答へたのである。

【詩意】煙波の盡くる處に一點の白いものが見える。あれが多分西陵驛であらう。君はあの驛で我の居る杭州の方を望み見ても我を見ることは出來ずに、只暮潮の空しく渡船を送つて回るのを見るのみであつたであらう。

答微之誇越州州宅

微之の越州の州宅を誇るに答ふ

(一)賀上人回得報書。
大誇州宅似仙居。
厭看馮翊風沙久。
喜見蘭亭煙景初。
日出旌旗生氣色。
月明樓閣在空虛。
知君暗數江南郡。
除却餘杭盡不如。

【題義】元稹が越州の州宅の美を誇つたのに答へた詩である。

【詩意】賀上人が回る時に君の手紙を託せられて來た。その手紙を見ると越州の州宅は仙人の住居のやうに立派であると誇つてゐる。久しく長安の風沙を厭へる身が、蘭亭の春景色を見てはさう思ふのも無理はない。日の出づる時は旌旗が氣色を生じ、月の明かなる夜は樓閣が空中に聳え、誠に勝景には相違ない。されば江南の郡を數へて見るに、先づ吾が杭州を除いては越州に及ぶ處はないと君も自ら感じてゐるであらう。

賀上人回りて報書を得たり、
大に誇る州宅仙居に似たるを。
馮翊の風沙を看るを厭ふこと久し、
蘭亭の煙景を見るを喜ぶ初。
日出でて旌旗氣色を生じ、
月明かにして樓閣空虛に在り。
知んぬ君が暗に江南郡を數ふるに、
餘杭を除却せば盡く如かざるを。

【字解】【一】賀上人　僧侶の名か。報書は元稹からの手紙。
【二】馮翊　長安附近の地。
【三】蘭亭　地名。浙江省紹興縣の西南に在り。永和九年三月三日に王羲之等四十一人が修禊の會を開いた處。
【四】餘杭　杭州。

微之重誇州居其落句有西州羅刹之謔。因嘲

茲石。聊以寄懷

微之重ねて州居を誇る。その落句に西州羅刹の謔あり。因つて茲石を嘲り、聊か以て懷を寄す

君問西州城下事。
醉中疊紙爲君書。
(三)嵌空石面標羅刹。
(四)壓捺潮頭敵子胥。
神鬼曾鞭猶不動。
波濤雖打欲何如。
誰知太守心相似。
抵滯堅頑兩有餘。

【題義】元稹が重ねて州宅の美を誇り、仙都難書亦難書、暫合登臨不合居、繞郭煙嵐新雨後、滿山樓閣上燈初、人聲曉動千門闢、湖色宵涵萬象虛、爲問西州羅刹岸、濤頭衝突近何如といふ詩を樂

君西州城下の事を問ふ、
醉中紙を疊みて君が爲に書す。
嵌空たる石面羅刹を標し、
壓捺する潮頭子胥に敵す。
神鬼曾て鞭てども猶動かず、
波濤打つと雖も何如せんと欲する。
誰か知らん太守心相似たり、
抵滯堅頑兩ながら餘有るを。

【字解】【一】落句　末句。
【二】西州　杭州を指して言ふ。羅刹は梵語にて惡鬼なり。咸淳臨安志に秦望山近東南有大石崔嵬、横截江濤、商船海船經此、多風浪傾覆。因呼羅刹とある。
【三】嵌空　うつろなこと。朱熹の詩に竅石何嵌空とある。
【四】壓捺　おしつける。
【五】子胥　伍子胥を祠つてある胥山ならん。

天に寄せた。その末句に西州羅刹といふ諧語があるので、羅刹石を嘲りて此詩を作り元稹に寄せたのである。

【詩意】君が吾が杭州の事を問ふので醉中筆を走らせて此返書を認める。仰せの通り吾が州には羅刹のやうな大石が横はり、胥山をも壓倒するほどの潮が來る。其石は鬼神の力を以てするもビクともせず大濤が打つてもどうすることも出來ない。然も杭州刺史たる吾の心はよく此石に似て、抵滯堅頑更に輪をかけたほどである。

張十八員外以新詩二十五首見寄。郡樓月下吟翫通夕。因題卷後。封寄微之

張十八員外新詩二十五首を以て寄せらる。郡樓の月下に吟翫通夕す。因つて卷後に題し、封じて微之に寄す

(一)秦城南省清秋夜。
(二)江郡東樓明月時。
去我三千六百里。
得君二十五篇詩。

【字解】【一】秦城　長安をいふ。南省は、尚書省をいふ。大明宮の南に在る故なり。
【二】江郡　杭州を指していふ。
【三】陽春曲調　すぐれてよき詩。

(三)陽春曲調高難和。
(四)淡水交情老始知。
坐到天明吟未足。
重封轉寄與微之。

陽春の曲調高くして和し難く、淡水の交情は老いて始めて知る。坐して天明に到り吟じて未だ足らず、重ねて封じ轉寄して微之に與ふ。

宋玉の文に爲陽春白雪、國中屬而和者、不過數十人、以是其曲彌高、其和彌寡とある。【四】淡水交情　水の如く淡き交、禮記に君子之交如水とある。

【題義】張籍（十八は輩行。員外は官名。水部員外郎）が新作の詩二十五首を樂天に寄せたので、樂天は郡樓の月下に通宵その詩を吟賞し、因つて此詩を其詩卷の末に書き添へ、封じて元稹に寄せたのである。

【詩意】君は清秋の夜に長安の尚書省に宿直し、我は杭州の樓上に明月を仰いでゐる。相距ること三千六百里なるも君が二十五篇の詩を得て感慨に堪へない。君の詩は極めて高尚であるから和韻しようと思ふが容易に出來ず、ただ老いて益ます交情の深いのを謝するばかりだ。夜の明けるまで吟賞しても尚足らず、重ねて元微之の處へ轉送する。

酬微之

微之に酬ゆ

微之の題に云ふ、郡務稍簡なり。因つて舊詩を整集し并せて封章諫草を連綴刪削する暇を得たり。箱笥に繁委し、僅んど百軸に踰ゆ。偶ま自歎を成し、兼ねて樂天に寄す。

(一)章諫草。繁委箱笥。僅踰百軸。偶成自歎。兼寄樂天。

滿帙塡箱唱和詩。

帙に滿ち箱に塡つる唱和の詩、

少年爲レ戲老成レ悲。　少年にして戲を爲し老いて悲を成す。
聲聲麗曲敲二寒玉一。　聲聲の麗曲寒玉を敲き、
句句妍辭綴二色絲一。　句句の妍辭色絲を綴る。
吟翫獨當明月夜。　吟翫獨り當る明月の夜、
傷嗟同是白頭時。　傷嗟同じく是れ白頭の時。
由來才命相磨折。　由來才命相磨折す、
天遣レ無レ兒欲レ怨レ誰。　天は兒無からしむるも誰をか怨みんと欲する。

微之句云。天遣二兩家無二嗣子一。欲下將二文字一付中他誰上。故以レ此擧レ之。

【題義】元稹に酬いた詩である。

【詩意】君と唱和した詩が箱に滿つるほどある。此等の詩は若い時は戲となしたものであるが老いては悲の料となる。併しいづれも金玉の響を發し色絲を綴つたやうな妍麗の作で、月明の夜に獨り吟賞して倦むを知らず、共に白頭の老翁となつたことを悲んでゐる。由來才學も運命も挫けてしまつたのであるから、天が子を授けてくれなくとも誰を怨まんやうもない。

微之整二集舊詩及文筆一爲二百軸一。以二七言長句一寄二樂天一。樂天次レ韻酬レ之。餘思未レ盡。加二爲六韻一

微之舊詩及び文筆を整集して百軸となし、七言長句を以て樂天に寄す。樂天韻に次して之に酬ゆ。餘思未だ盡きず、六韻を加へ爲す

海內聲華併在レ身。　海內の聲華併せて身に在り、
篋中文字絕無レ倫。　篋中の文字絕えて倫無し。

美二微之一也。

遙知獨對二封(一)章草一。　遙に知る獨り封章の草に對するを、
忽憶同爲二獻(二)納臣一。　忽ち憶ふ同じく獻納の臣たりしことを。
走レ筆往來盈二卷軸一。　筆を走らして往來卷軸に盈ち、

予與二微之一。前後寄和詩數百篇。近代無二如レ此多有一也。

除(三)官遞互掌二絲綸一。　官に除せられて遞互に絲綸を掌る。
制(四)從二長慶一辭高古。　制は長慶よりして辭高古、

予除二中書舍人一。微之撰二制詞一。微之除二翰林學士一。予撰二制詞一。

【一】封章　封事なり。天子に上つる書。
【二】獻納臣　諫官なり。
【三】除レ官　官職に任ぜられる。絲綸は詔書。卽ち制詞。
【四】制　詔勅文。長慶は穆宗の年號。

微之長慶初知制誥。文格高古。始變二俗體一。攜者效レ之也。

詩到二元和一體變新。　詩は元和に到りて體變じて新なり。

衆稱二元白一爲二千字律詩一。或號二元和格一。

各有二文姫一才稚齒。　各〻文姫有りて才に稚齒、

蔡邕無レ兒。有二女琰字文姫一。

俱無二通子一繼二餘塵一。　俱に通子の餘塵を繼ぐ無し。

陶潛小兒名通子。

琴書何必求二王粲一。　琴書何ぞ必ずしも王粲を求めん。

與レ女猶勝レ與二外人一。　女に與ふるは猶外人に與ふるに勝れり。

【題義】元稹が自作の舊詩を整集して百軸となし、七言律詩を作つて樂天に寄せたので、樂天は其韻に次して酬いたが、餘意が尚盡きないので、更に此十二句の詩を作つたのである。

【詩意】君の聲名は天下に滿ち、篋中の詩文は比ぶ者がない。嘗て作つた封事に對して君は獨り往時を思うてゐるであらうが、我も君と同じく諫官たりし頃を追憶してゐる。互に贈答した詩篇は今や積んで卷軸に滿ち、官に任ぜられた時互に詔書を認め、君が知制誥になつてから詔書の文辭が高古にな

【五】元和　憲宗の年號。

【六】稚齒　幼少。

【七】王粲　三國魏の人。蔡邕粲を見て之を奇として曰く、吾之に如かず、吾が家の書籍文章盡く當に之に與ふべしと。

り、君と僕との唱和の爲に元和の詩風が一變した。惜いかな君も僕も子がなく、ただ女子の幼少なのがあるだけである。併し琴書を與へるには強ち王粲を求めなくとも、女に與へるのは赤の他人に與へるよりはましである。

答二微之一詠レ懷見寄

微之の懷を詠じて寄せられしに答ふ

閣中同直前春事。　閣中同じく直す前春の事、

船裏相逢昨日情。　船裏相逢ふ昨日の情。

分レ袂二年勞二夢寐一。　袂を分ちて二年夢寐を勞し、

竝レ牀三宿話二平生一。　牀を竝べて三宿平生を話る。

紫微北畔辭二宮闕一。　紫微の北畔宮闕を辭し、

滄海西頭對二郡城一。　滄海の西頭郡城に對す。

聚散窮通何足レ道。　聚散窮通何ぞ道ふに足らん、

醉來一曲放二歌行一。　醉ひ來りて一曲歌行を放にす。

【題義】元稹が詠懷の詩を寄せたのに答へた作である。

【字解】【一】閣中　役所。

【二】紫微　星の名。天帝の座なり。因つて天子の居る所に喩ふ。

【三】滄海　海なり。

【四】歌行　詩歌。

【詩意】君と一緒に役所に宿直したのは去年の春の如く、船で相逢うたのは昨日のやうに思はれる。相別れてから二年の間夢寐を勞してゐたので、君は三晩吾が家に泊り寢臺を竝べて平生の情を語つた。今や俱に帝京を去つて滄海の西で郡守となつてゐる。聚散窮通は言ふに足らない。ただ酒を借り放歌して憂を遣るのみである。

酬微之誇鏡湖

微之の鏡湖を誇るに酬ゆ

我嗟身老歲方徂。　我は身老いて歲方に徂くを嗟き、
君更官高興轉孤。　君は更に官高くして興轉た孤なり。
軍門郡閣曾閒否。　軍門郡閣曾て閒なりや否や、
禹穴耶溪得到無。　禹穴耶溪到るを得しや無や。
酒盞省陪波卷白。　酒盞は波の白を卷くに陪するを省き、
骰盤思共彩呼盧。　骰盤は彩の盧を呼ぶを共にせんことを思ふ。
一泓鏡水誰能羨。　一泓の鏡水誰か能く羨まん、
自有胷中萬頃湖。　自ら胷中萬頃の湖あり。

【字解】【一】軍門　元稹は浙東觀察使だからいふ。郡閣は刺史の役所。元稹は越州刺史を兼ねてゐた。
【二】禹穴　越の會稽山の一峰なり。上に禹の廟あり。耶溪は浙江紹興縣に在る溪の名。西施の紗を浣ひし處なり。
【三】酒盞　酒杯。
【四】骰盤　雙陸の盤。彩は采に同じ、さいころ。盧は樗蒲の五子皆黑なるをいふ。最勝の采なり。

微之詩云。孫園虎寺隨宜看。不必遙遙羨鏡湖。故以此言戲答之。

【題義】元稹の鏡湖（浙江省紹興縣の南に在り）の美を誇つた詩に酬いたのである。

【詩意】我は身の老い歲の去るを嗟いて居るが、君も官が高くて歡興を俱にする者のないのを恨んでゐるであらう。職務にも閑暇があるであらうか。禹穴や若耶溪あたりをも見物したであらうか。我は不幸にして快飲を俱にすることが出來ないが、共に雙陸を鬪はして全勝を博したいものだと思つてゐる。併し一個の鏡湖などは敢て羨まない。吾が胷中には萬頃の大湖があるから。

雪中卽事寄微之

雪中卽事微之に寄す

連夜江雲黃慘澹。　連夜の江雲黃にして慘澹、
平明山雪白糢糊。　平明の山雪は白くして糢糊。
銀河沙漲三千里。　銀河沙漲る三千里、
梅嶺花排一萬株。　梅嶺花排す一萬株。
北市風生飄散麪。　北市風生じて散麪を飄し、
東樓日出照凝酥。　東樓日出でて凝酥を照す。

【字解】【一】連夜　通宵。慘澹　陰慘な貌。
【二】平明　夜が明けて。糢糊は分明ならぬ貌。
【三】銀河　あまのがは。
【四】散麪　うどんこ。
【五】凝酥　牛乳の固まりしもの。バタ。

誰家高士關門戸。　誰が家の高士ぞ門戸を關し、
何處行人失道途。　何の處の行人ぞ道途を失ふ。
舞鶴庭前毛稍定。　舞鶴庭前毛稍定まり、
擣衣碪上練新鋪。　擣衣碪上練新に鋪く。
戲團稚女呵紅手。　戲團稚女紅手を呵し、
愁坐衰翁對白鬚。　愁坐の衰翁白鬚に對す。
壓瘴一州除疾苦。　瘴を壓して一州疾苦を除き、
呈豐萬井盡歡娛。　豐を呈して萬井盡く歡娛す。
潤含玉德懷君子。　潤は玉德を含みて君子を懷ひ、
寒助霜威憶大夫。(六)　寒は霜威を助けて大夫を憶ふ。
莫道煙波一水隔。　道ふ莫れ煙波一水隔たると、
何妨氣候兩鄉殊。　何ぞ妨げん氣候兩鄉殊なるを。
越中地暖多成雨。(七)　越中は地暖にして多く雨を成す、
還有瑤臺瓊樹無。(八)　還瑤臺瓊樹有りや無や。

【六】大夫　御史大夫。御史を霜憲といふ。刑罰を掌る官なればなり。

【七】越中　元稹の居る處。

【八】瑤臺瓊樹　雪の爲に臺は玉の如く樹木は瓊の如くなること。

【題義】雪中の光景を敍して元稹に寄せた詩である。

【詩意】通宵黃色な雲が天を罩めてゐたが、夜が明けてから見ればほの白く山に雪が降つてゐる。三千里外の銀河に水が漲り、北市に風が起つて餖飣粉を吹き飛ばし、東樓に日が昇つて凝酥を照すのではないかと疑はれる。高士は門を閉ぢて出でず、行人は道に迷ひ、庭は舞鶴の毛が落ちてゐるやうに見え、砧石の上に練絹を敷いたやうに見える。手團を弄する女兒は寒さの爲に紅の手を息で熱め、愁へ坐する老翁は白鬚と相對してゐる。此雪こそ一州の爲に病菌を壓伏し、萬井（二十五家を一井といふ）の爲に豐年の歡を呈し、その德は君子に似て玉の如く、その威力は御史に似て霜の如くである。君の居る越州とは川一筋を隔つるのみであるが、氣候の相違は非常なもので、君の方では土地が暖だから雨が多く、恐らくかかる瑤臺瓊樹の美を見ることは出來まい。

醉封詩筒寄微之

醉うて詩筒を封じ微之に寄す

一生休戚與窮通。(一)　一生の休戚と窮通と、
處處相隨事事同。　處處相隨ひて事事同じ。
未死又隣滄海郡。(二)　未だ死せずして又滄海郡に隣し、

【字解】【一】詩筒　詩を入れて送る竹筒。後集卷五に與微之一唱和、來去常以竹筒貯詩、陳協律美而成篇云云と題する詩がある。

無兒俱作白頭翁。兒無くして俱に白頭の翁と作る。
展眉只仰三杯後。眉を展べて只仰ぐ三杯の後、
代面唯憑五字中。面に代へて唯憑む五字の中。
爲向兩州郵吏道。爲に兩州の郵吏に向ひて道ふ、
莫辭來去遞詩筒。來去して詩筒を遞するを辭する莫れ。

【題義】醉うて詩筒を封じて元稹に寄せた詩である。

【詩意】君と僕とは殆ど一生の休戚窮通を同じうし、まだ死にもせずに海に近き州を鄰し（元は越州に在り、白は杭州に在り）俱に白頭翁となつても嗣子がない。愁を霽らす爲に三杯の酒を傾けた後は面會する代りに詩を贈答して互に慰めてゐる。故に兩州の郵吏に申し附けるが、二人の詩筒を遞送することを厭うてはならぬぞ。

【一】休戚　よろこび、かなしみ。
【二】滄海郡　海に近き州。
【三】代レ面　面會の代り。五字は五言詩。
【四】

除夜寄微之

除夜微之に寄す

鬢毛不レ覺白毿毿。鬢毛覺えず白くして毿毿、
一事無レ成百不レ堪。一事成る無く百堪へず。

【字解】【一】毿毿　毛の長き貌。

共惜盛時辭闕下。共に惜む盛時闕下を辭せしを、
同嗟除夜在江南。同じく嗟く除夜江南に在るを。
家山泉石尋常憶。家山の泉石は尋常に憶ひ、
世路風波子細諳。世路の風波は子細に諳んず。
老校於君合先退。老いて君に校ぶれば合に先づ退くべし、
明年半百又加三。明年半百又三を加ふ。

【題義】長慶三年十二月晦日の晩に元稹に寄せた詩である。

【詩意】鬢の白毛がいつの間にか長く伸び、何一つ仕出かした事はなく盡く任に堪へない。今のやうな結構な治世に帝京を離れてゐることを共に惜み、今年の大晦日にも江南に沈滯してゐるのを同じく嗟き、故郷の泉石は常に胸中に往來し、世路の艱難は十分に嘗め盡した。來年は僕は五十三になる。君より年上であるから一足先きに引退すべきである。

【一】尋常　平生。いつも。
【二】子細　こまかに。
【三】半百　五十歳。
【四】

早春西湖閒遊。悵然興レ懷。憶與微之同賞。因思在レ越官重事殷。鏡湖之遊或恐未レ暇。偶成二十八韻一寄二微之一

早春西湖に閒遊し悵然として懷を興し、微之と同じく賞せしことを憶ふ。因つて思ふ越に在りて官重く事殷く、鏡湖の遊或は未だ暇あらざらんことを恐る。偶〻十八韻を成して微之に寄す

上馬復呼賓。湖邊景氣新。
管絃三數事。騎從十餘人。
立換登山屐。行攜漉酒巾。
逢花看當妓。遇草坐爲茵。
西日籠黃柳。東風蕩白蘋。
小橋裝鴈齒。輕浪甃魚鱗。
畫舫牽徐轉。銀船酌慢巡。
野情遺世累。醉態任天眞。
彼此年將老。平生分最親。
高天從所願。遠地得爲鄰。
雲樹分三驛。煙波限一津。

馬に上りて復賓を呼ぶ、湖邊景氣新なり。
管絃三數事、騎從十餘人。
立ちて山に登る屐を換へ、行くゆく酒を漉す巾を攜ふ。
花に逢ひては看て妓に當て、草に遇ひては坐して茵と爲す。
西日黃柳を籠め、東風白蘋を蕩かす。
小橋鴈齒を裝ひ、輕浪魚鱗を甃む。
畫舫は牽きて徐に轉じ、銀船は酌みて慢く巡る。
野情世累を遺れ、醉態天眞に任す。
彼此年將に老いんとす、平生分最も親し。
高天願ふ所に從ひ、遠地鄰たるを得たり。
雲樹三驛を分ち、煙波一津を限る。

酬嗟寸步隔。却厭尺書頻。
浙右稱雄鎭。山陰委重臣。
貴垂長紫綬。榮駕大朱輪。
出動刀槍隊。歸生道路塵。
鴈驚弓易散。鷗怕鼓難馴。
百吏瞻相面。千夫捧擁身。
自然閒興少。應負鏡湖春。

酬りて寸步の隔たるを嗟き、却つて尺書の頻なるを厭ふ。
浙右雄鎭と稱せられ、山陰重臣に委す。
貴くして長紫綬を垂れ、榮えて大朱輪に駕す。
出づるときは刀槍の隊を動かし、歸るときは道路の塵を生ず。
鴈は弓に驚きて散じ易く、鷗は鼓を怕れて馴れ難し。
百吏は瞻て面を相し、千夫は捧げて身を擁す。
自然に閒興少し、應に鏡湖の春に負くべし。

【字解】【一】登山屐　屐は木履なり。南史謝靈運傳に、嘗著木屐、上山則去其前齒、下山去其後齒とある。【二】漉酒巾　宋書陶潛傳に、潛値其酒熟、取頭上葛巾漉酒、畢還復著之とある。【三】鴈齒　鴈の齒のやうに排列すること。【四】畫舫　美しく飾りし船。【五】銀船　杯なり。【六】世累　世間のわづらひ。【七】彼此　君も僕も。【八】尺書　書信。【九】浙右　浙西。元稹の居る處。雄鎭は重鎭といふが如し、觀察使たるをいふ。【一〇】山陰　縣の名。浙江紹興府治、元稹の居る處。【一一】鏡湖　湖の名。越州に在る。

【題義】早春の時節に西湖（杭州に在り）に閒遊し悵然として感懷を興し、嘗て元稹（字は微之）と遊賞を共にせしことを憶ふにつけ、元稹の越州に在り官重く事繁くして鏡湖に遊ぶ暇もなくて居るならんと思ひ、この十八韻三十六句の長詩を作つて元稹に寄せたのである。

【詩意】嘗て馬に乘り君と相携へて春西湖の邊に遊んだことがあつた。管絃など兩三件の道具を用意

し、十餘人の從者を率ゐ、謝靈運に倣つて山に登る下駄をはき換へ、陶淵明のやうに酒を漉す頭巾を携へ、花に逢へば美妓と見做し、草に遇へば茵となし、いつしか時が移つて西日が淺黄色の柳の新芽を照し、東風が浮草を漂蕩し、橋は雁の齒のやうに列び、波は魚鱗を疊んだやうであつた。其間に畫舫を泛べて乘りまはし、さしつおさへつ慢に酒を酌み、かくて世上の煩累を遺れて自然の情に任せて樂んだ。さて君と僕とは親友の間柄で、嘗て共に宮中に仕へたが、今や漸く老境に入り、遠地に謫せられ各〻州を鄰して刺史となり、雲樹が三驛を分ち煙波が一津を限るのみであるが、往來して遊ぶことも出來ず、ただ徒に書信を往復するのみである。君は浙東觀察使兼越州刺史の榮職に在りて、紫の印綬を垂れ朱塗の馬車に乘り、數多の衞兵を從へて出入するので、雁は驚き散じ鷗は怕れて馴れず、羣吏は瞻ぎて面を見、千夫は君を包圍するといふ有樣で、自然に閑興がなくなるであらうから、恐らくは鏡湖の春を賞することも出來ずに居るであらう。お氣の毒な次第だ。

答微之見寄　時在郡樓對雪。

微之の寄せられしに答ふ　時に郡樓に在りて雪に對す。

可憐風景浙東西。
先數餘杭次會稽。
禹廟未勝天竺寺。
錢湖不羨若耶溪。
擺塵野鶴春毛暖。
拍水沙鷗濕翅低。
更對雪樓君愛否。
紅欄碧甃點銀泥。

【字解】【一】可憐　愛すべしといふ意。浙東西は浙江の東と西。【二】餘杭　杭州。樂天の居る處。會稽は越州。元稹の居る處。【三】禹廟　會稽山上に在り、禹の廟がある。天竺寺は杭州に在る。【四】錢湖　錢塘湖卽ち西湖。杭州に在る。若耶溪は越州に在り、西施浣紗の處。

【題義】元稹が詩を寄せたのに答へた作で、時に樂天は郡樓に雪を眺めてゐたので末に雪景を點出したのである。

【詩意】浙江の東西に跨つて景色の好い處といへば先づ杭州が第一で次は越州であらう。越の禹廟は杭の天竺寺に劣り、杭の西湖は越の若耶溪に勝る。況んや野鶴沙鷗の飛びかふ景色は、畫の如くである。今吾は雪樓に在りて朱塗の欄干や綠の甃の上に銀泥の點點してゐるのを見てゐるが、君も此景色を愛するのであらう。

得湖州崔十八使君書。喜與杭越隣郡。因成長句代賀。兼寄微之

湖州の崔十八使君の書を得たるに、杭。越と隣郡たるを喜ぶ。因つて長句を成

して賀に代へ、兼ねて微之に寄す

三郡何因此結緣。
貞元科第忝同年。
故情歡喜開書後。
舊事思量在眼前。
越國封疆呑碧海。
杭城樓閣入青煙。
吳興卑小君應屈。
爲是蓬萊最後仙。

【字解】【一】使君　刺史の稱。
【二】三郡　湖州、杭州、越州。
【三】貞元　德宗の年號。同年は同年の及第者。
【四】封疆　くにざかひ。
【五】吳興　縣の名。湖州なり。
【六】蓬萊　仙山の名。

三郡何に因りてか此に緣を結べる、貞元の科第の同年を忝くす。故情歡喜す書を開く後、舊事思量眼前に在り。越國の封疆碧海を呑み、杭城の樓閣青煙に入る。吳興は卑小君應に屈すべし、是れ蓬萊最後の仙たらん。

眞元初同登科。崔君名最在後。當時崔自詠云、人間不會雲間事。應笑蓬萊最後仙。

【題義】湖州刺史崔玄亮（十八は其輩行）の書信に杭・越と州を接するを得たことを喜んでゐる。因つて此詩を作つて賀詞に代へ、兼ねて元稹に寄せたのである。

【詩意】我等三人は貞元十六年の進士であるが、不思議な緣で各〻杭・越・湖三州の刺史になつた。君の手紙を見れば歡喜の情が覗はれて、色色昔の事を憶ひ出して目のあたり見るが如くである。越州は境を碧海に接し、杭州は城樓が青煙の中に聳え、皆風景の好い處である。ただ君の居る湖州だけは稍劣つてゐる。是れぞ蓬萊の最後の仙たる所以であらう。

早春憶微之

早春微之を憶ふ

昏昏老與病相和。
感物思君歎復歌。
聲早雞先知夜短。
色濃柳最占春多。
沙頭雨染斑斑草。
水面風驅瑟瑟波。
可道眼前光景惡。
其如難見故人何。

昏昏として老と病と相和す、物に感じ君を思ひて歎じて復歌ふ。聲早くして雞先づ夜の短きを知り、色濃にして柳最も春を占むること多し。沙頭雨は染む斑斑たる草、水面風は驅る瑟瑟たる波。道ふ可けんや眼前光景惡しと、故人を見難きを其如何せん。

【字解】【一】昏昏　ぼんやりすること。
【二】斑斑　色のまだらなこと。
【三】瑟瑟　珍寶の名。
【四】故人　舊友。元微之を指す。

【題義】春の初に元稹を憶うて作つた詩である。

【詩意】吾は昏昏として老病相仍り、事に感じ君を思うて歎息してゐる。今や春になつて夜が短く柳

の絲が色濃くなり、沙頭の草は雨に潤うて斑をなし、水面には風に吹かれて漣が立つてゐる。この好景色に對して君と共に賞することの出來ないのが遺憾である。

重寄別微之

重ねて微之に寄せ別る

憑仗江波寄一辭。　江波に憑仗して一辭を寄す、
不須惆悵報微之。　須ひず惆悵して微之に報ゆるを。
猶勝往歲峽中別。　猶勝れり往歲峽中の別、
灩澦堆邊招手時。　灩澦堆邊手を招きし時。

【題義】重ねて元稹に寄せて別れを告げた詩である。

【詩意】江波に託して一詩を君に寄せるが決して悲觀してはゐない。先年峽中で別れた時、灩澦堆のあたりで手招きしたのよりは遙にまさつてゐるから。（今度は洛陽へ歸るのだからであらう。）

【字解】〔一〕憑仗　よろ。たのむ。

〔二〕灩澦堆　四川省奉節縣の西南瞿唐峽口に在り。

看常州柘枝贈賈使君

（一）

常州の柘枝を看て賈使君に贈る　按するに此より下、杭州より洛に歸るの詩ならん。

按此下、自杭州歸洛詩。

莫惜新衣舞柘枝。　新衣を惜む莫くして柘枝を舞へ、
也從塵汗汗霑垂。　也塵汗汗霑の垂るるに從せよ。
料君卽却歸朝去。　料るに君卽ち却つて朝に歸り去らば、
不見銀泥衫故時。　銀泥衫の故からん時を見ざらん。

東寄楊柳枝舞衫、偶因嘗酒試衫、輒成長句寄謝之を參照せよ。

【題義】常州の柘枝舞を看て常州刺史賈君に贈つた詩である。

【詩意】新衣を惜まずに柘枝を舞ひ、塵や汗の汗すに任せるがよい。君が今にも都に召還されることにならば、銀泥衫の古くなる間がないであらうから。

【字解】〔一〕常州　今の江蘇省武進縣。柘枝は舞の名。〔二〕賈使君　使君は刺史の稱。賈は其姓。

〔三〕銀泥衫　舞ふ時に著る上著。後集卷十三の劉蘇州寄三釀酒糯米一李浙

汴河路有感

汴河の路にて感あり

三十年前路。孤舟重往還。　三十年前の路、孤舟重ねて往還す。
繞身新眷屬。舉目舊鄉關。　身を繞れるは新眷屬、目を舉ぐれば舊鄉關。
事去唯留水。人非但見山。　事去りて唯水を留め、人非にして但山を見る。
啼襟與愁鬢。此日兩成斑。　啼襟と愁鬢と、此日兩ながら斑を成す。

【字解】〔一〕人非　人が死んでしまつて居ない。

【題義】汴河（杭州から洛陽に往く途中の河）の路を過ぎて感ずる所を述べた詩である。

【詩意】嘗て三十年前に通つた路を今復孤舟を泛べて過ぐるに、身の周りに居る者は皆其後に生れた家族で、目を擧げて見る所は昔ながらの村邑である。往事は名殘すら留めず唯此河を存し、當時の人は皆死んで但山を見るのみである。涙にぬれた衣襟も愁鬢も今は共に朽ち果てて斑になつてしまつた。

埇橋舊業

別業埇城北。抛來二十春。
改移新逕路。變換舊村隣。
有稅田疇薄。無官弟姪貧。
田園何用問。强半屬他人。

埇橋の舊業

別業埇城の北、抛ち來る二十春。
改め移す新逕路、變換す舊村隣。
稅有りて田疇薄く、官無くして弟姪貧し。
田園何を用てか問はん、强半他人に屬す。

【字解】【一】埇橋　淮泗の間に在る地名。舊業はもとの別莊。【二】別業　別莊。【三】田疇　田畠。【四】强半　太半。半以上。

【題義】埇橋の舊莊についての詩である。

【詩意】埇橋の北の別莊に別れ去つてから已に二十年になる。今來て見れば大分徑などが改まり、昔の村の樣も變つてゐる。稅が高くて田畑も瘠せ、官がないので家族が飢ゑて、大半は人手に渡つてしまつたから、今更田地を問ふ氣もしない。

茅城驛

汴河無景思。秋日又淒淒。
地薄桑麻瘦。村貧屋舍低。
早苗多間草。濁水半和泥。
最是蕭條處。茅城驛向西。

茅城驛

汴河は景思無く、秋日又淒淒。
地薄くして桑麻瘦せ、村貧くして屋舍低る。
早苗多く草を間へ、濁水半泥に和す。
最も是れ蕭條たる處、茅城驛の向西。

【字解】【一】汴河　河の名。【二】淒淒　涼しき貌。【三】蕭條　淋しき貌。

【題義】茅城驛（渡場の名。陝津ともいふ）で作つた詩である。

【詩意】汴河のあたりは至つて殺風景で、且秋の日が小寒を感ずる。地味がわるいので桑麻が瘦せ、村が貧しいので民家もみすぼらしく、苗には多く雜草がまじり濁水が半泥を混じてゐる。茅城驛の西のあたりは就中最も物淋しい。

河陰夜泊憶微之

河陰夜泊微之を憶ふ

憶君我正泊行舟。
望我君應上郡樓。
萬里月明同此夜。
黄河東面海西頭。

【題義】河陰は縣の名。今の河南省孟津縣の東に在る。此詩は河陰に夜船を泊して越州の元稹を憶うたのである。

【詩意】我は黄河の東に在り、君は碧海の西(越州)に在り、萬里を距てて同じく今夜の明月を觀ながら、我は此地に舟を泊して遙に君を憶うてゐるが、君は郡樓に上つて我を望んでゐるであらう。

杭州廻舫

自別錢塘山水後。
不多飲酒懶吟詩。
欲將此意憑廻棹。
與報西湖風月知。

【字解】【一】錢塘　杭州。
【二】廻棹　歸る舟。
【三】西湖　杭州に在る湖。

【題義】杭州に船を歸す時の詩である。

【詩意】杭州の山水に別れて後は、酒を飲む氣にもなれず詩を吟ずる氣にもなれない。吾が此眷戀の情を歸る舟に託し、西湖の風月に知らせようと思ふ。

途中題山泉

決決涌岩穴。濺濺出洞門。
向東應入海。從此不歸源。
似葉飄辭樹。如雲斷別根。
吾身亦如此。何日返鄉園。

【字解】【一】決決　泉の涌く貌。【二】濺濺　流れ注ぐ貌。【三】根　雲根、即ち石なり。【四】鄉園　故鄉。

【題義】途中で山の泉に題した詩である。

【詩意】混混と岩の間から湧き出し洞門から濺濺と流れ注ぎ、葉の飄りて樹を辭するが如く、雲の斷えて石に別るるが如く、東流して海に入り再び源には歸らない。吾が身も此泉と同じである。いつになつたら故鄉に還れるであらう。

欲到東洛得楊使君書因以此報

東洛に到らんと欲して楊使君の書を得。因つて此を以て報ゆ

向公心切向財疎。　公に向ひては心切にして財に向ひては疎なり、
淮上休官洛下居。　淮上官を休めて洛下に居る。
三郡政能從獨步。　三郡の政能獨歩に從す、
十年生計復何如。　十年の生計復何如。
使君灘上久分手。　使君灘上久しく手を分ち、
別駕渡頭先得書。　別駕渡頭先づ書を得たり。
且喜平安又相見。　且喜ぶ平安にして又相見んことを、
其餘外事盡空虛。　其餘の外事は盡く空虛なり。

【題義】將に東洛に著かうとする時楊使君（使君は刺史の稱）から手紙が屆いた。因つて此詩を作つて答へたのである。

【詩意】君は公事には熱切であるが私財には極めて淡泊である。嘗て淮上の官を罷め去つて今は洛陽に閑居してゐる。以前は三州の刺史として無雙の治績を擧げたが、已に閑居十年であるから恐らく生計も豐ではあるまい。君とは使君灘の邊で久しき前に別れたが、今又別駕渡の邊で君の手紙を受取つた。遠からず君の無事な顏を見られると思へば何よりも嬉しい。其他の事はどうでも構はぬ。

【字解】【一】淮上　淮水のほとり。洛下は洛陽。【二】政能　政績。【三】使君灘　長江の上流の灘の名。【四】別駕渡　渡場の名。

洛下寓居

秋館清涼日。書因解悶看。
夜牕幽獨處。琴不爲人彈。
遊宴慵多廢。趨朝老漸難。
禪僧敎斷酒。道士勸休官。
渭曲莊猶在。錢塘俸尙殘。
如能便歸去。亦不至飢寒。

【題義】洛陽に寓居することを述べた詩である。

【詩意】秋の涼しい日には心の愁を霽らす爲に書を讀み、夜の淋しい時には自ら慰める爲に琴を彈じ、出歩くのが大儀だから遊宴を罷め、朝廷に參趨するさへ困難になつた。禪僧からは酒を禁ずるやうに敎へられ、道士からは官を辭することを勸められる。渭水のほとりには舊宅がまだ存し、杭州刺史の俸も殘つてゐる。如し能く便ち歸り去るも、亦飢寒に至らず。

【字解】【一】渭曲　渭水のほとり。莊は村莊。【二】錢塘　杭州。【三】歸去　官を罷め去ること。

時に溜めた俸給がまだ殘つてゐるから、實は今すぐ官を罷めても飢寒の心配はない。

味道　道を味ふ

叩齒晨興秋院靜。齒を叩き晨に興きて秋院靜なり、
焚香冥坐晚牕深。香を焚き冥坐して晚牕深し。
七篇眞誥論仙事。七篇の眞誥は仙事を論じ、
一卷檀經說佛心。一卷の檀經は佛心を說く。
此日盡知前境妄。此日盡く知る前境の妄なるを、
多生曾被外塵侵。多生曾て外塵に侵さる。
自嫌習性猶殘處。自ら嫌ふ習性の猶殘れる處、
愛詠閒詩好聽琴。閑詩を詠ずるを愛し琴を聽くを好む。

【題義】道を修することを述べた詩である。

【詩意】秋庭の靜な處で朝早く起きて齒を叩き、奧深い窓の下で夜香を焚いて默坐し、眞誥や檀經を讀んで老佛の敎を悟り、茲に始めて從來の境地の妄なるを知り、すべての生活が外塵に汙されてゐたことを知つた。併し詩を詠じ琴を聽くのを好むことは今尙習癖として殘つてゐる。

【字解】【一】叩齒　導引法の一なり。秋院は秋の庭。【二】冥坐　目を閉ぢて坐する。【三】眞誥　書名。梁の陶宏景の撰。言ふ所皆仙眞眞訣を授受する事。凡て七篇二十卷。【四】習性　習慣。習癖。

好聽琴　琴を聽くを好む

本性好絲桐。塵機聞卽空。本性絲桐を好み、塵機聞けば卽ち空し。
一聲來耳裏。萬事離心中。一聲耳裏に來れば、萬事心中を離る。
清暢堪銷疾。恬和好養蒙。清暢にして疾を銷するに堪へ、恬和にして蒙を養ふに好し。
尤宜聽三樂。安慰白頭翁。尤も宜しく三樂を聽き、白頭翁を安慰すべし。

【字解】【一】絲桐　琴なり。【二】塵機　俗念。【三】三樂　列子天瑞篇に、孔子遊三於泰山一、見三榮啓期鹿裘帶索、鼓レ琴而歌一、孔子問曰、先生所三以樂一何也、曰、天生三萬物一、惟人爲レ貴、而吾得レ爲レ人、是一樂也、男尊女卑、吾既得レ爲レ男矣、是二樂也、人生有レ不レ見三日月一、不レ免三襁褓一者一、吾既已行年九十矣、是三樂也とある。【四】白頭翁　樂天自ら謂ふ。

【題義】琴を聽くのを好むことを述べた詩である。

【詩意】吾は琴を聽くのを好んで、一たび聞けば俗念が一掃され、萬事が心中から離れ去つてしまふ。琴の音の清澄さは能く疾を除くに足り、その穩和さは愚蒙を養ふに宜しい。だから榮啓期の歌つた三樂でも聽けば忽ち白頭翁を慰めることが出來る。

愛詠詩　詩を詠ずるを愛す